
夢の中で～不思議な三国志～

雪蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の中で不思議な三国志

【Nコード】

N1229D

【作者名】

雪蓮

【あらすじ】

想いは時を超え、切れぬ絆で結ばれる。姿が変わろうが、仕えるべく君主は只一人。暗闇に眠りし五つの魂が解き放たれし時、その物語の幕はあがる……………

めっちゃ、間が空いてしまい申し訳ありません！！

近々、修正含め、更新を再開する予定でございます。

個人的に三国志はすごく好きで、今回の話しには、三国志演義での人間関係などもおり混ぜていますので、ちょっと、変わった人間関係の部分があります。

また、感想に多かったので書きます。

武将につきましては、作者の好みで、性別を入れ替えている武将が
ございますので、ご了承頂けた方のみ、本文へお進み下さい。

プロローグ

「もう、この国は滅びの道を辿るしかない。願わくば、民を宝とし、悪には力を持って自らの意思を貫ける人物が現れん事を祈るのみ……」

今日も空は快晴で、その光は庭の池に反射して、木々を照らしていた。その庭の隅にある小さな道場で俺は一人朝の日課を行っていた。

「セイツ！ ヤッ！」

道場の中には、俺が振る木刀の風切り音と踏み込みの時のキュッ！キュッ！っという音が、何度も木霊していた。

「……999！ 1000！！」

朝の日課を終えると、俺は道場に大の字に寝そべっていた。

俺の名前は清水木葉^{しみずのきは}。はつきり言って、自分の名前はあまり好きじゃない。だって、木葉だぞ！？ 女の子なら似合うかも知れないが、俺は立派な男だ。

まあ、そのおかげで強くなろうと剣術をじいちゃんに教わって、今では、それなりに強くなったと思っっている。しかし、じいちゃんが去年他界して、今は一人で稽古の毎日だ。

ちなみに身体だけじゃなくて、頭も鍛えてるぞ。剣の道は心技体全て揃ってこそ完成すると、じいちゃんの口癖だった。

「よう！ 相変わらず早いな」

俺の前に急に見知った顔が飛び出してきた。

「よう！ もうそんな時間か？」

こいつは、同じ学校の工藤信也^{くわだのしんや}。俺の親友だ。

大の字に寝ていた俺は、足を振り子のようにして飛び起きた。

「じゃあ、仕度して来るからちょっと待っててくれ」

「しかし、あんな広い家にお前一人だけってうらやましいよなあ」

家を出て学校に向かって歩いてる途中、信也が唐突に話題を振ってきた。

「うらやましいか？ 俺は一人だと大変だから早く母さん達に戻って来て欲しいけどな」

俺の両親は共働きをしていて、仕事の関係で家を開けることが多い。なので、実質俺は一人暮らしをしているようなもんだった。

「ところでよ？ そろそろ良いんじゃないの？」

「ふう〜、またその話しかよ……」

俺は信也の言葉を聞き、呆れたように息を吐いた。

「そう言つなよ。ちょっとで良いんだよ。ちょっとで……な！ お願ひ！！！」

信也が何をこんなに必死になつてゐるのかと言つと、俺の家にある蔵の中を見せると言つことだった。

じいちゃんがまだ生きていた頃に、俺も何度か蔵を見せてくれとじいちゃんに言ったことがあつた。しかし、じいちゃんは蔵の中だけは、何故か俺に見せてくれなかつた。それどころか、近づくと怒られたので、近づくこともできなかつた。

それを俺がちよつとした拍子に信也に話してしまつてから、信也は毎度毎度飽きもせず蔵の中を見せてくれと言つてきた。

正直なところ、俺も中を見てみたい気持ちはある。でも、じいちゃんが近づくだけで怒るなんてそつとつ危険な物でも入つてゐるのではないかと、恐怖も感じていた。

「木葉も見てみたいんだろ？ あゝ、いいつて、俺達何年付き合つてると思つてんだ。お前の気持ちは何となくわかるよ。だからさゝゝ、いいだろ！？」

ふゝゝ、さすがに毎日このやり取りも疲れてくる。俺も見たくないわけじゃないし、どつちかつて言つと見みたいし……………

「わかつたよ」

「え？」

「何驚いてんだよ？ 今日、蔵の中見に行くから、学校終わつたら家に来いよ」

「おおお！？ 木葉……やつと……やつと、俺の気持ちが通じたんだな。うれしいぞ……！」

「やめい！ 気持ち悪い……！」

俺は抱きついてきた信也を引き剥がした。

「それより学校行くぞ。このままじゃ遅刻ギリギリだぞ」

「おう！ 放課後が楽しみだぜ！！」

その日の放課後、俺と信也は友人達との付き合いを一切断わり、一直線に俺の家に向かった。

そして俺は荷物を置くと、しまっていた蔵の鍵を持って庭に出た。

「くうくう、いよいよだな。隠された蔵の秘密は既に俺達の手の先……」

「楽しみなのは良いけど、何があるかわかんないんだから気をつけろよ」

「わかってるって。それより、早く開けようぜ！」

俺は念の為、片手に木刀を持っていた。用心にこした事はないからな。

そして持っていた鍵を、蔵に掛かっている錠の鍵穴にゆっくりと差し込んでいき、もうこれ以上入らない位置までくると、鍵を右に回した。

すると、カチャリ！ っと、言う小さい音と同時に鍵が開いた。

「じゃあ、開けるぞ？」

「あ、ああ……」

さっきまではしゃいでいた信也も、いざ開けるとなると緊張を隠せない様だった。

ギイイイ……………つと、不気味な音を出しながら開いていく扉の隙間から光が差し込み、真っ暗な蔵を照らしていった。

「な、なんだよ、これ……………？」

俺達の目に映ったのは蔵の中央に並べられた五本の武器。

槍の様な物が二本に弓と矢。更に、人が持てるのかわからないほど大きな雑刀と槍の様だが、刃の部分が波をうったように曲がっている武器。

「何だよ、あれ？」

「俺に聞くなよ。と、とにかく、あれ以外何もないみたいだし閉めるぞ？」

「……………ああ」

信也も俺と同じ様に、あの武器に何かを感じた様で、逃げるように蔵から出た。

そして信也が出たのを確認すると、俺はしっかりと錠を掛けた。

その後、信也は何も言わずに帰って言った。

その夜、俺が寢床につこうと廊下を歩いていると、どこからかカタ、カタ！と、物音が聞こえてきた。

「な、なんだ、この音？まさか、泥棒か？」

俺はいつも稽古で使っている木刀を持って、音のする方に向かっていった。

そして音を追って辿り着いたのは、夕方に信也と一緒に開けた蔵だった。

「く、蔵の中から音が……………」

扉の錠はしつかりと閉まっっていて中に入る事はできないはずだが、音は確実に蔵の中から聞こえていた。

しかし、人間の好奇心とは不思議なもので、いくら恐怖があろうとも、それを見て見なくなる。

俺は急いで蔵の鍵を取りに行き、再び蔵の前に来た。

そして夕方と同じ様に、鍵を差し込み錠を開けた。

ギィィィ……………っと、言う扉の開く音が、夕方の何倍にも不気味に聞こえた。

「……………!?!」

扉を開けた俺の目に飛び込んで来たのは、カタカタと音を立てている五本の武器だった。

「……………う……………そ、だろ……………? 何だよ、これ?」

現実では有り得ない事が、今俺の前で起こってる。何故? だとか言う疑問など、真っ白になっている俺の頭には浮かんでこなかった。

そして次の瞬間、五本の武器は激しい光を放った。

「な、なんだ!?!」

逃げる間もなく、光は俺を包み込んだ。

「……ちよつと……ねえ、起きなさいよ!」
「うわぁ!?!」

耳元で響いた声に驚いて俺は飛び起きた。

「やっと起きたか。さあ、寝ぼけてる暇はないよ。今から君は英雄にならなければいけないのよ。そして、その物語はすでに始まってしまった。また、会えるといいわね」

そう言っつて、そいつはわけの解らない事を一方的に話して消えてしまった。

そして、先ほどと同じ様に激しい光が俺を包んでいった。

「不思議な世界」

「……ん？」

眩しい光に当てられ、俺は目を覚ました。

起きた俺の目の前に広がるのは、広大な大地。道路も民家もない。

「……は、ははは……夢か。そうだ夢なんだ!？」

俺がもう一度寝ようとする、馬のヒツメの音が近付いて来た。

「おい！ 止まれ!！」

そう言つと、馬の嘶きとともに俺の側で、ピタリと止まった。

「なんだ？ この辺じゃ見ねえ服を着てやがる」

三人組みの内の一人在、まるで品定めでもするかのように俺の周りを回り始めた。

三人組みはコスプレでもしているのかと思う様な服装に、頭と首に黄色い布のようなものを巻いていた。

「な、なんだ。あんたたちは!？」

「なんだあ？ 俺達のことを知らないのか？」

知らないのか？ って言われても、今初めて会ったんだからわかるわけがない。俺が答えないと、三人の内の一人在が痺れを切らした様に言った。

「こいつ！ぶざけてやがるのか!？」

そう言って、腰にさしていた刀を抜き、俺の首に突き立てた。

「まあ、待て」

三人の中のリーダー格の男がそれを制した。

「なあ、兄さん。悪いことは言わねえ。身に着けている物を置いていけ。でないと、本当に首と胴体が離れるぜ」

いきなり出て来て、カツアゲか？ と、首に突き立てられた刀に触れた。

「イツ！」

すると、指からはジワリと血が滲み出て来た。それを見た俺の全身から冷たい汗が流れた。何故こんな状況になったのかわからないが、今自分の首に真剣が突き付けられている状況は理解出来る。

俺は相手に悟られない様に、周りに武器になりそうな物がないか探した。すると、あの夜に持っていた木刀が、先ほど寝ていた場所のすぐ近くにあった。

「わかった。身に着けている物は全て置いて行くから、命だけは助けてくれ」

「最初からそうすればいいんだよ」

勝ち誇ったように、男は俺の首に突き立てた刀を引っ込めようとした。その瞬間、俺は男を思いつ切り蹴り飛ばし、落ちている木刀を拾った。

「ぐわっ！ ……て、てめえ」

蹴り飛ばされた男はすぐに起き上がり、俺に向けて刀を構えた。

（こいつ、ど素人か？ 構えが目茶苦茶だ）

普段から稽古をしていた木葉にとって、相手の力量は構えを見た
だけである程度想定できた。

「死ねー！」

男の振り下ろした刀を木刀で受け止めたが、それはやってはいけないことだった。普段真剣を使っていないから出てしまうことだが、真剣を持った相手の攻撃を木刀で受ければ、当然木刀が切られてしまう。今回は奇跡的に、半分程切られただけだった。

しかし、いずれにしても刀を受け止めることが出来ない分、こちらの不利には変わりない。その後、連続して繰り出される刀を紙一重で何とか躲していたが、そんな事が長く続くはずもなかった。

真剣を相手にしている重圧で、精神的にも身体的にも疲れが始め、段々とかわした刀と自分との距離が縮まってきていた。そしてついに、刀を躲しきれなくなった俺は、木刀で真剣を受け止めてしまった。もちろん、先ほどとは違い、俺の木刀はスパツと真っ二つにされてしまった。

「さあ、もう逃げられねえぞ。逃がす気もないけどな。がはははは
！！」

（くそ！ こんなわけわからない所で、俺は殺されるのか？）

男が刀を振り下ろそうした時、馬の嘶きとともに勇ましい声が響き渡った。

「待てい！ 貴様ら、黄色い布を巻いているという事は、黄巾賊に間違いないな」

「なんだ、お前は！？」

「貴様らのような者に、名乗る名など持ち合わせておらぬ！！」

ほんの一瞬だった。先ほどまで目の前にいた三人組みの首が、ただの一振りで中に舞っていた。

「お怪我はありませんか？」

その時、俺は初めて助けてくれた奴の顔を見た。すると驚くことに、そこには女の子の顔があった。差し出された手は俺よりも小さく、腰下まである髪を後ろで結び、何よりその瞳はまるで黒曜石をはめ込んだ様に黒く美しかった。

「どうしたのですか？」

「いや、なんでもない」

つい見とれてしまっていたことに、恥ずかしくなり顔を背けた。するとその子は、俺の手を握り立たせてくれた。

「あ、ありがとう」

こんなに綺麗な子は、今まで見たこともなかった。しかしその子をよく見て見ると、着物の様な見たこともない衣装を纏っていた。

「あの……」

つと、俺が言いかけた時、遠くで黒い煙が空に向かって伸びているのを見た。彼女もそれを確認したようで、その煙に鋭い視線を送っていた。

「まさか!？」

彼女は慌てて馬に飛び乗った。

「待ってくれ! あれはなんなんだ?」

「あれは、先ほど貴方を襲った奴等の仲間が街を襲っているに違いない。私はあの街の人々を助けに行く!! はっ!」

そう言った彼女は馬にまたがり、風のように駆けて行った。

「なんなんだ? ここは?」

立て続けに起こる理解しがたい出来事に、俺は混乱していた。しかし、そんな中で今走り去った彼女を思い出していた。

「……さっきの奴等の仲間って言ったな? もしかしたら、それすらも真剣何じゃ? だったら、彼女一人だと危険じゃないか!？」

俺は急いで彼女の後を追いかけた。

「出会い〜義兄妹の契り〜」

俺は全力で街に向かって走った。心臓が早鐘のように鼓動を鳴し、限界を報せる様に身体には痛みが走った。しかし、彼女の危険を思えば我慢出来た。

暫く走り続けていると、街の入り口についた。そして、そのままの勢いで街の中に飛び込むと、そこはまるで地獄絵の様だった。民家は焼かれ、人の死体が辺りに無数転がっていた。

「ひ、ひでえ……これを全部、俺を襲った奴等の仲間がやったのか？」

目の前に広がっている光景にショックを受けていると、民家の裏側から声が聞こえた。俺はそつと、民家の影から覗きこんだ。

そこには、弱々しく助けを求める小さな子供と、その子に向かって刀を突き立てている男の姿があった。

「まだ、ガキが残っていたのか。しかし、いくらガキとは言え、大賢良師 張角様の教えを受け入れない者は、死ねしかない」

男は今にも少女に向かって刀を振り下ろそうとしていた。俺は無我夢中で近くに落ちていた刀を拾い、飛び出した。

「待て！」

俺の声に男はゆっくりと顔をこちらに向け、にたりと笑った。

「なんだ、お前は？ まさか、俺様と殺ろうつてのか？」

「そ、その子から離れろ！！」

俺は今、自分の中にある勇気を全て振り絞った。しかし、真剣での戦いは、先ほどのと合わせてもまだ2回目。俺の手足は、ぶるぶると小さく震えていた。それを見た男は声を上げて笑った。

「どうした？ 手足が震えてるぞ？」

「うるさい！ こ、これは武者震いだ！」

男は有利を確信すると、笑いながら向かってきた。力強く振り下ろされた刀を真面に受けてしまえば、俺と男の体格差から見ても、圧倒的に不利だと思った俺は、真面に受けず衝撃を流す様にして男の攻撃をさばいた。だがそれも先ほどと同様に真剣に慣れていない俺と、毎日振り回しているであろう男の差が出始めた。そして次の瞬間、男は俺の間をつき、刀を弾き飛ばした。しかし、男は俺にとどめを刺しにこず、無防備の俺に対して信じられない言葉を言った。

「お前、見所があるぞ。どうだ？ 俺達の仲間にならないか？」

俺は男の言っていることを聞き、自分の耳を疑った。今の今まで自分を殺そうとしてた奴の言葉なんか信じらる訳ないだろ。だが、心のどこかでは、それで命が助かるならと思っっている自分がいた。しかし俺の目に写った1人の女の子の存在が、そんな気持ち打ち消してくれた。

「俺はお前らの仲間になるつもりはない！ 殺すなら殺せ！ だが、

あの娘には手を出すな！」

「馬鹿な奴だ。死ねー！！！」

男が刀を振り上げた時、1人の女の子が走ってきて俺の前に立つ

た。

「待て！ お前こそ死ね！ 悪党が！！」

その女の子は、一振りのもと、男を切り捨てた。

「おい。大丈夫だったか？」

そう言っつて俺は、差し伸べられた手を握った。

初めに助けてくれた女の子と印象は違い、髪は短く、瞳は少々茶色がかつた様な色をしていた。

そして、俺が女の子の手を借りて立ち上がると、遠くから誰かを捜す声が聞こえてきた。

「益徳えきとく！！！！」

「あれは！？ 雲長うんちやうの姉者だ！ おうい！ こうっちだ！」

その声に気付いたのか、声の主は俺達に近付いて来た。その声の主は、最初に俺を助けてくれた女の子だった。

「こうっちは大体片付けた。そうっちはどうだ？」

「見ての通り、片付いたぜ」

(雲長？ 益徳？ どこかで聞いたことがあるような……)

すると、俺達に気づいて近づいてきた女の子が、俺の顔を見てもう一人の女の子の顔を見た。そして、今度は二人で俺の顔を覗き込んできた。

「あ、あの、俺の顔がどうかしたのかな？」

二人はその場で片膝を地面につけて、俺の向かって頭を下げた。

「貴殿を天からの使者と御見受けしました。この世は乱れ黄巾賊と言う族が、民を殺し、略奪を繰り返す始末です。どうか我等とともにこの大地をお救い下され」

「い、いきなり何を言っているんだ!？」

俺が、混乱をしている中、髪の毛の長い女の子が話しを続けた。

「私は弱き民を救うため河東郡より出でて幾月、この身も心も捧げられる誠の主を探しておりました。その旅の途中この益徳と出会い、義姉妹の契りを結びました」

「まさか、俺がその誠の主だとも言うつもりなのか？」

すると、今度は俺を助けてくれた髪の毛の短い女の子が言った。

「その通りだ。あんた、腕は未熟だがさっきの言葉、己を犠牲にしてまで少女を救おうとした心に俺は惹かれた。何より、その不思議な衣装。そんな服は見たことねえ。きっと、相当な身分のお方だと見た」

そして、二人はぐつと深く頭を下げ、同時に言った。

「我らとともに天下泰平に力を御貸し下さい」

急にそう言われて、状況もわからない、何故自分がここにいるのかさえ……………俺はただの学生で、こんな殺し合いなんて出来るはずがない。

俺は、先ほどの少女や襲われた街を見渡した。当然、この街だけ

でなく他にも街はたくさんあるはずだ。何も関係ない人々が死んでいくのは正直見るに耐えない。しかし、俺には人々を救う力なんて

.....

そんな不安そうな俺の顔を見た髪の長い女の子が言った。

「ご安心下さい。儀は我らにあります。そして、御身は我らがこの命に変えても御守り致します」

そう言った女の子の瞳を見た俺は、不思議と自分にも出来るのではないかと言う気持ちにさせられた。こんな自分でも力になれるならと、拳を握り締めると二人の目を見て言った。

「わかったよ。俺の力で何処まで出来るかわからないけど、協力するよ」

それを聞いた女の子の顔から笑顔がこぼれた。

「それから、君達の名前を覚えてもらっても言いかな？」

女の子は、ハッと手を口元に当てて慌てて言った。

「申し訳ございません。私は、性は関、名は羽、字を雲長あまなと申します」

続いて、髪の短い女の子が名前を言った。

「俺は、性は張、名は飛、字を益徳だ」

関羽と張飛だって！？ 自分が憧れを抱いていた武将が二人も目の前にいる。そして、この二人の名前を聞き、俺は少し状況を理解

した。

どういう理屈かわからないが、どうやらここは三国志に關係のある世界のような。目の前に関羽と張飛がいると言ふことは、俺が劉備ということなのか？　そして、現在は黃巾の乱の真っ只中。

「俺は清水木葉」

「木葉殿か。何か呼びにくいな。これからは兄貴って呼ばせてもらうよ」

張飛の言葉に俺は、ピンと来た。ここは桃園じゃないけど、義兄弟の契りだな。そして、それを驚いたように見ている関羽を俺は手招きして呼び寄せた。

「張飛がこう言ってるけど、関羽はどう？　俺が張飛と義兄弟の契りを交わすつてことは、関羽とも兄妹になるつてことだろ？」

「確かに貴殿の言うとおりだ。しかし、よろしいのですか？」

「ああ、俺は構わないよ」

「それでは喜んでそのお話しお受け致します」

そして、酒などない今、俺は近くに落ちている刀を拾い、空に向かって掲げた。その俺の刀に重なるように関羽の青龍偃月刀（せいりゅう偃月刀）と張飛の蛇矛だまづが空に掲げられた。

関羽の持つ青龍偃月刀は、重さ82斤（1斤 約600グラムであるから82斤だと約49.2kgになる）もある大薙刀である。とても目の前にいる女の子の細腕で持てる代物ではないと思うが、それを軽々と振るっているところを見るとやはり関羽だと感心する。そして、張飛の持つ蛇矛は、一丈八尺（約5m45cm）もの鋼矛だ。関羽同様にこんなものをよく軽々と振れるものだと感心する。

「義勇軍」

俺と関羽は、暫く襲われた街の被害を見て回っていた。そして、その途中で俺は殺された人たち、一人一人に手を合わせながら歩いていた。

「兄者。黄巾賊のやつらはきつとまた、この街を襲ってくるに違いない」

「それは、確かに考えられるな。関羽や張飛が追い払ったことから、きつと次はもつと大人数でくるだろう」

すると、情報収集に行っていた張飛が遠くから手を振ってこちらに走ってきた。

「おい、姉者！ 兄貴！ 向ここの酒場に生き残った街の人たちが集まっているらしいぞ」

「それは本当か、益徳！？ 兄者。そこで、義勇兵を募ってみては如何でしょうか？」

確かに、黄巾賊の大群と戦うにはこちららも準備をしておかなくてはいけない。特に今の俺達には兵力がまったくと言ってない。これでは、いくら関羽と張飛が強いからと言っても戦うのは無理だ。

「張飛。その酒場に案内してくれ！」

「はいよ！ こっちだ！」

張飛に案内されて行った酒場の中に入るとそこには傷ついた人々や、次の襲撃に恐れて俯いている街の人たちの姿があった。

「兄者……」

「ああ、大分まいってるみたいだな」

重たい雰囲気が出た店全体を包み込む中、張飛が大声を上げて人々に呼びかけた。

「てめえら！！　こんな所でうじうじしていても黄巾賊の奴等はまた攻めてくる！！　自分達の街を自分達で守るんだ！！」

しかし、張飛の叫びは虚しく店に響き、人々はあちらこちらで、勝てないとか死んだ方がいいなどと、ネガティブな感情を口に出していた。

それを見た張飛が、怒りを表情に出して前に進もうとした。その時、関羽がそれを制した。

「皆の気持ちはよくわかる。我らは幾度となく黄巾賊に街を襲われ、略奪を受けた。我々がどれ程苦しんでいるか朝廷の役人にはわからない。だからこそ、今、我々は自分達で立ち上がり、自分達の大切な物を守らなければならない」

「はっ！　馬鹿か！　そんな事しても何にもならない。俺達は殺されるだけだ」

「今を逃したら、機を失う。我々には天がついているのだ」

関羽は俺の事を示した。しかし、当然ながら人々はそれを信じようとはしなかった。

「天だと？　嘘つけ！　食料も何もかも奪われちまって、何が天だ

「！」

「皆は知らないかもしれないが、都では今この方の噂で持ちきりだ」

関羽がそう言うと、人々の間で本当なのかと、関羽の言っていることを信じようとしている人々が出始めた。

「この方の着ている服を見たことのあるものはいるか!? この方は天からこの乱れた世を沈めに来た使いだ! 恐れることはない! これは、黄巾賊を認めぬ天からの意思! 我らは決して負けはない! 皆、今こそ立ち上がる時だ!」

「そうだ。今まで、俺達は散々奴等の顔色を伺って生きてきた。そんな事をしていても朝廷は見てみぬふり。俺達には天がついてる。黄巾の奴等に仕返ししてやろうぜ!」

すると、人々の間から先ほどまでの雰囲気は消え、拳を高々と突き上げて声を上げた。

「さすが、関羽の姉者だ。簡単に皆を説き伏せちゃった」

俺も張飛と同じように関羽の弁舌に感服していた。なんにせよ、これで少しでも兵力が出来た。後は、黄巾賊の奴等をどう向かえ討つかだ。

それから、俺達は再びやってくるであろう黄巾賊の奴等を迎え撃つための作戦を協議した。

人々は各自武器になりそうなものを持って再集結した。その数、およそ500人。

それから、何日か立ったある日、ついにその日がやってきた。

「兄貴く〜!! 黄巾賊の奴等が約10里先(約40km)に陣を張りやがった」

「数は!？」

「およそ3千」

「3千!？」

俺達の6倍もの兵力。正面からぶつかっても負けるのは目に見えている。俺は、関羽と張飛を呼び、作戦を考えた。

俺の知識は全部本で読んだものだ。実践で使えるかわからない。でも、今はそれに頼るしかない。

「兄者。敵の兵力は我らの6倍。正面からぶつかっても数で押されてしまう」

「それは俺も考えていた。そこで今回、俺なりの策を考えてみた。これを見てくれ」

そう言って、俺は机の上に周辺の地図を広げた。

「まず関羽には200の兵をもって、敵の正面から交戦してもらおう」「ちよ、ちよっと待ってくれ! それじゃあ、姉者が……………」

「大丈夫、まともに戦ってもらおうわけじゃない。関羽には少し戦って退いてもらう。そして、そのままこの細い谷間の道に入ってくれ。その後、相手の先鋒隊が谷間に入ったのを確認し、入り口と出口を岩で塞ぎ、閉じ込める。俺と張飛は残り300の兵を率いて、関羽が先鋒を谷間に閉じ込めた後、後方の部隊を叩く。その際に俺の部隊には森の中で多くの旗を持たせ銅鑼や声を上げさせる。相手に俺達の兵を多く見せるんだ。張飛は相手が動揺している隙に相手の指揮官を叩いてほしい。やつらは所詮烏合の衆。指揮官をやられれば

混乱をして逃げ出すに違いない。この策の鍵は、張飛、関羽の武力に全てがかかっている。二人とも頼む」

そこまで自分の考えを述べた俺の顔を、関羽と張飛が目丸くさせて見ていた。

「すげえ………さすが兄貴だ」

「見事な策です。では早速準備にかかります」

関羽と張飛は、それぞれ青龍偃月刀と蛇矛を持ってその場を後にした。

俺は今、心底書物を読んで良かったと思う。もし読んでいなければ、俺達は可能性を掴む間もなく全滅していただろう。

「初陣　く黄巾賊く」

俺は城壁の上から、相手の陣を見ていた。

さすがに5倍の兵力ともなると圧巻で言葉にならなかつた。関羽と張飛はすでに出陣の準備を整えて門の前で出陣の合図を待っていた。俺も関羽と張飛に合流し、馬にまたがった。

「兄者はここで指揮をとって頂ければ大丈夫です。戦闘は私と益徳にお任せ下さい」

「いや、皆が命をかけて戦っている中、俺だけ高みの見物ってわけには行かないよ」

「そうですか」

そう言った俺を見て、関羽と張飛が笑った。そして、正門を開けていよいよ出陣の合図が鳴った。

「関羽隊！　行くぞ！！」

関羽の部隊が出陣をしていった。

黄巾賊も兵を出陣させて、お互い向かい合う形で動きを止めた。

「親分、奴等たった200ばかりの兵で俺達と戦う気ですぜ」

親分と言われた一番前で敵の到着を待っている男が、刀を掲げ、兵たちを鼓舞した。

「野郎ども！！ 敵はたつた200！！ 城に残っている奴等もたかがしれている！！ 奪え！！ 殺せ！！ 我等には、大賢良師張角様がついている！！」
「応！！」

天に届かんばかりの大音響が響いた。

「突撃！！！！」

その光景を見ていた関羽も兵を鼓舞した。

「皆のもの！！ 決して一人で敵に向かうな！！ 二人一組で戦えば、何も恐れることはない！！ 我らには天の使いがついている！！」
「応！！」
「行くぞ！！」

そうしてついに戦いの火蓋は切って落とされた。

「我が名は関羽！！ 命のいらぬものはかかって参れ！！！！」

大勢の敵に囲まれる中、関羽は自慢の青龍偃月刀を振るった。青龍偃月刀の一振りで敵兵の首が2、3まとめて飛んでいた。しかし、敵兵は関羽を女だと油断して向かって行くため、関羽の周りには無数の死体が転がっていた。

そして、暫く戦い続けた後、関羽は軍全体に退却命令を出した。

「よし！ 退却だ！！ 退け、退け！！」

その命令と同時に関羽隊は一斉に退却を始めた。それを見た黄巾賊の指揮官は当然がごとく追撃の命令を軍に出した。

退却した関羽隊は、戦前に決めた作戦通り谷間に逃げ込んだ。谷間の上にはすでに何人かの兵を潜ませており、合図と同時に岩を落とすようになっていた。

そうとは知らずに、黄巾賊3千の先鋒が谷間の道に突入した。

「来たな。……まだだ………よし！ 今だ！ 合図を送れ！！」

兵が合図を送ると、谷間の上から入り口を出口の二箇所に大きな岩が落とされた。

「しまった！？ 敵の罠だ！？」

先鋒の指揮官が気づいた時にはすでに遅く、指揮官と数人の部下以外およそ1500の兵達が谷間に閉じ込められた。

「なんとということだ」

その事態に困惑している指揮官と部下の前に、関羽が再び姿を現した。

「貴様が先鋒隊の大將か！？ 我が名は関羽！！ いざ参る！！」

すれ違い様の一瞬だった。一合もしないまま関羽の青龍偃月刀によって指揮官の首は刎ねられた。周りの部下達は自分達の指揮官の

首が刎ねられると、戦意を失い武器を捨てて命ごいをしてきた。しかし、関羽はその命ごいには耳を貸さず切り捨てた。

「ぎゃああああ……………」

一方この戦況を後ろで見ていた俺と張飛は、敵の先鋒隊が閉じ込められたのを確認すると潜んでいた林の中から飛び出した。

「行くぞ!! 張飛!!」

「おうよ! 兄貴!!」

「頭!! 先鋒隊が谷間の道に閉じ込められちゃった」

「何だと!？」

すると続いて報告に来た部下が声を上げた。

「頭!!」

「今度は何だ!？」

「奴等の伏兵だ!!」

「数は!？」

「わからねえ。でも、旗の数から1000〜1500くらいだと思
いやす!!」

「1500だと!？ ふんっ! 所詮は、戦など知らぬ屑の集まり
だ! 数が何だ! 切り殺せ!!」

そう命令を出した時、目の前に一人の女が現れた。

「おう！ お前が大将か！？」

「その通りだ！！！」

女はにやりと笑い高々と名乗りを上げた。

「我が名は張飛！！ その首貰い受ける！！！」

「ふん！ 女の身で何が出来る！ 返り討ちにしてくれるわ！！！」

その男がもし張飛の実力を知っていたのなら、正面から受けてたつことはしなかっただろう。しかし、男は張飛の外見に囚われて、正面から向かっていった。

その結果、一合すらも交えることなく、張飛の蛇矛で一突きにされた。

「敵大将、張飛が討ち取ったり！！！」

俺の読みは正しかった。

自分達の指揮官が討ち取られた黄巾賊の兵は戦意を失い、我先に逃げ出した。

「さあ！ 追撃だ！！！」

張飛が追撃を開始しようと命令を出したが、俺はそれを止めた。

「待て！ 追撃はなしだ！」

「兄貴！ 今が勝機だろ！？！」

「いや、相手の兵がいくら烏合の衆だからと言っても、兵の数ではまだ俺達よりも上だ。今回は混乱に乗じて何とかだったが、まともな戦ったら戦いの経験が少ない俺達の方が完全に不利だ。だからこ

「こはあいつらを追い返しただけでよしとしよう」
「……わかったよ。兄貴がそういうんなら……」

張飛は俺の言葉を渋々受け入れたが、まだ暴れたりなかった様でブンブンと蛇矛を回していた。

「戦の後」

そして俺達はその後、先鋒隊の関羽と合流した。

「そちらも上手くいったみたいだな」

「もうばっちりさ！ さすが俺達の兄貴が立てた策だぜ」

張飛はまるで子供の様に今回の勝利を喜んでいた。俺の気持ちとしては、やっぱり複雑だ。あれだけ大勢の人の血が流れる戦いは正直見てるのも辛い。でも、これは自分で決めた事だ。

俺がこんなじゃ、弱い人達を救うと約束した関羽と張飛にも示しがつかない。だから、どんなに辛くても俺はこの目を背けちゃいけない。

「それで兄者。降伏した黄巾賊の兵たちはどうしましょう？」

そうだ。戦をしたんだから降伏する兵がいて当たり前だ。けど、そこまで考えてなかった。歴史書とかでは、全員打ち首とかって書いてあったけど、無駄な血は出来る限り流したくない。

「放してやってくれ」

「へ？」

俺の一言に関羽も張飛も口をぽかりと開けて呆れていた。

「あ、兄者。いくらなんでもそれは……今こいつらを解放すればまた各地で欲の限りを尽くしましょう。それならば、いっその場で切り捨ててしまえば」

「俺も姉者に賛成だ」

二人の言ってることは正しい。実際にそうした方がいいんだろう。

「二人の気持ちはわかる。実際にそうした方が正しいと思う。けど、無駄に血を流したくないんだ。解放が無理なら捕虜でどうだ？ 捕虜なら俺達が監視できる」

「お気持ちはよくわかりますが、この者達を捕虜にすると我らの兵糧が足りなくなってしまう」

俺はそれでも無駄な血は流したくないと、関羽と張飛を必死に説得した。

そうして、暫くして俺の気持ちは動かないことを悟った関羽と張飛は、大きいため息をついた。

「わかりました。これ以上言っても兄者は自分の心を変えないでしょう。捕らえた黄巾の兵を解放しろ！！」

関羽は部下に命令を送った。

「すまない」

すると、捕らえた黄巾の兵を解放しに行った兵士が慌てた様子で戻ってきた。

「関羽將軍！ 捕らえた黄巾の兵達が、木葉様にお会いしたいと申しておりますが如何致しましょう？」

「俺に？ わかった。会おう」

何故俺に会いたいのかわからないが、会いたいと言われた以上会ってみるか、気軽に答えた俺に対して関羽の激しい言葉が飛んで

きた。

「な!?! 正気ですか兄者!?! もしやつらの中に兄者を殺そうとする輩がいたらどうするつもりです!?!」

「どうするも何も、俺のことは関羽と張飛が守ってくれるんだろう?。」

「それはもちろん」

「なら、いいじゃない。それともまだ何かある?。」

「い、いや、私はその様な事を……」

「じゃあ、案内お願い」

俺は、関羽と張飛を連れて黄巾賊の捕虜の前に姿を見せた。

すると、捕虜となった黄巾賊の兵達が皆、俺達に向かって膝を地面につき、深々と頭を下げていた。

「え!?! 一体どうしたんだ!?!」

その異様な光景に俺の思考は一瞬停止したが、捕虜となった兵士一人の言葉で我に帰った。

「あんたが木葉様か?。」

「……そうだけど……」

そして、捕虜達はより一掃頭を深く下げた。

「お願いだ! 俺達をあんたの部下にしてくれ!」

「はっ？ ちょ、ちょっと待つてよ！ 何で、俺なんかに！？」
「俺達はあるあなたに命を助けられた。だからこの命、好きに使ってくれ！ それにあなた達、人民のために戦っているんだらう？ 信じてもらえるかわからないが、俺達も元は人民のために立ち上がったんだ。だが、勢力を拡大した結果がこれだ。あなた達なら俺達のように道を間違わず、天下泰平の世にしてくれると思っただ。だから俺達にもその手伝いをさせてくれ！！」

確かに、今でこそ黄巾賊は悪者のようになっているが、元は漢朝の腐敗を正そうとした農民達なんだよな。でもいつの間にか、志を持たない人間が黄巾賊となって、こいつらは仕方なく……………

「よし、わかった！ その申し入れ、喜んで受けよう！」

「あ、兄者……………」

関羽は俺を制するような顔をして近づいてきた。俺はそれに気づき、先に関羽に向かって言った。

「こいつらの目は本物だよ。それに、今は少しでも多くの戦力が必要だ」

「確かに、兄者の言う通りですが……………」

「なぐに、心配ないよ姉者。兄貴がああ言ってるんだ」

気楽な性格の張飛に比べ、関羽は納得いつていないようだったが、まあそこは後で説得すればいいか。今は、初戦の勝利を喜んでいるよりも次に備えなくてはいけない。

奴ら先方隊が敗戦した報告を受け、次はさらに大軍で攻めてくるだろう。一度使った策はもう通用しないと考えた方が良く。そして、相手にも油断はないだろう。だからこそ、少しでも多くの戦力が必要だ。

「天才軍師」

そして、俺達は一先ず街に凱旋した。

俺達が凱旋すると、皆笑顔で溢れていた。そう、俺はこんな風に皆が笑えるようになってほしい。そのために戦うしかないんだ。

俺は改めて決意を固め、すぐに次の戦いに向けての準備を関羽、張飛と共に行った。

一方、先の戦いで逃げ延びた黄巾の兵達は、黄巾の大方波才たいほうはさいの元に集まっていた。(大方たいほうとは、黄巾党内での將軍を意味している)

「お前ら、義勇軍に敗れてのこのこ逃げてきたのか!？」

波才が逃げ延びてきた部下に背を向け、目の前にある肉を噛み砕きながら言った。その威圧感、まるで獣の様な匂いをもし出していた。

「ひいいい！ お、お許し下さい！」

必死で命乞いをする兵士に、波才は食べていた肉の骨を投げつけた。骨の先は針のように尖っており、兵士の頭を貫いた。

「おおおおお……お許しを!!!」

その光景を見た兵士達は、皆びくびくと体を震わせ、神に祈るよ

うに命乞いをしていた。

波才は最後の肉を食べ終わると兵士達の前に立ち、空に響くような大音量の声で言った。

「いいか、てめえら!!! 次の戦いでも逃げ出したら、この俺様が直々に噛み殺してやる!!! 死にたくなくば戦え!!! 戦って相手の生を奪い取れ!!!」

立ち上がった波才の姿はまさに獣そのものだった。

髪はボサボサで、上半身は服を着ておらず、伸びた毛が服の代わりのように体に巻きつき真っ黒くなっていた。そして、その腰には、通常の兵士が持つ3倍はあろう刀をたずさえて、一万はいるであろう黄巾の兵を率いて行軍を始めた。

初戦を見事な勝利で飾った俺達は、次の戦の準備を急ぎ進めていた。

関羽と張飛は、それぞれの兵の訓練に時間を割き、俺は近くにいる官軍に援軍を求める書状を送っていた。

「初戦から約一月か……そろそろだな」

「なぐに、心配すんなよ。兄貴は俺達が絶対に守ってやるからよ。なっ、姉者!」

「もちろんです。この命に代えてもお守りします」

俺はそんな関羽、張飛の言葉を頼もしく思いながら、不安でたまらなかった。城壁の上から見える空はあんなに澄み切っているのに、

この大地には人々の血が流れ、弱きものが強きものに怯えながら毎日を過ごしている。

すると、一人の兵士が息を切らしながら、必死に走ってきた。

「ほ、報告致します！！ 敵、黄巾賊、城外三里の位置に確認！！

その数、約一万！！」

「一万！？」

予想通り、仲間の敵討ちにやってきたな。しかし、一万はちょっと予想外だ。

「兄貴！！」

「兄者！！」

「関羽、張飛！　すぐ出陣の準備を整えてくれ！！」

関羽と張飛はすぐに兵をまとめ、出陣の準備は整った。

しかし、問題は前回と同じ兵力の差だ。今回は俺達の兵が、前回の戦いで降伏した兵を入れて約二千。援軍の要請は出しているが、未だに官軍からの返答はない。

「せめて、援軍が来てくれるなら望みはあるが、それが望めない今、俺達だけで何とかするしかない」

考えても妙案が浮かんでこない。前回と同じ策が相手に通用するとは思えない。それに、前回とは兵の規模が違う。

どうする、どうする……

俺が悩んでいると一人の兵士がやってきた。

「報告致します！ 城外より怪しげな者が近づいて来て、木葉様に会わせると言っておりますが、如何致しましょう？」

「こんな時に一体誰だ！？ 追い返せ！！」

すると、兵士は言いづらそうに口を数回もごもごしながら言った。

「し、しかし、自分は天に昇る竜を助けに参ったと言って、城門前から動かないのです」

「天に昇る竜？ …… わかった、会ってみよう。その人をここに案内してくれ」

天に昇る竜という言葉に何かを感じ、俺はその人物に会ってみることにした。

暫くして兵士が一人の青年を連れて戻ってきた。

「君が俺に会いたって言ってる人？」

「そうだ」

「名前を聞いても言いかない？」

すると、少年の口からはとんでもない人物の名前が出てきた。

「性は諸葛、名は亮、字を孔明と言います」

諸葛亮だつて！？ あの三国志上天才と言われた軍師が何故ここに？ 確か、諸葛亮が劉備の陣営に加わるのは、もっと後のはず。しかし、この少年が本当に諸葛亮ならこの戦に勝機が見えてくる。

「それで、諸葛亮は何をしにこんな所まで来たんだ？」

「そんなの決まってる。僕の学んで来たことを人々の役に立てるためだ」

諸葛亮は、あどけない少年の外見とは裏腹に、その瞳には強い決意を秘めているようだった。

「わかった。それじゃあ諸葛亮は俺達に力を貸してくれるって言うんだね」

「だからそうだと言ってる！」

「なっ！？ 兄者に向かつて無礼な！！」

「いいから、いいから」

俺は心の中で大きく拳を握ってガッツポーズをした。そして、自分の前に広げてある地図を指差して現状を諸葛亮に伝えた。

「……現状はこんなところだ。俺達が圧倒的に不利ってことだ」

俺の説明を聞いた諸葛亮は、うんうんと相槌を打ちながら、顎に指を当てじつと地図を眺めていた。そして暫く考えた後、一つの答えを導き出した。

「こちらの方が不利って感じだけど、それは圧倒的じゃない。いい？ この地図を見て」

そう言って諸葛亮は地図を指で指した。

「ここの城は、東に谷があり、西には大河がある。敵が攻めてくるとすれば北、もしくは南の二箇所。そして、今回の敵の大将は波才と言つ獣です。こちらが智を持って策を練れば、勝利を収めることが出来るでしょう」

諸葛亮の言葉は、まさに真つ暗になっていた俺の心を光で照らし
てくれた。

「よし、すぐに関羽と張飛を呼ぼう！」

「待ってください！ 関將軍、張將軍は、多分僕の意見を聞き入れ
てくれないと思います」

「大丈夫。俺が何とかするよ。誰か！ すぐに関羽と張飛を呼んで
きてくれー！」

「戦く黄巾賊 波才」

兵士が呼びに言っつてすぐに関羽と張飛がやってきた。

「兄貴！ 何か良い策を思いついたのか！？」

俺は、関羽と張飛の前に諸葛亮を押し出た。

「関羽、張飛。今日からこの子が俺達の軍の軍師だ」

いきなりのことにさすがの関羽と張飛も驚きを隠せなかった。そして、同時に俺の考えに否定してきた。

「兄貴。なに考えてんだ。こんな子供に軍を任せられるわけないだろっ？」

「兄者。私も益徳と同じ意見です」

二人とも諸葛亮が言った通り、否定をしてきた。こうなることは予想していたので、俺は冷静に二人に向けて言った。

「これは、俺の決定だぞ。今回は諸葛亮に任せる。もしそれが出来ないのなら、俺達にこの戦、勝利はない。それともお前達に、何か必勝の策があるとも言うのか？」

関羽も張飛も反論はしなかった。実際に必勝の策が二人にはなかったからである。しかし、心の中で諸葛亮のことを認められない二人は、条件を出してきた。

「兄者がそういうのなら、諸葛亮とやらを一度は信じます。しかし、

この戦でもし敗れるようなことがあれば、今後、諸葛亮の命には従いませぬ」

まあ、良いだろう。ようは勝て良いのだ。

「よし、決まった。じゃあ、諸葛亮。頼むよ」

諸葛亮は机の上の地図に置いてある駒を動かし説明を始めた。

「では、まず関將軍は兵一千を率いて敵の前線部隊と交戦して下さい。そして、時期がきましたら、この谷間に逃げて下さい。しかし、相手の兵の中には前回の戦で逃げ延びた兵がいることから、波才に陳言し、一時軍の進行が止まるでしょう。ですが、波才の性格から部下の陳言を聞かずに向かって来るはずですよ。そして、谷間の上には兵士を潜ませ、波才の軍勢が全て通り過ぎたのち入り口を岩で塞ぎます」

ん？ 入り口だけ？ 前回のように閉じ込めてしまった方がいいんじゃないのか？ しかし、今回は諸葛亮に全てを任せただ。きつと何か考えがあつてのことだろう。

場の空気は先ほどまでより、一層ピリピリして来ていた。

「そして、入り口を塞がれた波才の軍勢は、前回の敗戦の記憶から指揮が乱れ、急ぎ谷間の道を進むでしょう。ここで張將軍には、谷間の道を出て来た波才の軍勢を五百の兵で攻撃をして頂きます。すると、波才は被害を避けるためこの森へ進路を取るしかなくなります。この森には、僕と木葉様が残りの兵を率いて、波才の軍勢が森に入ったのを確認したのち、森に火を放ちます。関將軍、張將軍は、森に火の手が上がりましたら、全力で波才の軍に攻撃を仕掛けて下さい。関將軍と張將軍なら、ここで波才を討ち取ることが出来るで

しょう」

さすがとしか言い様がない。この短い時間の中で、よくこれだけの策が練れたものだ。さすがは、諸葛亮といった感じだ。

「策は決まった！ 関羽！ 張飛！ 出陣だ！！」

関羽も張飛もこの時すでに、諸葛亮の中に眠る大きなものを感じ取っていた。

その日の夜、敵の目に注意しながら、俺、諸葛亮、張飛は部隊を率いてそれぞれの潜伏場所に向かった。

城に残った関羽は、城壁の上から敵陣をじっと監視していた。やがて月は水平線の彼方に沈み、太陽の光が刻一刻と迫る決戦の時間を示していた。

関羽は青龍偃月刀を持ち、城門の前に兵を集合させ兵たちを鼓舞した。

「皆！ 己が力を信じるのだ！ 我らが敗れたら奴等はまた欲の限りを尽くす。我らに負けは許されん！！ 死力を尽くして戦うのだ

！！」

「応〜！！」

関羽の鼓舞の後、ゆっくりと城門が開かれていった。

目に映るは黄巾軍一万。なびく黄色の布が風に揺れ、不気味に進をしていた。まるで地獄への使い達が迎えに来ている様だった。

その軍の一番先頭には、真っ黒な男が一人。とても人間とは思えな

い姿だった。むしろ獣といった方が表現的には正しいのかもしれない。

その黄巾軍に向かい関羽は、一步、また一步と馬を進めていった。そして、関羽軍と黄巾軍の距離が約一里程になった時、空に響く大音声とともに戦の幕は上がった。

「命のいらぬものはかかってこい！！ 我こそは、関雲張なり！！」

関羽に近づこうとする敵兵は、きらりと太陽の光を浴びて輝く青龍偃月刀の餌食となっていた。関羽が青龍偃月刀を一振りすれば、敵兵がまるで玩具の様に一人、また一人と地面を赤く染めていった。関羽軍は、二人、もしくは三人が一つに固まり、波才軍に向かっていた。

そして、この戦の目的は波才軍をおびき寄せる事。そのため、関羽軍は敵将波才を無視していた。その関羽軍の行動に波才は身を震わせ、怒りを露わにした。

「この雑魚供が！！」

怒り狂った波才は、一騎で関羽軍の中に突っ込んでいった。

「この腰抜け供の将はどいつだ！！ 儂と勝負しろ！！」

「私がこの軍の将だ！ その勝負受けてたつ！！」

波才は目の前の関羽の姿を見た途端、声を上げて笑った。

「がゝははは！ 貴様がこの軍の将だと！？ 道理で腰抜けが多い訳だ！ 命が惜しかったら降伏するんだな。そうすれば毎日可愛がつてやるぞ？」

波才の挑発的な言葉に関羽は冷静だった。この戦を勝利することに全神経を注いでいたからである。

「戯言を言つな！！ もし私がお前に負ける様な事があれば、私を好きにするがいい」

関羽のその言葉に、波才は最初にあつた怒りを忘れ、関羽を自分のものにする事で頭が一杯になった。

そして、そんな波才と一、二合撃ち合った後、関羽は諸葛亮の作戦通り、波才との一騎打ちを中止して、谷間の道に向かった。

「ぐわあははは！ 待て、待てい！！」

「は、波才様！ お待ち下さい！！」

制止する部下の声を無視して波才は関羽を追いかけた。そして、その後ろを関羽軍の兵士達が統率を整えながら追いかけていった。やがて波才が谷間の道に入ろうという瞬間、必死に後を追ってきた波才軍の兵士が声を上げて波才に言った。

「お、お待ち下さい！！ 敵兵の様子が変です！！」

その言葉に波才は一時馬を止めた。

「何が変だと言つんだ？」

「あれを見て下さい。先ほどまで逃げていた兵士達が、いつの間にか隊列を整えております。それに前回の戦、この場所に敵は畏を張っていました」

部下の陳言に、波才は大声で笑うと全く無視するように関羽を追

いかけていった。

「そんな事でいちいちビビるんじゃないやねえ!! あの女、捕らえたら隅々までじっくり味わってやる」

「は、波才様!!」

波才に続き、後を追ってきた一万の黄巾賊達も谷間の道に突入した。

「関將軍、敵將波才とその軍一万全てが谷の入り口を通過致しました!!」

「よし! 合図を送れ!!」

一人の兵士が赤い旗を高く掲げて左右に振った。それを見て入り口には岩が落とされた。

「は、波才様!! 谷の入り口が岩によって塞がれました!!」

周りでこの報告を聞いた兵達に動揺が走り、前回の敗戦を経験している兵は、我先にと谷の出口に向かって走り出した。

「早く行け! 閉じ込められるぞ!!」

この時、波才は兵の言葉を全く聞かずに、ただ関羽を追いかけた。そして、谷間の道を出た所で波才は関羽の姿を見失った。

その後ろでは、谷間の道から早く出ようとする兵が前の兵を押し、前の兵はさらにその前の兵を押し、大混乱状態になっていた。

ジャーン!! ジャーン!!

そこに、やっと暴れられるといった感じに、威風堂々と姿を表した張飛が、有無も言わず、混乱している波才軍に攻撃を仕掛けた。

「やっと俺様の出番か。行くぞ、お前ら!!」

これを見た波才は兵達に迎え撃つ様に檄を飛ばすが、兵達が混乱しているのでうまく伝わらなかった。

仕方なく張飛軍と逆にある森の中に逃げ込んだが、兵達の士気は度重なる攻撃で落ち込んでいた。

「ちくしょう! あの野郎、次に会ったらぶつ殺してやる!!」

森の中を進んでいた波才軍の兵が後ろの方から大声で叫んだ。

「火攻めだ!!」

波才が後ろを振り返ると、真っ赤に燃え上がる炎が波才軍の後方から迫ってきていた。波才は思いつきり馬を飛ばし森の中を駆けた。その後ろを黄巾兵が追った。

そして、逃げ遅れたものは、皆、炎に包まれていった。

「ぎゃああああ!!」

「助けてくれ!!」

炎に包まれていく仲間の悲痛な声を聞きながら、波才は必死で逃げた。黄巾の兵達はすでに生きた心地はなく、とにかく逃げることで精一杯だった。

一方、森に火の手が上がったのを確認した関羽と張飛は、敗走してくる黄巾軍に向けて突撃した。

すでに戦意を失い、逃げることで頭が一杯の黄巾兵達はなすすべもなく関羽軍と張飛軍の前に屍の山を築いた。

「この時を待ちわびたぞ！ 私を侮辱したことの重み、身を持って知るがいい！！」

波才の前に立ち塞がった関羽は、青龍偃月刀を空高く振り上げ、力一杯波才に振り下ろした。波才は通常の三倍はある刀でそれを受け止めようとしますが、関羽の青龍偃月刀は波才の刀ごと波才を真っ二つにしてしまった。

「敵將波才！！ この関雲張が討つ取った！！！！」

その言葉を聞いた黄巾賊の兵は、逃げ切れないと思ったのか、その場で足を止め降伏の意思を示した。

関羽が波才を討ち取った知らせは、すぐに俺や諸葛亮、張飛にも伝達された。

「申し上げます！！ 関羽將軍が敵將波才を討ち取りました！！！！」

これで残すは黄巾の残党だけだ。

しかし、ここでも俺は無駄に血を流させたくないという思いから、張飛、関羽に逃げる敵は殺さず捕らえてほしいと伝令を出した。

そして、戦開始から数刻。俺達は勝利を収めて街に凱旋した。

捕らえた黄巾の兵は解放してやり、逃げる者もいれば、仲間にし

てくれと願ひ出る者もいた。

そして、俺がここに来て一番気になっているのは、黄巾賊の指揮者、大賢良師 張角の事だ。張角の最後は病での死。そして張角の死で黄巾の乱は静まる。

そう、俺達は何もしなくても、この黄巾の乱は自然と収まってしまはずなのだ。だが、俺はこれ程までに大きい反乱を起こした張角という人物に会ってみたいと思うようになっていた。

「穏やかな時間」

俺達が波才の軍勢を破ってから数日が立った。

黄巾賊達は、未だ各地で戦を行っているようだ。俺達は、黄巾賊の奴等にメチャメチャにされた街の再建に力を入れていた。とは言っても、内政に関してはほとんど諸葛亮に任せている。関羽も張飛も波才軍との戦の後、諸葛亮のことを認めてくれた。

そして俺は山の様に積み上げられた書簡に嫌気がさし、気分転換に街に出てきていた。

「はあゝ。まさか関羽があれ程までとは……………」

関羽は、四六時中俺の側にいる。俺を心配してくれるのはうれしいが、たまには一人になりたい時もある。ってことで、今日は関羽の目を盗み、抜け出してきたのだ。

「おっ！ おっちゃんの所はもう店を再開したのかい!？」

「おかげさまでね！ ……そうだ。ちょっと待ってて下さい!！」

そう言うとおっちゃんは店に入って、手に肉まんの入った袋を抱えてきた。

「はいよ!！」

「え!?! いいの!?!？」

「気にしないでいいよ。いつもお世話になってるのはごっちゃんだから」

「ありがとう」

こんな感じのやり取りさえ関羽がいると、もっと威厳を持って下

さいとか、歩きながら食べるのは行儀が悪いとかって注意してくる。でも、怒った顔の関羽も、実はすごく可愛かったりするから側にいても良いかなって思う時もある。

「あっ！ やっと見つけましたよ！！」

家の陰から姿を表した関羽は、お説教モードの表情で近付いてきた。

「この様な場所で何をしているのですか？」

「あ、いや。ちょっと息抜きに……」

恐ろしい。関羽の目が真っ直ぐ見れない。

「兄者はわかっているのですか！？ 一人で出歩いたりして、賊にでも襲われたらどうするのです!？」

くっ！ こういう時の関羽のお説教はとにかく長い。ここは奥の手を使うしかない様だな。

「関羽。そんなに怒ると可愛い顔が台無しだぞ」
「な!？」

関羽は今まで戦場で戦ってきたせいとか、こういった言葉に慣れていないらしく、顔を真っ赤にして黙ってしまう。

「はい。笑って！」

俺は自分の両方の頬を摘み、びろ〜んっと伸ばした。

「兄者！ そんなみつともない……みつとも……ぷっ、あははははは」

怒った関羽も良いけど、やっぱり笑ってる方が俺は好きだ。

「関羽も少しは休まないとだめだぞ。　　って訳で、今日は城外に行こう」

俺は関羽の手を引いて場外にある森に行った。

森の中は、木々の隙間からこぼれる日の光が照らし、さわさわと優しい風が頬を撫でた。

「良い気持ちだな」

俺は伸びをしながら、隣を歩いている関羽に話しかけた。

「そうですね……って、こんなところを襲われでもしたらどうするのです!？」

「まあ、その時は関羽が守ってくれるから安心だよ」

俺は、関羽の方を向いて笑った。関羽はどこか恥ずかしそうに俺からサッと視線を外した。

そうして、静かな時間を満喫していると、森の奥から女性の悲鳴のような声が聞こえた。

「ぎゃああああ!!」

「!?!? …… 関羽!?!」
「はい!?!」

俺達は声のした方に向かって走って行った。そこには、黄巾賊の輩に追われている女の子の姿があった。すぐさま俺達は女の子と黄巾賊との間に割って入った。

「何だ、お前らは!?!? 邪魔するとぶつ殺すぞ!?!」

黄巾賊の輩が関羽に刀を突きつけた。

「貴様ら、命は惜しくないようだな。兄者!」

関羽は俺に視線を送った。俺はこくりと小さく頷いた。そして俺は自分の体で女の子の視界を塞いだ。

「ぎゃああああ!?!」

勝負は一瞬でついた。関羽の側には、黄巾賊達の屍が転がっていた。

俺達はひとまず女の子を連れて場所を移動すると、事情を話してもらった。

「君は何で黄巾賊に追われていたの?」

すると女の子は俺の目をじっと見つめた後、話を始めた。

「私は、長沙ちょうしかの太守 孫堅そんけんの娘、性を孫、名を権、字あざなを仲謀ちゆうぼうと言います」

「はい!?!?」

いきなりで変な声を上げてしまった。孫権つて、いずれ呉の初代皇帝になる人物じゃないか!? それが何でこんな所にいるんだ?

「どうかしましたか?」

「い、いや、なんでもないよ。話を続けて」

「私は数日前、父上、兄上と一緒に黄巾賊の討伐をするためにこの地に遠征してきましたが、黄巾軍との初戦、私が父上、兄上が側にいると思い油断してしまい、黄巾軍に捕らえられてしまったのです。そして、捕まった私は何とか監視の目を盗み逃げ出したまではよかったのですが、すぐに逃げ出したことがばれてしまい先ほどの輩に追いかけてられている所を、あなた方に助けて頂いたのです」

なるほどね。要するに人質に逃げられた監視の兵が、罰を恐れて必死で取り返しに来たって訳か。

「それで君の仲間はどこにいるかわかる?」

「はい。父上達は、此所より北に数里行った場所に陣をはっているはずです。それから……」

言葉を詰まらせた孫権は、恥ずかしそうにして少し赤くなりながら俺に言った。

「……わ、私のことは仲謀と呼んで下さい」

「字で呼んでいいの?」

「貴方は命の恩人です。私は構いません」

「じゃあ、俺の事も木葉で良いよ」

俺と仲謀の会話を側で聞いていた関羽は、何か気に入らない事があったのか、俺と視線が合うとぶいっと視線をそらした。関羽のそ

んな態度も気になったが、今は仲謀を仲間の元に返してあげることが先決だ。

「関羽！ すぐに馬を連れて来てくれ」

「馬ですか？ わかりました。少々お待ち下さい」

関羽はすぐ様、馬を探しにいった。

「木葉？ 馬など連れて来てどうするのだ？」

「これから仲謀を仲間の所まで送ってあげるんだよ」

俺の言葉に仲謀は目を丸くして驚いていた。

「……お、お前は小さいとはいえ、当主の身。それなのに軽率ではないか！？」

俺はぼんつと仲謀の頭に手を乗つけると、優しく仲謀の髪を撫でた。

「大丈夫。俺が仲謀を送ってあげたいんだ。まあ、軽率ってのは関羽にいつも言われているけどね。それに関羽が一緒なら敵に襲われなくても大丈夫。かなり強いから」

「……………ぶつ、あははははー！」

俺の話が終わると仲謀はお腹を抱えて笑い出した。

「何もそんなに笑うことないと思うけどな」

「ごめん、ごめん。だってあまりにも木葉が……あははははー！」

さっきまで俺や関羽に警戒して表情を強張らせていた仲謀の笑顔

が見れて俺はほっとしていた。

その後も仲謀とたわいもない話しをしていると、馬の嘶き（いななき）とともに関羽が戻って来た。

「兄者、馬を連れて来ましたが、あいにく二頭しか手配出来ませんでした」

「別に構わないよ。ありがとう、関羽」

そう言つと、俺はひらりと馬に乗った。

最初はうまく乗る事が出来なかったが、いつの間にか馬に乗る事にも慣れてしまった。

そして、俺は馬の上から仲謀に向かって手を伸ばした。

「ほら、早くおいでよ」

それを見た関羽が俺に向かって言った。

「な！？ 兄者は何をしようとしているのです！」

「何つて、仲謀を馬に乗せてあげようとしただけだけど？」

「兄者はもつとご自分の身を大事にして下さい。もし、その孫権が兄者を殺そうとする刺客だったらどうするのですか！？」

関羽の言いたい事はわかるけど、ちよつと心配のしすぎだと思つ。

まあ、これが関羽の良いところでもあるから仕方ないか。

「じゃあ、関羽が俺と一緒に乗るか？」

俺は結果の予想出来る質問を関羽にした。そして、関羽の反応は俺の予想通りのものが返ってきた。

「わわわ、私が兄者などと、とんでもない!？」

案の定、関羽は顔を真っ赤にして動揺していた。

「ほらな。そんな状態で俺を守れるのか？ それにいざって時、関羽も一人の方が動き易いだろう?」

「し、しかし……」

「大丈夫だって。仲謀は刺客何かじゃないよ。もし、本当に刺客だったら、関羽がいない間に俺を殺すと思うけどな」

「……わ、わかりました。兄者がそれほどもで言うのでしたら」

関羽は渋々了承をしてくれたが、俺には関羽が刺客とは別の事で意見を言ってきた様にも感じた。

「江東の虎」

それから俺と関羽は、仲謀と一緒に北数里の所にいると言つ仲謀の仲間の元に向かった。道の途中では何もなく、一刻程で仲謀の仲間の陣にたどり着いた。

「此所まで来れば安心だな」

俺は仲謀を馬から降ろし、その場から立ち去ろうとした。

「待つて!!」

仲謀の突然の声に、俺は手綱を引いて止まった。

「此所まで連れてきてくれたお礼がしたいの。是非、父上と兄上にも会って行って欲しい」

関羽は俺と仲謀の間に入ろうと馬を動かした。それに気付いた俺は関羽の目を見て小さく頷きそれを制した。

「仲謀がそう言ってくれるなら、是非会って見たいな」

そう言つて馬から降りて、仲謀の仲間の陣に近付いて行つた。

陣の入り口には二人の門番がいた。門番達は孫権の顔を見ると飛び上がる様に驚き、陣の中に駆けて行つた。

暫くすると、陣の奥から貫禄を漂わせ立派な鎧を着た男と、不思議な雰囲気を持った青年が姿を表した。

「父上！ 兄上！」

二人の姿を見た仲謀は、勢いよく抱き付いた。

「おお、権よ。そなたが無事でよかった」

「あのね、父上。あの方達が、私を此所まで連れて来てくれたの」

父上と呼ばれた男は、俺と関羽の顔をじっと見た後、何がおかしかったのか笑い始めた。

「権を助けてくれたこと、お礼を申し上げます。私はこの軍を指揮する、姓を孫、名を堅、字を文台ぶんだいと申す。そしてこっちにいるのが、私の息子の」

「姓を孫、名を策、字を伯符はくふと申します。妹を助けて頂き感謝致します」

孫堅。三国志の中では、十七歳のときに父親に付き従って海賊を退治しその名を馳せ、江東の虎と言われる男だ。

孫策。孫堅亡き後、亡き父の残した三千の兵を“伝国の玉璽”をかたとし、袁術から譲り受け出兵する。途中、幼馴染みの周瑜を幕下に入れ、会稽の蔽白虎をあっという間に撃破する。その孫策の勇猛さから、秦末期の楚の武将、霸王・項羽の名を借りて“小霸王”と呼ばれる人物だ。

どちらも三国志の中では英雄だが、孫堅、孫策ともに、若くして命を失っている。でも、この三国志の世界は、俺が来たことよつてなのか、何かがおかしくなっている。それが何かはわからないが、ひよつとしたら孫堅、孫策の運命にも何かしら影響があるのではないか？

「俺は、清水木葉。で、こっちが義兄妹の関羽です」

ここで俺はあることを思い出した。

そう、城を留守にすることを誰にも言っていないことだ。きっと今、城では張飛や諸葛亮が必死に探しているに違いない。

「あの、来て早々で申し訳ないのですが、誰にも言わずに城を出てきたので早めに戻らないと皆が心配しているかもしれません」

俺はそう言つて頭を下げ、急いで城に戻ろうとした時、仲謀が俺の手を握り顔を近づけ、そのまま俺の頬にキスをした。

「な……………!？」

言葉にならなかった。いきなりだというのもあるが、孫堅の目の前だというのが一番恐ろしかった。しかし、その仲謀の行為に何も言わなかった。

「へへへ……………今回助けてくれたお礼」

仲謀は顔を真っ赤にして恥ずかしそうに言った。不覚にも俺はそんな仲謀に見とれてしまっていた。すると、関羽が後ろから俺の腰の辺りをギュツとつまんだ。

「ツ……!」

「兄者。早く戻らないと、皆が心配しています」

関羽の表情は見えないが、何か恐ろしいオーラを感じる。まるで俺の周りだけに、死神が取り付いているような……………

「……そ、そうだな。じゃあ、仲謀。またね」

そう言って、俺は関羽と共に馬の腹を足でこつんと蹴って城に向かった。

「権。良い男に目をつけたな」

俺達の背中を見ていた仲謀の頭を孫堅が撫でた。

「趙子龍 くき」(前書き)

公孫さんのさんと言う漢字が、表示されないようでひらがなになっております。

すいませんが、ご了承ください。

では……

「趙子龍 くき」

孫堅の陣から城を目指して出発した俺と関羽の間を、何となく冷たい空気が流れていた。

「あ、あのさ。関羽？」

「なんですか？」

ぶつきらぼつに関羽は返答を返した。

「何か怒ってない？」

「私は怒ってなどいません！ 兄者こそ、孫権と別れてよかったのですか？」

関羽の奴、完全に機嫌を損ねてるな。しかし何をそんなに怒っているんだ？

そんな雰囲気の中、暫く進むと見晴らしの良い場所に人が倒れていた。俺は馬を走らせ近付いて行った。

「おい！ 大丈夫か！？ どうしたんだ！？」

男からの返事はなかった。男は、ぼさぼさの髪と伸びきった髭、近くで見ると浮浪者かと思っ様な風貌だった。

「うっ……」

「おい！ 大丈夫か！？」

男はゆっくりと目を開け、喉を痛めているせいか、ガラガラした声で話した。

「大丈夫だ。どうせ俺の身体はもうすぐ病で死ぬ」

男の言葉を聞いた俺は、病気なら城にいる医者にも早く見せなければと思い、男を馬に乗せて急いで関羽と共に城に向かった。

城に着くと、すぐに医者を連れてきてもらい、男の容体を見てもらった。

「どうだった？」

俺の問いに医者は首を横に振った。

「木葉様が連れて来ましたあの男、病気の進行進んでおり、すでに手遅れです。あの男の命もそう長くはないでしょう」

医者言葉を聞いた俺は、あの男がすでに自分の命が長くないことを知っていたのだとわかった。

俺は男のいる部屋に行った。

「あんた知ってたんだな？」

「まあな。自分の事だ。自分が一番よくわかる」

「名前は何て言うんだ？」

男は俺の目を暫く見続けた。

「俺の名前か？ 名乗れる名じゃねえよ」

男は少し笑って言った。

その時、勢いよく部屋のドアが開けられた。

「誰だ？ もつと静かに……」

「す、すまねえ、兄貴。でも、大変なんだ！！」

張飛が血相を変えて、息も整えずに話しを続けた。

「城の南、約五里の場所で黄巾賊と官軍が戦っているらしい！！」

官軍と黄巾賊が！？ 城の南三里ってことは、もし官軍が敗れば次は必ずここに攻撃をしてくる。

「それから兄貴。本当かわからないが、報告をしてきた兵士によれば、黄巾賊の本当の目的は俺達の城で、官軍はそれを阻止するために突撃をしたって話だ」

「それは本当か？」

張飛の言う事が本当なら早く援軍に行かなくては手遅れになりかねない。

俺は各将軍に至急出陣の準備を整える様に言った。そして、俺自身も出陣の準備をするため部屋を出ようとした時、床に横たわっている男が呼び止めた。

「あんたに頼みがある。その黄巾賊と官軍が戦っている場所に、俺も一緒に連れて行ってくれ」

「何を言ってるんだ！ そんな身体で戦場に行くなんて無理だ」

「いいんだ。無理は承知している。それでも俺は行かなくちゃなら

ないんだ」

男は精一杯の力を振り絞り、床から身を起こして俺を見てきた。俺はその目に男の強い思いを感じた。

「わかったよ。何だかあんたにとってはすごく大切なことみたいだからな」

そう言って俺は男を床から起こすと、出陣の準備に向かった。

約一刻後、各將軍達は出陣の準備を整え、出陣の合図を待っていた。

「兄貴！ 準備は万全だ！いつでもいいぞ！」

「よし！ 出発だ！！」

俺達は兵四千を引き連れて城を出発した。自分も一緒に連れて行けと言った男は、俺の側で馬に繫いだ四輪車に乗っていた。

官軍の事もあるため、進行の速度を速めながら官軍の陣に向かった。

そして、俺達の前に官軍の陣が現れた。俺は門番に、急ぎ官軍を

指揮する将軍に取り次いでもらった。

「お前が義勇軍の大將か？」

「一応ね。俺は清水木葉。あなたは？」

「姓は公孫こうそん、名はさん（さん）、字を伯珪はくけいと申す」

公孫さん。白い具足をつけ、白馬に乗っていたため白馬將軍と呼ばれた人物だ。それ以外にも容姿美麗で美声の持ち主だったと言われている。

そう、俺の目の前にいる公孫さんは、容美端麗で見るからに美しい女性だった。

「ん？どうした？」

俺はどうやら、公孫さんの姿に見入っていた様だ。それも声を掛けられなければ気付かないほどに。

「いや、何でもない」

その時、俺の後ろから殺気を感じた。しかし、俺の後ろには関羽しかないはず……

恐る恐る後ろを見ると、顔には出していないものの、青龍偃月刀を握りながら小刻みに震えていた。

「あ、あははは……それでは、俺はこれで。何かありましたら、呼んで下さい」

すると、公孫さんと比較しても劣らぬ容美端麗な、多分この軍の将であるう男が飛び込んで来た。

「公孫さん殿！ 今、黄巾賊の奴等は油断しております。すぐに討つて出て下さい」

「お主か。今日は討つて出ないと先ほども申したはずだ」

「しかし……援軍も来た今だからこそ勝機！ 何卒ご出陣を！」

その若者のしつこさに苛立った公孫さんは、声を荒げながら言った。

「ええい、しつこいぞ！！ そんなに戦いたいのなら、お主一人で行けばよかるう！？」

「わかりました。それでは……」

おい、おい。今の流れからだ、あいつは本当に一人で突撃していくぞ。

公孫さんがゆっくりと俺の方を向いていった。

「すまん。少し取り乱した」

「あの人は？」

「あやつか？ あやつはたしか、趙雲と言ったかな。腕が立つので我が軍に客将として置いてやったのだが。どうも使い物にならない」

なるほど。今度は趙雲か。公孫さんの陣とわかった時から少し期待していたが、本当にいるとはな。……そうだ！ このままじゃやばいんじゃないか！？ いくら趙雲が強いからって、一人じゃ殺さねに行くようなもんだ。

「公孫さん殿！ 俺はあの趙雲と言う若者を助けに行く！」

俺の突然の言葉に公孫さんは驚いたようだったが、はははと笑っ

て俺に言った。

「木葉殿が行くと言うのなら止めないが、あやつ一人のために軍を動かしても良いのか？」

「かまわないよ。俺は人が死んだりするのは嫌なんだ」

公孫さんは変わった奴だと俺の背中を叩いて奥の方に行ってしまった。

しかし、もしあの男が趙雲ならきつと俺達の仲間になってくれるはずだ。俺は急ぎ自分の軍の元に戻った。

「趙子龍 く忒く」

一方、趙雲はすでに出陣の準備を整えて、馬を黄巾賊の陣に向かつて走らせていた。

「公孫さん殿には悪いが天下を取る器ではない」

そして、黄巾賊の陣前まで来ても馬のスピードを落とさず、そのままの勢いで敵陣の中に突入していった。

「我が名は趙雲！ 我が槍の餌食となつてもらおう！！」

突然のことに初めは驚いていた黄巾賊も、敵が一騎だと知るとわらわらとアリの大群のように趙雲の周りに集まってきた。しかし、黄巾賊の兵がいくら刀を振るおうが趙雲の槍さばきの前になすすべなく屍を築いていった。

「どうした！？ お前達は一人も殺せないのか！？」

「野郎！！」

次々と襲い来る黄巾賊を趙雲は見事な槍さばきで仕留めていた。しかし、やがて趙雲が倒した黄巾賊達の屍が積み重なり動きが制限されてきてしまっていた。

「おい！ どんどんかかれ！！」

黄巾賊の兵達はいくら仲間が死のうが攻撃をやめはしなかった。やがて趙雲の足元は黄巾賊の死体で埋まり動きが取れなくなってしまうた。

それでもさすがは趙雲である。体を一つ動かさずに槍さばきのみで敵の攻撃をかわしていた。しかし、この状況ではさすがの趙雲も攻防を同時に行えず、防戦一方になっていた。

「くっ！ これまでか……」

「やっと諦めたか。仲間の仇だ！ 死ね！！」

趙雲はその瞬間、死を覚悟した。武人として戦場で死ねるなら本望だと。しかし、趙雲に向かって振り下ろされた刀は、その戦闘に乱入してきたものによって止められた。

「趙雲殿！ 大丈夫ですか！？」

長い髪を風に揺らし、趙雲の目の前には青龍偃月刀を振るう、女が立っていた。

「貴殿は！？」

「私の名は関羽。兄者の命により趙雲殿に助太刀致す！！」

そう言った関羽は、青龍偃月刀を横薙ぎに振るい、近くにいた黄巾賊の首を刎ねた。

「おお！ 貴殿があのかつね殿か！？ まさか関羽殿と一緒に戦えるとは！？」

趙雲は再び槍を構えた。

そして、関羽と趙雲はお互いの背を合わせ、襲い来る黄巾賊を次々と倒していった。その時の趙雲の胸は、武将としての喜びで一杯だった。

暫くすると、遠くから銅鑼の音が響き渡った。それと同時に、黄

巾賊の陣に木葉軍の兵士達が突撃を開始した。

「こ、これは!?!」

「兄者達が来てくれた様だ。私達も急ぎ片付けてしまおう!」

そして、戦はあっという間に木葉軍の勝利で終わった。

「それにしてもあつという間に勝てたな? さすが諸葛亮だ!」

勝利に喜んでいた俺の元に、関羽は趙雲と一緒にやって来た。

「えっと。趙雲でいいんだよね?」

「何故、貴殿は私を助けたのですか?」

趙雲の唐突な質問に俺は悩みながら、思っていることをそのまま言葉にした。

「趙雲を死なせたくなかったからかな。もし、趙雲さえ良かったら俺達と一緒に戦ってくれないか?」

趙雲は暫く考えた後、俺に言った。

「確かに拙者は公孫さん殿に愛想をつかしましたが、貴殿の陣に行くことはできない」

「なんで?」

「それは、拙者がまだ未熟ゆえ、この大地にて己を磨こうと思いません。いずれ時が来ましたら、また会う事になるでしょう」

趙雲はそう言つと槍を片手に、馬にまたがり、風の如く走っていった。

その頃、木葉が指揮する義勇軍が、黄巾賊をあつという間に倒したと言う噂が飛び交っていた。

しかし官軍の将達はこの知らせを良くは思わず手柄を横取りされたと思う者さえいた。

そんな中、官軍の将である一人の男だけは、この知らせから、ただならぬ気配を感じていた。

「殿！ お聞きになりましたか！？ 木葉と言う男が率いる義勇軍が、またも黄巾賊を撃退したと！」

男は陣幕の中で書物を読み、部下の報告にびっくりと反応した。

「その報は知っておる。それより今度はどのようにして、黄巾賊を撃退したのだ？」

「はっ！ まず、敵陣深く二人の将が切り込み、その混乱に乗じて四方から攻め立てた様にごさいます」

「なるほど。将二人での突撃か……余程良い将がいると見えるな。夏侯惇。お前なら奴等と同じことができるか？」

「必ずや殿の前に敵将の首を持って参りましょう」

部下の言葉を聞き、男は声を上げて笑った。そして、立ち上がり、部屋を出て庭に降りた。

「天に登る龍は、この曹操一人で十分。それを邪魔するのなら、例

え天でも許さぬ」

曹操字を孟徳

宦官曹騰の孫に当たる。当時、宦官は世間から軽蔑されていたため、孫である曹操にもその冷たい視線は向けられた。しかし、曹操はそれをバネとし、武術・舞踊・音曲・兵法など、様々な分野で類まれな才能を発揮していった。そして、曹操の改革的な政治に、人々はいつしか始皇帝の再来と噂し曹操を恐れるようになっていった。また、曹操は才能ある者は身分にかまわず登用し、人を見抜くことにかけては誰にも負けなかったと言う。

そしてここで少し、曹操と夏侯惇の奇妙な繋がりについて触れておく。

実は曹操の父である曹嵩は、元々夏侯氏であったのだ。では何故、曹操は曹を名乗っているのか？それは曹操の父曹嵩が、中常侍・大長秋曹騰の養子となり曹氏を継いだためだ。

この時代、高位の宦官に限り、養子をとって家名を存続することが許されていたのだ。そしてこのことから、曹操と夏侯惇は血縁上、従兄弟と言うことになるのだ。

「休息」

一方、黄巾賊との戦に勝利した俺達は、公孫さんや趙雲と別れ、自分達の城に帰って来ていた。

「あゝ。やっぱり此所が一番だな！　なあ、兄貴に姉者！！」

張飛が思いつ切り伸びをしながら言った。

空は快晴。あの戦後は静かで平和そのものだ。張飛に限らず誰もがあの様になるだろう。

「こら、益徳！　少しは場をわきまえろ！」

「そんなに堅くならないでよ。俺まで堅苦しくなっちゃうから」

関羽は相変わらず、ちょっと堅い所があるよな。会ってから結構経つのに。それに比べて、張飛は楽観的だ。俺は張飛の様に接してくれた方が楽なんだけど……まあ、いいか。

「関羽、張飛。せっかく天気もいいし、少し街に行ってみないか？」

「さすが兄貴！　じゃあ早速行こうぜ！！」

「な！？　何を言っているのです。兄者には政務があるでしょう！！」

んゝ。まあ、関羽はこうくるだろうと思ったから、すでに手を打っておいた。そろそろのはずだが……

「おゝい、木葉様！　準備が整いましたよゝ！」

そう遠くから手を振っているのは諸喝亮だ。

「諸葛亮！？ お前も一緒に行くのか！？ 政務はどうするのだ！？」

「あっ、それは大丈夫です。今日の分は終わらせてあるし、何かあったらすぐに報せる様に言っておりますから」

さすが諸葛亮だ。あの関羽に付け入る隙を与えてない。いくら関羽でも、断る理由がなくなったな。

「……ってことだ。何も心配ないなら関羽も来るだろう？」

「わかりました。全く、こうゆう事に頭を使わずとも……（「じよ、じよ」）……」

関羽は渋谷街に行く事を認めてくれた。

しかし、これで何にせよ、皆で出かけることになった。

いつも政務で忙しい諸葛亮や関羽に少しでも休みを与えたいと思って、俺が計画したことだ。張飛にも……もちろん感謝してるけど、言えばついて来るとわかっていたからな。

それから、皆で街に出た俺達は店が並ぶ市にやって来ていた。

「凄い盛り上がっているな！」

「おっ、だんな！ 今日、皆さん御揃いですか！？」

店の亭主が俺に話しかけてきた。

「まあね。そうだ！ おじさん、肉まん4つちょうだい」
「はいよ！ 毎度ありがとうございます」

すぐに熱々の肉まんを詰めた袋をおじさんから渡され、皆に一つずつ渡した。

「ほい、諸葛亮」

「ありがとうございます」

「そんなに見なくても、関羽と張飛の分もあるぞ」

「な！？ わ、私はそんなに物欲しそうに見えていません！」

ちよつとからかったつもりだったが、関羽の反応が余りにも可愛かったので、これからもちよくちよくからおうと思った俺であった。

「此所の肉まんは、この辺じゃ一番だぞ」

すると、さつそく、張飛がぱくりとかじりついた。

「うまい！！ やっぱ、兄貴のおすすめだけはある！！」

張飛、諸葛亮は、熱さで口をはふはふしながら肉まんを食べていた。

しかし、関羽だけは何故か食べるのを躊躇していた。関羽は普段から、歩きながら食べるのは行儀が悪いって言ってたからな、それを気にしているのか？

「皆。あそこの椅子でちよつと休憩していこう」

そう言って俺が椅子に座ると、関羽もほつとしたように座り、ぱ

くっつと肉まんを食べ始めた。

「ふう〜。皆、いつもありがとな」

「急にどうしたんだ、兄貴？」

「皆には、助けて貰ってばかりだからな」

「そんなことありません！ 私達は、兄者と出会わなければ、今こうして人々を救う事が出来なかったのですから、私達の方こそ、兄者には感謝してもしきれません」

「ありがとう。関羽、張飛、諸葛亮」

ちょっと感動して、危うく涙腺が緩むところだったぞ。さすがに、皆の前では恥ずかしいから我慢をした。

この世界に来て関羽達と出会って、守るべき大切なものが俺にはたくさん出来た。

俺は、自分の本当の居場所を見つけられたのかも知れない。

「関羽の思い」

その夜、俺は一人庭に出て月を眺めていた。

「綺麗な月だな」

まるで全てを忘れさせてくれる様に、星は輝いて月を彩っていた。

「兄者ですか？」

その声に俺が振り替えると、いつもと違う服（多分、寝間着であろう）を着ている関羽が立っていた。

「ん？ 関羽か。こんな時間に庭に来るなんて珍しいな」

「兄者こそ、どうかしたのですか？」

「ちょっと、寝付けなくてな」

「そうですか。私も一緒です」

優しい夜風が木々を揺らし、頬を撫でた。

目を閉じて風を感じている関羽の姿は、戦っている時のものと違い、解いた黒い髪が風になびき、月明かりに照らされていた。

「気持ちの良い風ですね」

そう話し掛けてきた関羽の姿に俺の胸はと鼓動を早めた。

「兄者、如何致しましたか？ いささかお顔が赤い様ですが？」

関羽がおでこを触ろうと近付いてきたが、俺は咄嗟に後ろに身を

退いた。

「だ、大丈夫だよ！」

「左様ですか」

こうしていると、とても隣りの女の子が武神って言われていると思えない。

そして、こんな近くで関羽のことを見たのが初めてだった。よく見ると小さな傷が所々についている。きっと、戦場や稽古での傷だと思うが、妙に痛々しく見えた。

「関羽はなんで武術を始めたんだ？」

「また唐突な質問ですね」

「あつ、別に言いたくなかったらいいぞ」

関羽はにこりと笑って、空に浮かぶ月に目を向けた。

「良い機会です。兄者には話しておきましょう。私が武術を初めたのは、物心ついた頃です。皆には言っていないませんが、私は自分の故郷がわかりません」

「え！？ でも、会った時は、河北って……………」

「はい。育ったのは河北です。私は幼き頃、両親に捨てられ、王妃おひめと言つご婦人に拾われたのです。両親の顔も分からない私は、王妃様を本当の母上の様に慕って参りました。しかし……………」

関羽の言葉が止まり、その表情に陰が落ちた。

「しかし、ある時、私達の村が野盗に襲われたのです。王妃様は私を逃がすために、自ら野盗達の囹なまとなったのです。そして、野盗が立ち去った後、村の外れで変わり果てた姿になっている王妃様を発

見しました。こんな時代です。野盗に襲われるのは、日常茶飯事であることはわかっていました。わかっていましたが、私は大切な人を守る事が出来なかった。私はそんな自分自身の力の無さを、憎み、怨みました」

そうか……だから関羽は必死に弱い人達を……

関羽の拳は堅く握られていた。短い間だが、こういう時の関羽は決して感情を表に出そうとしない。

そう、とても強いのだ。俺なんかが敵わないほど……

でも、だからこそ守ってやりたい。この子の理想が実現できるように。

俺はぐつと関羽を抱き締めた。

「な！？ あ、兄者！？」

「必ず、必ず人々が笑って過ごせる平和な時代にしよう」
「……………」

きっと誰もが持っている生きることの目的。それは、時に強く輝き、時に自らを傷つける諸刃の剣となる。

俺はこの腕の中にいる女の子が、自分の思いに押し潰されない様に支えて行こうと強く思った。

「兄貴〜！ あ・さ・だ・ぞ〜！！」

ぐわ〜んと盛大に頭の中に響く大声量。

「どわ!？」

「へへへ……兄貴、朝だぜ！」

窓の外はすでに明るく小鳥達のさえずりが聞こえていた。

「ふあゝあ……」

「なんだよ、大きな欠伸何かして？ 兄貴、昨日の夜は遅かったのか？」

昨日の夜は……

「……な、何もしてないぞ!？」

張飛は一瞬不思議そうな顔をしたが、すぐに元に戻った。

「それより、皆は玉たまの間に集まっているから、兄貴も早く来てくれ

「よ

「わかった。身仕度を整えてすぐに行くよ」

そう言って張飛は先に行ってしまった。

「戦く黄巾賊 張角直屬軍 奪了」

俺は身仕度を整えると玉の間へ向かった。

俺が到着すると他の皆はすでに集まっていた。

「皆、おはよう。じゃあ早速始めようか」

俺がそう言つと諸葛亮が一步前に歩み出た。

「では、まず街の復興状況につきまして、ほぼ九割の状態まで復興しております。また、検問料を廃止したことにより、各地から商人が集まり、市は賑わいを見せております」

「今後もそこに関しては、諸葛亮に任せるよ。よろしく」

諸葛亮は一礼をすると、一步後ろに下がった。それと同時に今度は関羽が一步前に歩み出た。

「続いて軍事について報告致します」

「申し上げます!」

関羽が喋ろうとした時、一人の兵士が息を切らして駆け込んで来た。

「急に入って来る奴があるかよ。今、兄貴達は大事な」

張飛の言葉が終わる前に兵士は、息を切らせながら言った。

「申し上げます! 此所より北で、黄巾賊と官軍が戦闘を行っております」

「何だつて！？ 戦況は！？」

「只今、黄巾賊が優勢にございます！ また、官軍の旗に孫の文字が書かれております！！！」

くっ！ 立て続けに……旗に孫の字？ まさか、孫堅の軍か！？
しかし、孫堅の指揮する軍が黄巾賊に押されてるのはおかしい。
兵力の差が激しいのか？

「兵力はどのくらいになる」

「黄巾賊約八千、官軍が約六千になります」

兵力は黄巾賊の方が上か。しかし、差が二千なら、あの孫堅が黄巾賊の兵に劣るはずはないと思うが……

俺の表情を見た諸葛亮が、まるで俺の気持ちがわかっているかのように言った。

「あの孫堅の軍が、二千の兵力差で劣勢になるとは考えにくい。黄巾賊の兵についてわかることがあったら、詳しく話して下さい」

「はっ！ 黄巾の兵は、まるで官軍の精鋭の様に一糸乱れぬ統率をとっております」

その話を聞き、関羽が少し悩んで後、自身なさげに言った。

「兄者。私もはっきりとは聞いたことがないのですが、黄巾賊の中にも精鋭がいると噂を耳にしたことがあります。なんでも、張角直属の兵は黄巾賊の中で、個々の信念を強く抱いている者達だけ選抜した軍になると」

なるほど、張角直属の兵か。

もし、今の関羽の話しが本当なら、孫堅軍は危ないかもしれない。

何故なら、強く信念を抱いている者は、強く成長する。
そう、俺の目の前にいる仲間達のように。

「諸葛亮！ 官軍を助けに行くぞ！！」

「わかりました。すぐに出陣の用意を致します」

「猛徳！！」

陣幕の中に声を荒げ、夏侯惇が入って来た。

「何かあったのか？」

一方、夏侯惇とは反対に曹操は冷静な声で聞き返した。

「張角直属の黄巾賊達が、孫堅の軍と戦っている！ そして今、例
の木葉とか言う奴が城から出陣したらしい」

「ほう、それは面白い。すぐに出陣の準備をしろ！ 二人の顔を拝
みに行つてやるわ！」

曹操は先ほどまでと打つて変わって、声を上げて笑った。

その頃、黄巾賊と戦っている孫堅は、相手の予想外の強さに頭を

悩ませていた。

「まさか、黄巾の兵の中にあれ程統率が取れた部隊があるとは」

そう、この事態は孫堅も予想外であった。

目の前の黄巾賊は、まるで官軍の精鋭の様に訓練されている。

「父上!!」

いきなり陣幕の中に入って来た息子に、孫堅は声を荒げた。

「騒がしいぞ！ 何があったのだ!?!」

「申し訳ございません。しかし、権が陣内に見当たらないので、見張りの兵士に聞いたところ、数人の供を連れ、近くの川へ水浴びに行つたとの事です」

「何だと!?!」

今、近くにはきつと敵の間者もいるであろう。もし、孫権がその者達に見つかれば命の危険があった。

孫堅は急いで後を追いかける様に、数人の護衛と一緒に陣外に出た。

「戦　　く黄巾賊　張角直屬軍　式　」

「孫権様、やはりここは危険でございます。引き換えした方がよろしいのでは……」

孫権は馬に乗り、馬の手綱を供の者が握り、ゆっくりと進んでいった。

「大丈夫。それに……」

（木葉がこの近くにいる。もしかしたら会えるかもしれないのに、こんな姿じゃ……）

そして、暫く、緑のアーチの下を歩いて行くと綺麗な小川に出た。孫権は馬を降り、水浴びをするため衣服に手を掛けた。すると、遠くから馬のヒツメの音が段々と近付いて来た。

「なあ、本当に良いのかよ？」

「ば　　か！　俺達はいいつらみたいに、天下太平なんか関係ねえだろ！？　好き勝手出来るからこんな黄色い布を巻いたんだぜ」

男達は皆、黄色い布を巻いている事から、黄巾賊の兵だとわかった。理由はわからないがどうやら陣から逃げて来たらしい。

孫権とその供達は近くの茂みに身を隠し、男達が通り過ぎるのを待っていた。しかし、一緒に身を潜めさせていた馬が、急に鳴き始めてしまった。

「ん？　なんか、馬の嘶きが聞こえなかったか？」

「馬！？　まさか、俺達を追いかけて！？」

「よく聞け！ 馬の嘶きは一つだ。つまり、相手は一人か二人つてことだ」

相手の人数が自分達と同じかそれ以下だと思った二人の男達は、孫権達が隠れている茂みに近付いて行った。

そして男達は、茂みの中に隠れている孫権達を見つけると、お互いの顔を見合わせて不気味に笑った。

「おい！ こいつぁ上玉じゃねえか！！」

「は、離せ！！」

片方の男が迷いなく孫権の腕を掴み、茂みの中から引つ張り出した。

「俺達は運が良いなあ。こんな上玉めつたにお目にかかるないぜ」

「や、止めなさい！！」

供の一人が孫権を助けようと男に飛び掛かろうとした。しかし、もう一人の男がその動きに気付くと刀を首に突き立てた。

「動くなよ！ おゝい、早くしろよ！！ 後が控えてんだからよ！

」！

「うるせえよ！ ちょっと待ってる！！」

男はおもむろに孫権の衣服に手を伸ばした。

「や、止める！！ 離せ、この下郎が！！」

孫権は必死に抵抗するが、男は孫権の身体の上に乗し、両腕を足で押さえ付けていたのでどんなに暴れても逃げられなかった。

「……や、止めてくれ。頼む……」

どんなに暴れても逃げられないと悟ったのか、孫権は急に弱々しい声で男に許しをこうた。

「おい、おい。さっきまでの勢いはどうしたんだ？ それに、俺がそんなことで止めるとでも思ったのか？」

そんな孫権の行動は男の欲望に油を注いだ様だった。

男は緩んだ顔で気持ち悪く笑うと、ビリビリと孫権の衣服を破いて行った。

「止める！ 止めるー！！」

男が最後の一枚に手を掛けた瞬間、後頭部に鋭い衝撃が走った。

男は孫権に覆い被さる様に気絶してしまった。

「え？」

状況を理解出来ない孫権は、その場で硬直してしまった。

そして、孫権の供の者に刀を突き立てていた男がその状況に混乱し、今にも刃を振り下ろそうとしていた。

「関羽！ 殺しちゃだめだ！！」

「承知しました！ はああああ！！」

いきなり鋭い衝撃を受けた男は、ビクビクと身体を痙攣させ気絶した。

「よっと！ ほら、大丈夫か！？」

孫権の上で気絶している男をどかして、倒れている孫権に手を差し伸べた。その手を見た後、孫権はゆっくりと顔を上げた。

「……………木葉？」

「それ以外、誰に見えるんだ？」

俺のことを確認した孫権は、安心をしたのかポロポロと涙を流した。

「ど、どうした？ まさか、どこか怪我でもしたの？」

孫権は俺の手を借りずに立ち上がると、手をグーに握って俺の胸を叩いた。

「何でもっと早く来てくれなかったのよ！ 私は、怖くて、怖くて……………」

いや、俺達は孫堅軍の手助けに来て、たまたま此所を通る時に悲鳴が聞こえて……………って、まあ孫権が無事でよかった。

「それにしても、戦中に孫権は何故こんな所にきたんだ？」

「そ、それは……………」

孫権は「じにょ」にょと口「ご」もってしまった。

(答えられる理由なら、父上や兄上に秘密で来てないんだから)

「……………それより木葉。今、私のこと孫権って呼んだ？」

うん。それは、孫権の聞きまちがいじゃないぞ。確かに俺は仲謀のことを孫権って呼んだぞ。だって字で呼ぶと、物凄く近くにいる方の機嫌が果てしなく悪くなるからな。
俺はちらりと関羽の方を見た。

「この前は仲謀って呼んでた」

「いや、それはな……」

今度は孫権が怖い顔をしている。

そうか！ これは、どっちを選んでもダメだって事だな。……じ

ゃあ、俺はどうすればいいんだ？

俺が悩んでいると、馬の蹄の音が近付いて来た。

「新手か！？」

「権！！ どこにいる！！」

「あれは父上だ！ 父上！！」

孫権は大きく手を振った。

そして、手を振る孫権に孫堅が気付くと馬を走らせ、一直線に走って来た。その途中、孫堅は刀を抜いた。

「刀を抜いた？」

おかしいな？ 此所には、敵なんていないはずだけど。

俺が辺りを見回しても敵の姿は確認出来なかった。

その間にも孫堅は、孫権の方に……

あれ？ なんか微妙に方向が違っような……

「この賊が！！ 私の娘に何をした！！」

そう、遠くからこの状況を見た孫堅は、自分の娘が襲われていると思ったのだ。

ちなみに襲っているのは俺だと思ってる様だ。確かに、孫権の服はボロボロになってるし、端から見れば俺が襲っている様に見えなくも……

孫堅は馬の勢いを早め、俺に向かって刀を振るった。

「うわぁー!!」

俺は間一髪で刀を避けたが、切られた髪の毛がパラパラと頭から落ちて来た。当然のごとく孫堅は方向転換をして、再び向かって来た。しかし次の攻撃までの間に、俺と孫堅の間に関羽が割って入っていた。関羽に剣を受け止められた孫堅は、見覚えのある大薙刀に冷静さを取り出した。

「ん？ これは、関羽の偃月刀か？ では、私が剣を振るったのは……」

孫堅は確認するように、じっと俺の顔を見た。

「なんだ。木葉ではないか？ こんな所で何をしているのだ？」

「俺は」

「父上……!!」

孫権が孫堅に向かって駆け出した。孫堅は馬を降りて孫権が来るのを待っていた。

そして、孫権を抱き留めた後、乱れた衣服を見て改めて俺に言った。

「本当に何もしていないのだな？」

「父上。木葉は私が襲われているところを助けてくれたの」

孫権の一言でようやく信用したのか、孫堅の表情に笑顔がこぼれた。

俺って信用ないのか？

「ところで、孫堅が黄巾賊相手に苦戦をしているって聞いて、少しでも力になればと思ってきたんだけど、戦況はどうなの？」

「援軍かたじけない。敵黄巾賊の兵士は、まるで官軍の精鋭の様な統率力がある。戦況は我等が劣勢だったが、お主が来てくれた。一気に戦況をひっくり返して見せる！」

孫堅の頼もしい言葉を聞いた直後、俺は諸葛亮に服を引っ張られて耳打ちをされた。

「木葉様。今の孫堅さんは、思わぬ劣勢をしいられた事から、功を焦っておられます。今のまま戦っては危険です」

確かに、言われてみれば功を焦っているようにも見える。

「孫堅、急ぎすぎじゃないか？ 孫堅の兵士達も疲れていると思うから、少し休んでからでも」

「何を言うか！ 私の軍に、軟弱な兵はいないゆえ心配は無用だ」

だめだ。今の孫堅には何を言っても聞いてくれない。それなら何か良い策を練るしかないか。

俺はちらりと諸葛亮を見た。

諸葛亮はぴくりと反応したが、それは俺に対してではなく孫堅の後方からくる兵に向けてだった。

「孫堅様、一大事にございます！！ 孫堅様のいない我等の陣に、黄巾賊が奇襲をかけてまいりました！ 兵達は皆応戦しておりますが、我等……が……不利にございます。すぐに……お戻り……下さ
い」

その兵の背中には、矢が刺さっていた。
きつと、自分の役目を遂げるためだけに……

「お主のその心、この孫堅しかと受け取ったぞ」

孫堅の兵士を寝かせると、悲しみを堪えながら馬に乗り、風の
とく走り出した。

「関羽、張飛、諸葛亮！ 俺達も行くぞ！！」

「戦　　く黄巾賊　張角直屬軍　参く」

孫堅の後を追って陣に着くと、そこはすでに敵味方入り乱れての大混戦となっていた。俺は早く孫堅軍を助けなければと、手を高く上げて突撃の合図を送ろうとした。

その俺の行動を見た諸葛亮が慌てて止めに入った。

「待って下さい！　今、あの混戦の中に我々の軍が突入すれば、敵も味方もさらに混乱致します」

「なら、どうするんだ？」

諸葛亮は混戦となっている中の右翼と左翼を指で指し示した。

「我等が軍を二つに分けます。そして、右翼、左翼共にこちらから戦いには行かず、銅鑼を鳴らし続け、戦う素振りをして下さい。そうすれば、敵の方から我等を迎撃するために兵を割いて来るので、我等が混戦の中に加わる事なく、迎撃出来るでしょう」

さすがだ。やっぱり俺なんかとは、頭の回転が違う。

俺は諸葛亮に言われた通り、軍を二つに分けた。右翼には、関羽を大将とした兵一千。左翼には、俺と諸葛亮と張飛が同じく一千の兵を率いた。

そして、それぞれの場所に急いで移動をした後、ありったけの銅鑼と叫びで自分達をアピールした。

大混戦の中、何処かから聞こえる大音響を不思議に思い、黄巾の大将が兵に問い掛けた。

「なんだ！？ 何が起こった！？」

「左翼と右翼に敵援軍が現れました！！ その数およそ二千！！」

敵の援軍だと！？ だが、今退いてしまっただけであの方向がま
すます分からなくなってしまう。

「左翼。右翼の兵は、迎撃をしろ！ ただし、勝てなくても良い。
少しの間、時間を稼ぐのだ。その間に、我々が敵を打ち破る！！」

「敵が向かって来たぞ！？」

諸葛亮の言っていた通り、敵がむこうから俺達の方に来た。向か
って来た敵の数は、俺達と同じくらいのおよそ一千。

「迎撃の準備です！」

「わかった。張飛！ 頼んだぞ！！」

「任せとけ、兄貴！！ よっしゃあ！ かかってこい！！」

そのまま一気に戦闘開始かと思っただが、敵は一定の距離を保ち、
なかなか攻撃に出ようとしなかった。

「どうゆうことだ？ 何で奴等は向かって来ない？」

俺は諸葛亮に尋ねた。ちなみに兵士の報告によれば、関羽の方も同じ様な状況だと言っ事だ。

「諸葛亮、どうすればいいと思う」

このままでは孫堅達が心配だ。まるで孫堅軍を倒す時間を稼がれてるみたいだ。

「……そうか!? 諸葛亮、もしかしたら奴等時間を稼いでいるだけじゃないか?」

俺の言葉に諸葛亮は小さく頷いた。

「それは僕も思っていました。しかし、今、我々が下手に動けば先ほども言った様に危険があります」

動きたいのに動けないってことか。あの諸葛亮でさえ良い策が出てこないんだ。どうする?

俺が悩んでいると、後ろの方から俺を呼ぶ声がした。

「おーい!!--」

そこには、病気で床に伏せていたはずの男が馬に乗って走って来たのである。

「そんな身体で何しに来たんだ!？」

「動きたくても動けなくて困ってるんだろ? なら、俺に任せな!」

そう言うと、男は武器も持たず、丸腰のまま敵味方が入り乱れている戦場に向かっていった。

「お、おい！ あんた、そんな身体で何をするつもりだ！？」

俺は男を見殺しにするわけにもいかなく、後を追いかけた。

「誰か向こうから向かって来ますよ」

戦わず時間を稼いでいた黄巾賊に向かって、一騎の騎馬が向かって来た。

「一騎だと？ 何かの罾かも知れん！ 気をつけるのだ」

騎馬は真っ直ぐに向かって来るが、どうやら騎手は武器を持っていない様だ。黄巾賊の指揮を取っている男は、この騎手に対してたくさんの疑問が浮かんできた。

だが、こちらが動かなければ敵の罾も意味をなさない。だから、動かずにじっと騎馬が近付いて来るのを待っていた。

「はあ、はあ……………」

今までで一番胸が苦しい。

一歩進む度に、まるで一つ命を吸い取られている様だ。

男は胸に手をあて、呼吸を乱していた。

しかし、自分の役目を遂げるまでは、何があっても俺は倒れちゃいけないんだと言う思いが、男の身体を支えていた。

男は黄巾賊の前で止まると、両手を空に掲げてありったけの声で言った。

「すぐに軍を退くのだ！！ 我等が目的は、官軍との戦にあらず！ 民の平和こそ、我等が望み！！」

一方、この様子を見た黄巾賊達は、何故かしきりに近くにいる兵とぼそぼそと話していた。

そして、この黄巾賊をまとめていた指揮官がすぐに伝令を出す様に指示を出した。

「伝令！ 伝令！！」

その頃、孫堅軍と戦闘中の張曼成ちやうまんせいに伝令が届いた。周りは戦場のため、耳打ちの様な形で伝えられた。

その報告を聞いた張曼成は、すぐに軍に指示を出した。

「退け！ 退け！！ 我等はこれから、後方の部隊と合流する！！」

突然の指示に兵士達は戸惑っていたが、指示通りに動いた。

「何やってんだ!? 早く退かないと殺されるぞ!？」

俺はやつと男に追いつき、すぐに弓の届かない距離まで下がる様に言ったが、男は動こうとしなかった。

「早く下がるんだよ! 相手の援軍が来たらどうする!？」

そう言っている間に、敵黄巾賊の後ろに大きな砂煙があがっていた。

「兄貴!!」

「兄者!!」

「張飛、関羽。二人ともどうしたんだ？」

「諸葛亮殿が軍は任せて、私達に兄者を護衛しろと」

ありがたい。

正直、敵が襲って来たら俺だけではどうにもできない。

「戦　　く黄巾賊　張角直屬軍　肆く」

激しい砂煙をあげ、駆け付けた張曼成は、そのままの勢いで一番先頭まで進んだ。

「はあ、はあ……ま、間違いない。外見は少し変わっていらっしやるが、張角様に間違いない」

張曼成が軍の前で叫んでいた男を見て、言葉を漏らした。

「何をしている！　張角様をお迎いに行くぞ！！」

「な！？　こつちに向かつて来るぞ！」

黄巾賊が俺達に向かつて来たが、何故か数人だけであった。

「やっと気付いたか」

男が胸を張りながら前に進んだ。

そして、不思議な光景が俺の目の前に写し出された。

それは、こつちに向かつて来た黄巾賊達が男の前で馬を降り、地面に膝をついて、男に深々と頭を下げていたからである。

「お捜ししました。今までどちらにおられたのですか、張角様」

「ちょ、張角だつて!? こんなおっさんが!? ……つと、今はまずいな……」

「この人が張角!？」

「でも、それだつたら名前を名乗れなかったのも納得出来る。」

「張角様。我々と共にお戻り下さい。皆、張角様を心配しています」

「そう言われた張角は俺の方を振り返った。」

「悪かったな。隠すつもりはなかったんだ。ただ、俺の命は残り短い」

「何をおっしゃいます!？」

「本当の事だ。だが、俺はこいつらの大将だ。こんな俺に今までついて来てくれたこいつらを残していけない。だから、俺は捜していたんだ。天下人となりうる人物を。こいつらを任せられる奴を」

「それで、見つかったのか？」

「張角はにこりと笑顔を作った。」

「3人程、見つかった。一人は、官軍の将、曹操。同じく、孫堅。そして、お前だ」

「俺!？」

「それは過大評価をし過ぎだ。俺はただの学生だつたんだ。天下なんて……」

「ほう、貴様が黄巾賊供の頭か。孫堅と木葉の顔を見に來ただけだったが、とんだ収穫のようだ」

「いつの間に俺達の側に來たのかわからないが、格好からは何処かの将だと推測出來た。」

「誰だ!？」

「くくく……余の顔を知らぬとはな」

「そ、曹操……」

張角の口から驚きの余り、そいつの名前が出た。

曹操、この男が!？」

この世界に来て、見てきた奴等とは比較にならないほどの威圧感があった。

「さて、それでは張角の首を頂くとするか。夏侯惇!！」

何の前口上もなく、後ろにいた將に曹操は命じた。そして、曹操から命を受けた夏侯惇は躊躇することなく刀を抜いた。

「悪く思つな」

夏侯惇は抜いた刀を張角に向けて振り下ろした。

ほとんど一瞬の出来事だったので、俺は全く反応が出来なかった。だが、関羽だけはしっかりと反応していた。

振り下ろされた夏侯惇の刀が張角の首を跳ねる前に偃月刀で受け止めていた。

「貴殿のその行為、関心せぬな」

「これは……そうか、お前が関羽か」

夏侯惇は関羽の偃月刀を見てにやりと笑った。

「どけ、関羽!！ 退かねば、貴様も切る!！」

「ほう、この関羽を切るとは……殺れるならやってみるが良い」

二人は同時に距離をとった。

「関羽！！」

「こちらは私に任せて下さい！ 兄者は早く張角殿を！！」

「わかった。頼んだぞ！！」

俺は張飛、張曼成と共に張角を連れて自軍に向かって走った。

「夏侯惇！ 関羽はそちに任せた。余は軍を率いて張角を追う！」

「早く行け、猛徳！！ 大物が逃げちまう！！」

そして曹操は、自分の軍に合図を送り、張角を追いかけた。

「戦　　く黄巾賊　張角直屬軍　伍」

張角、曹操らが去った後には、関羽と夏侯惇が睨み合いを続けていた。

「お主以外に仲間を一人も残さず行くとは、相当信頼をされているようだな」

関羽が夏侯惇に向けて言い放った。

これに対して夏侯惇も鼻で笑い言った。

「それはお互い様だ。どちらが主人の信頼に報いる事が出来るか……行くぞ!!」

二人同時に飛び出した。

まずは、武器の性質的に、長さで有利な関羽の偃月刀が夏侯惇を襲った。夏侯惇はこの攻撃に対し、関羽の偃月刀を受けると、その上を滑らす様にして、関羽との間合いを縮めようとした。

しかし、関羽は迫って来た夏侯惇の刀を偃月刀の柄で受け止めた。

「さすがは関羽。この俺の腕を痺れさせるとは」

「お主もなかなかやるな。まさか、私の偃月刀が受けられるとは思わなかったぞ」

二人の動きが鏖競り合いの様な形で止まった。お互いに相手を攻撃する隙を伺っている様だった。

そんな中で先に動いたのは、夏侯惇だった。夏侯惇は刀を一度引き、関羽の足下を狙った。関羽は、偃月刀を地面に突き立て、それを防いだ。そして、相手の攻撃を防いだ瞬間、地面に突き立てた偃

月刀を軸にして、回し蹴りをくり出した。

関羽の蹴りは夏侯惇の左脇腹に深々と突き刺さり、夏侯惇の膝を地面につけた。

この間、ほんの数秒の出来事だった。

「ぐっ！ け、蹴りとは、この夏侯惇、見誤ったわ。だが、まだ終わりではない」

立ち上がるうとしている夏侯惇をまるで無視するかの様に、関羽は近くに繋いでいた馬に乗った。

「まだ勝負はついていないぞ！ 何処へ行くつもりだ!？」

「貴殿と剣を交えた時、貴殿の剣には曇りを感じられなかった。このまま続ければ、お互いただではすまなくなる。私には守らなければならぬ人々がいる」

そう言うと、関羽は夏侯惇を残して、木葉の後を追いかけた。

そして、張角を連れて逃げた俺は、曹操とその部下三千に追われていた。

「くそ！ こんな大軍で追いかけて来るなんて、何考えてるんだ!？」

俺達は必死に逃げた。そして、何とか曹操の軍に追いつかれる前に自軍と合流できた。

軍を指揮していた諸葛亮は、俺達の様子を見ると慌てて事情を聞こうとしたが、後ろから迫り来る曹操の軍勢を見つけると、大まかな状況は理解した様だった。

俺はそれに付け足す様に、簡潔に事態を伝えた。

「なるほど。すぐに撤退すべきですね」

諸葛亮の言葉を聞いた張飛がその言葉に対し批判した。

「戦う前から逃げるなんてみつともないぜ！！それに戦ってみなぐちゃ結果は判らないだろ！？」

張飛の言葉に対して諸葛亮は簡潔に答えた。

「結果は見えています。軍の兵力、兵数、共に我々が下回っています。張將軍がいくら強いからと言っても多勢に無勢、勝てる可能性は少ない。唯一我等に勝機があるとすれば、孫堅軍と合流すること。いかに曹操と言え、我等と孫堅軍の両方を相手にするのは危険だと感じるでしょう」

今は策を選んでいる時間がない。早くしないと曹操の軍に追いつかれてしまう。

「わかった。諸葛亮の言う通り、孫堅達と合流しよう」

俺は急ぎ全軍に指令を出した。

しかし、孫堅の軍と会うまでは、逃げながら戦う形となる俺達は、圧倒的に不利だ。そんな風に色々と思考していたが、孫堅の陣に向かってすぐ見慣れた旗が目に入ってきた。

旗には孫の文字が書いてあった。

「おお！ 無事であったか！」

「孫堅こそ、何故ここにいるんだ!？」

「急に黄巾賊達が退却を始めたので、お主のことが心配だな」

「どうやら、優勢だった黄巾賊が退いたことで、孫堅は黄巾賊が俺達に攻撃の矛先をむけたのだと思っただらしい。

どんな理由であれ、今は孫堅と合流出来てよかった。

「それより、お主達はどうしたのだ？ 見ると退却をしているようだが……」

俺は孫堅に簡潔に出来るだけ早く伝えた。

「……なるほど。それでお主が追われているのか」

孫堅は悩んでいた。官軍である自分が、目の前にいる黄巾賊の先導者を見逃せない事。そして、娘を助けてもらった木葉に対し、刃を向ける事。

そう、誇りなどを捨て功を取るか。それとも、誇りを取るか。

孫堅が何も背負っていないければ迷わず誇りを取っただろう。しかし、今は家族や自分について来てくれた仲間がいる。それを全て無視することは出来ない。

そんな悩んでいる孫堅に向けて仲謀が言った。

「父上！ お願いします。木葉に力を貸してあげて下さい」

仲謀は頭を深く下げた。

その仲謀の姿を見た孫堅は、にこりと笑って優しく仲謀の髪を撫でると、何かを決めた様だった。

「わかった。私は木葉に力を貸そう」

孫堅の決断が下つたと同時に、曹操の軍に追いつかれてた。曹操軍は俺達の前で止まり、曹操が兵より数歩前に出て来た。そして、俺と孫堅の顔を見た後、突然声を上げて笑った。

「はっはっは！ お主が孫堅か？ 儂と天下をかけて戦うに等しい器だと思っていたが残念だ」

曹操が何を言いたいのかわからなかった。

「孫堅よ。お主の顔には、死相が出ておるわ」

「父上に向かって何を言うか！ 無礼者が！！」

曹操の言葉に怒った、孫策、仲謀が刀を手に取り数歩歩み出た。

「策、権、下がっておれ！」

その二人を見た曹操は、またも声を上げて笑った。しかし、先ほどとは違いどこか嬉しそうだった。

「ふむ。それが、お主の子達か。策と言ったか？ 孫堅に似て良い面構えだが、お主にも死相が見え隠れしているゆえ、気をつけるのだな。そして、この娘はいずれ大きくなるだろう。儂と貴様の強大な敵となりうる器よ」

曹操は俺の顔を見て来た。今の曹操の話だと、いずれ仲謀と敵同士になるって事だけど、俺には信じられない。

そう、仲謀と殺し合うなんて……

「まあ、余興もこれくらいでよからう。さて、張角を素直に渡せば良い。渡さねば力づくで奪い取るが……」

曹操は目で俺に威嚇をしてきた。しかし、殺されるとわかっていて、引き渡せるわけない。

俺は諸葛亮の方に視線を送った。今の状況で曹操から逃げる策が、俺には全く浮かんで来なかったからである。

しかし、諸葛亮からの返答は来なかった。

それは、諸葛亮もまた、この状況で有効な策が見つからなかったのである。いや、正確には見つかつてはいるが、リスクがありすぎて策と呼ぶには難しかったのである。

しかし、それ以外見つからない。こうしている間にも曹操は痺れを切らして襲って来るだろう。

そして、諸葛亮が動こうとした。

しかし、曹操も同時に痺れを切らしてしまった。

「なるほど。では、力づくで奪い取るまでよ。夏侯淵……」

曹操の後ろから夏侯淵が刀を抜き、馬を進ませた。それを見た張飛も夏侯淵と同じ様に、俺の前に出て来た。

「おい！ 兄貴に指一本でも触れてみる。俺の蛇矛がお前を貫くぞ……」

一触即発の空気がピリピリと流れた。

夏侯淵は一言も言葉を発しない。しかし、その眼光は鋭く他の兵とは全く違っていた。

「兄者……！ 益徳……！」

そんな空気の中、関羽が張飛と夏侯淵の間に割り込む様に飛び込んで来た。

「姉者！ あいつは！？」

「兄者達が心配だったので、軽くやり合って引き上げて来たのだ」

関羽は軽くと言っているが、関羽の軽くはきつと俺達が想像している様に甘くないんだろうな……

こんな状況の中で、俺は関羽の軽くと言う言葉に反応してしまった。そして、関羽より少し遅れて夏侯惇も戻って来た。

「すまぬ！！ 女だと心の奥で油断をしていたようだ」

言葉とは裏腹に、関羽に蹴られた脇腹を押さえながら言った。その夏侯惇の言葉を聞き、曹操は嬉しそうに笑った。

「はっはっは！！ お前がそう言うのは、全力で戦った時だけよ！ しかし、全力のお主が軽く足縋われるとはな。気に入った！ 関羽よ、我が下に来ぬか？ お主なら重用しよう」

「馬鹿なことを言うな！！ 私は兄者以外の下に行く気などない！！」

もちろん、関羽は即答したが、曹操も関羽ならどのように答えるかは予想していたはずだ。

「全く迷いもせず、即座に答えようとは……面白い、僕はますますお主が欲しくなったぞ」

「関羽！！」

「私の心配は無用です。兄者は早く安全な所まで、張角を連れて逃

「捨て下さい!!」

俺は関羽に目で合図を送り、急いでその場から離れてた。しかし、曹操軍が簡単に逃がしてくれるわけなどなかった。

それに対し、こちらは孫堅軍と共に迎撃態勢を取って応戦した。

関羽、張飛、諸葛亮に加え、孫堅軍の猛将達の活躍は他を抜きんでていたが、兵同士の戦いでは、圧倒的に曹操軍の方が優勢であった。そんな接戦の中、いつの間にか姿を消している人物がいた。

「関羽將軍!! 敵將曹操、夏侯惇らの姿が見当たりませぬ!!」

兵士が声を張って関羽に報告をした。

「何!? まさか……兄者!!」

関羽は急ぎ、木葉の後を追った。その関羽の行動を見た諸葛亮は、張飛に追いかける様指示を出した。

「黄巾の乱　〜終〜」

森の中を逃げる木葉と張角は、馬のヒヅメの跡がつかぬ様に、草の生い茂った場所を通って逃げていた。

「大丈夫？」

「ああ、なんとかな……」

張角は、胸を押さえ、呼吸は荒く、見るからに苦しそうだった。

「木葉。お前は一体何を望む？」

張角が唐突に話しかけてきた。

「何を望むって、どういう事だ？」

「決まってる。お前が天下を取った時、全てはお前の思うままだ。その時、お前は何を望むかって言ってるんだ」

望みって言われても、俺にはそんなものはない。この世界に来て、関羽や張飛達と出会って……

「……俺自身の望み、それは皆が幸せに笑っていられることだ。だから、皆の望む事が、俺の望みだ」

「自分の望みより、周りの奴等を優先させるのか！？ ……く、くく、はっはっは！！」

「なんだよ。そんな笑わなくても良いじゃないか」

木葉は少しいじけた様に言った。

「悪い、悪い。そんなつもりじゃないんだ。ただ、余りにも予想外だったからな」

そう言った後、張角は何かを悩んでいる様に考えていた。

「よし、決めたぞ！！ 俺はお前にあいつらを預ける」

どうやら張角は、先ほど言っていた自分の仲間達を預ける事で悩んでいた様だったのだ。

そして、その結果俺に決めたらしかつたが、もちろん俺自身は自分にその資格があるのかどうか迷っていた。

「張角、一つ聞いていいか？ 何で俺なんだ？ 俺より力のある、曹操や孫堅に預けた方が安心出来るんじゃないか？」

「確かに安心は出来る。だが、安心できるのは俺だけだ。曹操は部下を道具の様に扱う。孫堅は良い君主だと思うが、感情に流される時がある。後はお前だが、仲間達の言う事を聞き、身分など関係なく誰にも同じ様に接している。それがお前の長所であり、短所でもある。なんにしても、俺がお前を気に入った。お前なら安心して仲間達を任せられる」

そんなことを言われててもな……

確かに三国志の書物では、黄巾の乱が終わった後の黄巾賊については書かれていなかった。

しかし、それは予測は出来る。官軍などに捕まり打首となった者や、官軍などから逃げきれたが、捕まることを恐れて身を隠しながら細々と生きて行く者。どれも良いものじゃないことは、感じられる。

それなら張角が言う様に、誰かに仲間達を預けた方がいいと思う。

「わかった。あなたの仲間達は皆、俺が預かるよ」

俺が張角にそう返答をした時だった。

「木葉。貴様に今力をつけられては困る」

ぱつと振り替えると、そこには曹操と夏侯惇が刀を抜き今にも切り掛かってくる雰囲気だった。

「張角！！ あなたは早く逃げてくれ！ 俺が時間を稼ぐ！！」

俺は腰に差してあった刀を抜いた。

それがいかに子供騙しな事かは、俺自身もよくわかっていたが、今戦えるのは俺しかない。

「馬鹿野郎！ お前が死んじまったら、俺の仲間達がどうなると思っただ！ あいつらが狙っているのは、俺だ。俺が行けばそれで……」

「うるさい！ 俺の周りで死なれるのは嫌なんだ。だから俺は精一杯あなたを守る！！」

「お前……」

張角は、その場を動けなかった。それは、自分がこの戦いを見ていなければいけないと感じたからだ。

お互いに相手の出方を伺う静かな時間が流れていた。

そして、同時に動くようになった時、草むらの中から三頭の馬が飛び出して来た。

「兄者！！」

「兄貴！！ 無事か！？」

心強い援軍が来てくれた。関羽に張飛、そして、孫堅までも。

「途中、姿が見えなくなったので、もしやと思ってな」

さすがの曹操もこの豪傑達を相手にするには、現在の戦力では無理だと思ったのか、すぐに退く様に夏侯惇に言った。

「まあ良い。張角の首などのため、我が覇道を終わらす訳にはいかぬ。精々、力を貯えておくのだな」

そう言うのと、曹操は引き返していった。そして、暫くすると曹操軍も撤退をしていった。

「一時はどうなるかと思ったけど、何とかだったな」

俺はほっと一息ついた。

「ぐ……」

「おい！？ どうしたんだ！？」

張角が胸を押さえ、その場にうずくまっていた。そして、口をぱくぱくと動かし俺に何かを言おうとしていた。

俺は張角の口元に耳を寄せた。

「張曼成はいるかい？」

「張曼成。張角が話しをしたいって」

すると、慌てて張曼成は張角の側に駆け寄った。

「いいか？ 俺がくたばったら、黄巾党は解散させる。そして、志のある奴等をお前が選り木葉に力を貸してやるんだ」

張曼成は頷いた。頷く事が精一杯だったのだ。

「木葉を呼んでくれ」

張角がそう言うと張曼成は俺を呼んだ。

「木葉、俺がくたばったら、この首を持って手柄をたてるんだ」
「なっ！？ 何を言ってるんだ！？」

そう、張角の首を持って手柄をたてるという事は、張角の首を晒し首にすると言う事だ。死んだ人間に対し、さらに辱める様なことを、俺には出来ない。

そんな木葉の表情を見ていた張角が言った。

「いいか。今の世は力が無ければ、いくら志しを持つと力が力によって潰されてしまう。だからお前もその力に対抗出来る、力を持たなくちゃいけねえんだ……」

そこまで言い終えると、張角は気を失ってしまった。

張角の言っていることはわかる。わかるけど、俺は……俺は……

その後、俺達は孫堅と別れ、城に戻った。別れ際孫堅は、張角のことについて全て俺に任せると言っていた。

城についてすぐ、医者に張角の病状を見てもらったが、結果身体はすでにぼろぼろで、生きているのが奇跡に近いと言っていた。

その夜、張角は息を引き取った。民のために立ち上がって志し半ばで……

張曼成は、張角に言われた通り、各地の黄巾賊達に解散の報せを出した。

そして、俺は張角を丁寧に埋葬させ、張角が病死になったことを皆に伝えた。

こうして、黄巾の乱という始まりは終わった。しかし、この騒動を利用しようと思う者達がすでに動き始めていたのを皆はまだ知らない……

「新たな敵」

都では、黄巾賊が各地で解散しているとの噂が広まり、人々には歓喜の声が広がっていた。

朝廷内の重臣の間でも同じ様に喜びの声が上がっていたが、この事態に一人疑問を抱いた人物がいた。何がおかしいかと言うと、黄巾賊達の先導者、張角の事については何も情報が入って来なかったからである。

それは、張角が静かに眠れる様にと思った木葉の心遣いから、外に張角の事が漏れない様に秘密裏に進めたためだった。

「董卓様」

暗闇の中から物音一つたてず、その男は主人の前に現れ、頭を下げた。

「して、どうだった？」

「はっ！ 董卓様のおっしゃった通り、張角の死を隠していた人物がおりました」

「ほう……その人物は？」

董卓は、足を組み、自分の顎を撫でる様な仕草をとった。

「黄巾賊討伐で功績を立てた、義勇軍の大將、木葉と言う者にございます」

「あやつか……噂では聞いておつたが、まさか張角をかくまうとはな。全く、偽善者の見本の様な奴だな」

董卓はこの話しが気に入らなかつたのか、表情を強張らせて立ち上がった。

「すぐに韓遂に伝令を送れ！！ 儂が書状を書く！ そして、影達を使い、この様な噂を流せ。張角を討ち取つたのは、この董卓だとな」

「はっ！」

そう言つと、男は一瞬の内に目の前から消えてしまった。

「くくく……… やつと来たか。俺が天下を治める時が……… ははは、はっはっは……！」

関羽が部屋の中からでも聞こえる様な声を上げて、部屋に入つて来た。

「そんなに慌てて何があつたんだ？」

「涼州の韓遂が兵を率いて、朝廷に叛旗を翻した！！」

涼州の韓遂と言えば、かの有名な马超と共に潼関の戦いにおいて曹操を後一步のところまで追い詰めた武将じゃないか。

しかし、それだけなら関羽のこの慌て様はおかしい。

「それだけじゃない。その討伐に私達が迎えと朝廷からの使者が先ほど」

「何だつて!？」

じよ、「冗談じゃない!？」

今、俺達の軍は黄巾賊との戦での傷がまだ癒えていない。

「すぐに諸葛亮を呼んできてくれ！」

俺はすぐに身仕度をして、玉の間に急いだ。俺が玉の間に着いた時には、すでに諸葛亮を始め、各將軍達が集まっていた。

「皆、急に呼び出してすまない。涼州で叛旗を翻した韓遂討伐について各將軍に意見を聞きたい」

「兄貴！ そんな奴、すぐに行つてぶつ倒してやろうぜ!!」

ん〜。実に張飛らしい意見だ。

「他にはない？」

「兄者。やはり、朝廷の意志には逆らえない。私も討伐に行くべきだと思えます」

俺も討伐には向かわなくては行けないと思う。しかし……

「諸葛亮はどう思う？」

諸葛亮は静かに一步前に踏み出した。

「僕も、関將軍達と同じ様に、討伐に行くしかないと思います。しかし、相手韓遂の兵は戦に長けています。僕達が真面に戦えば返り討ちに遭うでしょう」

「ならどうする？」

「簡単です。僕達で勝てないなら、他の人にやってもらおう」

諸葛亮の意見は最もだが、それが出来ないからこんなに困っているんだ。

「今回の韓遂の叛旗は、予め予定しての事だと思えます。それは、あの董卓將軍が黄巾賊討伐の際にみせた退却で予想ができる」

黄巾賊討伐の際の退却？

聞いた話だが、確かにあの退却には不思議に思う点がいくつかあったが、それが韓遂の叛旗とどう繋がってくるって言うんだ。

「僕は、あの退却の中で韓遂と董卓將軍が話しを進めた様に思えます。何故ならあの戦、戦上手の董卓將軍が黄巾賊の部隊に続けた異様なまでの兵糧攻め、これは明らかに董卓將軍が涼州の黄巾賊との戦を嫌がっている証拠です。それは、董卓將軍が涼州の兵と戦いたくないと言う理由もあったでしょうが、それよりも朝廷内に入る絶好の機会を手に入れたかったからだと思います」

「朝廷内に入る？」

董卓は、三国志で暴君と言われた男だ。そして、俺が知ってる董卓って人物は、少なくとも誰かと共闘する奴ではない。

諸葛亮の話しはまだ続いた。

「そうです。董卓將軍は黄巾賊討伐の退却。以後は出陣の機会は減り、外に出ることは少なくなるでしょう」

つまり、外に出ないと言うことは、自分の周りの人間や重役達と交流を深められる上に、交流を深めた重役達を使い内部から俺達を操作出来るって事だ。

「外からは韓遂。内からは董卓って訳だな。それで、どうするんだ？」

俺の問いに、諸葛亮はにっこりと笑って答えた。

「董卓將軍は、重役達を使い帝に取り入っているに違いありません。なら、こちらもその重役達を使うのです」

「どうやって？」

「それはお任せ下さい」

諸葛亮は一礼すると、踵を返して玉の間から出て行った。何もわからない俺達は、ただ、諸葛亮を信じることしか出来なかった。

「名参謀 く買ク 文和」

諸葛亮は玉の間を後にすると、すぐに文官達を集めた。

「皆さん。すでに噂は聞いています。朝廷からの使者がいまして、我々に韓遂討伐の命が下りました」

それを聞いた文官達は各々の意見を述べ始めたが、どれも諸葛亮が望んでいる答えではなかった。そんな中、一人の文官が他の者の意見を聞いて大声で笑い始めた。

「はっはっは!!」

「何がおかしい!？」

「これが笑わずにいられるか!!」

笑い続ける男に諸葛亮が尋ねた。

「そなたは何故笑っている? 今の状況をわかっているのでしょうか?」

この諸葛亮の言葉に文官達も頷いた。

「諸葛亮殿ならずで気付いていらつしやるはずです。今回の戦の敵は韓遂にあらず、朝廷内の腐った重役達だと。それなのにお主達は軍がどうこう言いおって。今回、戦をするのは兵士ではなく、我等なのだ何故わからんだ!!」

その言葉を聞いた諸葛亮はにこりと笑った。

「貴方の名前は？」

「はい。私、姓を賈、名をく、字を文和と申します」

「それでは賈く。貴方に重役を担って頂きます。朝廷に使者として赴き、討伐命令を董卓將軍に移して下さい」

「有り難きお言葉。この身命を持って必ずや良いご報告を」

そう言って、賈くは部屋を出て行き、その日の内に都へ出発した。

次の日、俺は昨日のことが気になって諸葛亮に尋ねた。

「諸葛亮、昨日の事だが……大丈夫なのか？」

「心配はいりません。賈くと言う優れた人物を使者として、朝廷に向かわせました」

「賈く！？」

「如何致しましたか？」

「一応聞いておくけど、字はなんて言うんだ？」

「字ですか？ 字は文和と申しております」

間違いないな。参謀として、名を残しているあの賈くだ。

しかし、何故その賈くが俺の配下に？ ……まさか！？

「諸葛亮！ すぐに賈くを連れ戻すんだ！！」

「いきなりどうされたのです？ 賈くでしたら、私の目から見ても、問題なく今回の任をこなすでしょう」

「違うんだ！ 賈くは董卓につく可能性があるんだ！」

「それはありません。私が見るに、彼は忠義の士。裏切りなどあり

ません」

諸葛亮がそう言うのなら、買くはその様な人物なのだろうが、事実、今まで順序や方法が違うにせよ、史実通りに事が起きているんだ。

なら、今度も買くは何らかの理由で董卓につく可能性があるんだ。

「これは兄者と諸葛亮殿、如何致しましたか？」

たまたま通りかかったのであろう関羽が声をかけてきた。そして、俺は簡単に事情を説明した。

「なるほど。では、兄者は買くと言う者が董卓の配下になってしまつと……」

「そつだ！ だから早く止めないと大変な事になる！！」

「諸葛亮軍師。今までも何回かありましたが、兄者がこの様なことを言う時は不思議と、兄者が言った通りになっているのです。ですから今回も」

諸葛亮はその場で悩むと、すぐに買くを連れ戻す様に、近くにいた兵士に指示を出した。

（木葉様のおっしゃる事がもし起きてしまつたら、我等に取つて強大な敵になる事は間違いないだろう。それは絶対に避けなければ……）

「董卓と賈ク」

一方、その頃、昨晚城を出た賈クは、すでに都に到着していた。

「ふむ。やはり都は華やかだな」

辺りを見回しながら、大きな通りを馬の手綱を引きながら歩いていた。

暫く行くと大きな扉とそれを守る様に立っている門番の姿が、賈クの前に現れた。

「あれか……」

賈クは門番に近付いて行った。

「私は今回韓遂討伐の命を受けた木葉様の使者として参った。すまんが帝に取り次いで欲しい」

「はあ〜？ 帝にだって？ 無理だ。今帝はお忙しいのだ。さあ、帰った！ 帰った！」

門番の男は大袈裟な仕草をし、その後、小さい声でぼそつと言った。

「まあ、お前の態度次第では、相談にのらなくもないが……」

その言葉ですぐに賄賂を要求しているのだと賈クは気付いた。

(こんな門番までも賄賂を贈らねば動かぬとは朝廷も終わりだな)

そう心で眩きながも、賈クは袖下から門番に賄賂を渡した。

「どうかお取り次ぎをお願いします」

「……ちよつと待っている」

そう言つて、門番は中に入つて行つた。

暫くすると門番は戻つて来た。

「帝はお忙しいので会う事は出来ぬとのことだ。しかし、帝の代わりに董卓將軍が話を聞いて下さるそうだ」

やれやれ、帝と話す前に今回の敵の將軍と話すことになるとは、考えもしていなかつたが敵を知る良いチャンスかもしれない。

賈クが門番に案内をされて向かつたのは、その場所から少し離れた所にある部屋だつた。

中に入ると董卓がふてぶてしく足を組み、その足に肘を立て、じつと賈クを観察するように見ていた。

「お前が木葉の使者の者か？」

「いかにも。賈クと申します」

賈クは一礼をした。

思つていた通り、この董卓と言う男は、すでに自分が権力を握つたつもりでいるようだ。つとになると、この男を説き伏せられなければ、今回の私の任務を遂行することなど無理だと言う事。

「して、お前は何をしに来たのだ？」

「利を説きに参りました」

「ほう。その利とは？」

「現在、涼州で韓遂が叛旗を翻したのは知っているはず。私の

主人が、この討伐軍として朝廷より命を受けました」

「その事は耳にしている」

「しかし、私達は先の戦にて功績は上げたものの、董卓將軍を始め官軍の將軍達の足下にも及びません」

董卓は賈クの話しを面白そうに聞いていた。

それもそのはずだ。朝廷からの命と言ったが、実際に朝廷を動かしたのがこの男だからだ。恐らく、私がどのような事を言うのかを楽しんでいるに違いない。

「私達は朝廷の命に従い韓遂討伐に行きますが、圧倒的なまでの戦力差があります。これでは時間を稼ぐのが精一杯。いや、敗戦を繰り返すでしょう。そして、私達が敗戦を重ねる事により、朝廷への信頼感が大きく欠けていく事になります」

「ふむ。その通りだな」

董卓の態度は依然変わらなかった。その様子を見た賈クはあることに気がついた。

それは、董卓の貪欲な策だった。今回の朝廷からの命は董卓が指示したもの、それは私達がこれ以上力をつけると後の計画に何らかの影響が出ると見たからだろう。

しかし、それだけではなかった。私達の力を削ぐのと同時に朝廷に対する信頼を失わせ、自分が帝の側に行く事こそが本当の目的だったのだ。

董卓の目的を知った賈クに、ほんの一瞬、動揺が走った。董卓は賈クの一瞬の動揺を見逃さなかった。

董卓が手で何かの合図を送ると、潜んでいた董卓の配下の者が賈クの手足を押さえつけた。

「董卓將軍！！何をなさいます!?!」

董卓は薄ら笑いを浮かべながら立ち上がり、賈クの前に来た。

「さすがこの騒ぎの中使者として寄越されるだけのことはあるな。たったこれだけの会話で儂の目的に気付いてしまつとは」

「離せ！」

賈クは必死に抵抗するが、がっちり固められた手足はびくりとも動かなかつた。

「どうだ？ お前のその知恵を儂のために使わんか？」

「ふ、ふざけるな！ 誰が貴様などのために！」

「まあ良い。貴様はいずれ自分から儂の下に来るだらうからな。そいつを閉じ込めておけ！」

賈クはずるずると引きつられる様に連れて行かれた。

「非情 董卓」

その頃、諸葛亮の命で賈クの後を追っていた兵士は、賈クが董卓に捕らえられたことを知り急ぎ来た道を引き返していた。

「はあ、はあ……一刻も早くこの事を諸葛亮様に報せなくては」

できる限りのスピードで馬を走らせていた。その途中、数人の男達が行く手を遮る様に立っていた。兵士は急いでいたため、その男達への注意が散漫していた。

兵士が男達の横をすり抜けようとした瞬間、一人の男の腕がぴくりと動いた。そして、兵士が男達の横をすり抜けた直後、兵士は馬から落馬した。

その喉元には小さな短剣が深々と突き刺さっていた。

諸葛亮が息を切らして、報告に来た。

「木葉様！ 賈クの後を追わせた兵士が、先ほど城外で殺されているのを発見致しました」

「何!？」

だが、何で殺されなくちゃいけないんだ？ あの兵士には、賈クの後を追わせただけのはず。

まさか!？ 賈ク自身が自分の裏切りをこちらにばれない様に、口封じだったのか!？

木葉は三国志の話しを知っているだけに、賈クのことをどこか信用仕切れないでいた。

「すぐに間者を放ってくれ！ 賈クの様子が知りたい！！」
「わかりました」

「なるほど、お主達が賈クの親か」

董卓の前には二人の夫婦が両手を後ろで縛られ、立たされていた。

「私達に何かご用でしょうか？」

夫の方が声を震わせながら董卓に質問をした。

「何、簡単な事だ。お前達の息子に、俺に力を貸す様に言ってほしい」

「し、しかし、息子は義理堅く、そうそう他の人に力を貸すなど」
「その時は、その時。他に考えてある」

董卓がそう言うと、夫もダメ元でいいのならば、息子に話してみる事にした。

賈クは少し離れた庭の隅にある地下室の中にある、鉄格子で出来た部屋に監禁されていた。その部屋には、日用品などは一切なく、冷たい鉄に囲まれ、日に二度ある食事だけが外の時間を教えてくれた。

突然、部屋のドアが開き明かりが差し込む。賈クは眩しさに、手で光を避けた。

暫くすると、賈クの日も慣れたようで、部屋に入って来た人物を見た。

「ち、父上！？ 何故このような場所に？」

いきなりの父の登場に驚いた賈クだったが、父の後ろにいる人物を見て、全てを理解した。

「父上！ 董卓に頼まれ、仕方なく私を説得しに来たのでしょうか、無駄です。私の心は変わりません！！」

賈ク of 言葉を聞き、父は少し笑顔をこぼした。
そして、後ろの男も……

「賈ク。父上の言葉を聞かないとは、とんだ親不孝ものだな」

そう言つて、董卓は自分の刀を抜き、何の躊躇もなく父親の右腕を切り落とした。

「うぎゃああああ！！」

「父上！！ 董卓、貴様何を！！」

「おっと、これは失敬をした。お主の言葉が余りにショックで、手元が狂ってしまった様だ」

そんなことを言っている内にも、父親の切られた右腕からは血が溢れ出し、みるみる顔色が青ざめていった。

「董卓！ 父上を早く手当てしてくれ！！」

「ん？ 聞こえないなあ？ もっと大きな声で言ってくれるか？」

ここまでやった董卓が、賈クに求めている言葉は他にあつた。賈クもそのことに気付いた様だったが、ぐっと唇を噛んだで自分自身に問い掛けていた。

今ここで私が言わねば、父上は死んでしまう。しかし、それは同時に今までお世話になった木葉様を裏切る事になる。

ほんの数十秒、賈クは考えた後、唇から血が出るほど噛み締め董卓に言った。

「董卓。お前に力を貸そう。だから、早く父上の手当てをしてくれ！！」

賈ク of 言葉を聞き、董卓は気味悪くにやりと笑った。

「やっと言ったか。おい、こいつの手当てをしてやれ」

すると、董卓の後ろを付いて来ていた男が、その場で止血の応急処置を行った後、父親を医者の下へ連れて行った。

賈クは鉄格子の鍵を開けられ外に出た。

「あゝ、そうそう。お主の家族は皆、儂が面倒をみてやるからな」

面倒をみる？ 違う。それは私が逃げたりしない様に人質に取ると言う事だ。

「悲しみの作戦 くさくさ」

その頃、木葉達は賈クからの連絡を待っていたが、一向に連絡が来なかった。

「兄貴！ このまま待っててもしかたねえよ！ 早いとこ、韓遂の野郎をぶっ倒しに行こうぜ！！」

賈クから連絡が来ない事に、張飛は痺れを切らしてきていた。実際には張飛だけではなく、俺も関羽や諸葛亮も同じだった。

「確かに張飛の言う事はもつともだ。賈クからの連絡がない今、俺達は韓遂の討伐に行くしかないだろう」

俺は諸葛亮に視線を送った。

「はい。賈クからの連絡がない今、討伐に向かわなければならぬでしょう。しかし、勝つ事は不可能に近い」

あの諸葛亮が勝ち目がないと言つのなら、本当にそうなんだろう。なら、どうすればいい！？ 今のままじゃ、前にも後ろにも進めないじゃないか！？」

俺が頭を抱えていると、諸葛亮が重たい口を開いた。

「一つ……一つだけ、策はありますが……」

諸葛亮はそこで言葉を詰まらせた。

「策があるのか！？ 教えてくれ！？」

策があると聞き喜ぶ俺とは対照的に、諸葛亮の表情は暗かった。

「この策はできれば使いたくありませんが、それを決めるのは、木葉様ご自身にお任せ致します。現在の時点で私達は韓遂に勝つ事は出来ない。だから、負けるのです。それも撤退的に。そうすれば、朝廷からの命には背いた事にはならず、私達に討伐が無理だと知り、他の將軍達に命が飛ぶでしょう。しかし……………」

諸葛亮の言いたい言葉はわかる。この負け戦はただ負ければ言いと云う訳ではない。諸葛亮が言った様に、撤退的に負けなければ朝廷も認めてくれないだろう。

要するに、誰かに死んでくれと云う様なことなのだ。

「だ、だめだ！！絶対にだめだ！！」

「しかし、それでは……………」

わかってる。わかってるけど、仲間を犠牲にして俺が生き残るなんて……………」

「私が行きます！！」

関羽が俺に歩み寄って力強く言った。

「姉者！？」

「だめだ！俺は、そんなことを認めないぞ！！」

「兄者が認めないのならば、私が勝手にいきます！！」

それ以上の話を聞かないと云う様に、関羽は何処かに行ってしまった。

「兄貴！ あのままだと、姉者は本当に死ぬ気だ！！ 何とかならないのか！？」

関羽の様子では話しをするのも難しいだろう。かくなる上は、関羽には悪いが力づくで止めるしか……

とにかく、絶対に死なせたりしない！！ 何と言われても、関羽を止めてみせる！！

俺はその日から、関羽が外に出られない様に見張りをたてた。もし、関羽が外に出ようとすれば、すぐ俺に連絡が入るようになってくる。

「兄者は何を考えているんだ！！ 今は、私一人の命で多くの者達があつて助かると思うのに！！」

関羽は部屋の窓から、外で見張りをしている兵士達の様子を探っていた。

すると、突然部屋のドアがノックされた。

「姉者。俺だ。入っていいか？」

「ああ」

ゆっくりとドアを開けて張飛が中に入って来た。

「姉者。先ほど言つた事は本当なのか？」

「二言はない」

その言葉を聞いた張飛は関羽の胸倉を掴んだ。

「姉者は……姉者は、本当に良いのか!？」

「構わない」

「姉者は嘘つきだ!! 俺や兄貴と約束したじゃないか……」

わかつている。兄者や益徳とした約束。三人一緒だと……だが、私がやらなければ誰かが死ぬ事になる。そんな所はもう見たくないんだ。仲間を……大切な人達を……失いたくない。

「益徳、私は……」

「姉者? ……はは、やっぱり姉者は嘘つきだ……」

関羽の瞳から、ツーツと涙がこぼれ、頬を伝った。関羽自身も頬を指で触れるまで気付いていなかった様だ。

きっとその涙にはたくさんの思いが詰まっているはずだ。

すると関羽は突然、張飛のことを突き放し、そのまま部屋の外に出してドアを閉めた。

「益徳。兄者に伝えてくれ。すいませんと……」

「姉者!?! 姉者!?!」

その夜、関羽は見張りの目を盗み、自分について来てくれる兵士達と静かに城を出た。

「良いんですか?」

「こうでもしなければ、皆は私のことを止めるだろう。それよりも、よくついてきてくれたな」

「元々、俺達の命は木葉様に救ってもらったものだ。だから、木葉様を守るために死ぬるって言うのは、嬉しいんだよ」

関羽の後ろには、張曼成を始め、黄巾党が解散した後、木葉の下に身を寄せた者達、約三千がついて来ていた。

皆それぞれの決意を胸に、心残りはなかった。

「悲しみの作戦（武）」

次の日の朝、関羽達がいなくなった事で、城内は大騒ぎになっていた。俺と諸葛亮、張飛と言った武将達は玉の間に集まっていた。

「関羽の奴は何を考えているんだ!!」

俺は押さえられない感情をぶつける様に、自分の座っている椅子を叩いた。

「関將軍でしたら、このような行動をする事は予測できましたからね」

諸葛亮はまるで全て解りきっていた様に、落ち着いて話しをしていた。

「すぐに関羽の後を追う！ 全軍に出陣の準備をさせてくれ!!」

「でも……」

張飛は、俺、諸葛亮と目を向けた。

諸葛亮は張飛に向かい、こくりと小さく頷いた。

「わかった！ すぐに準備してくるから待っていてくれ!!」

張飛が出て行くと、それに続いて將軍達が出陣の準備に向かった。

数刻後、出陣の準備が整った。
兵士約五千。今、所有している兵力のほぼ全てだ。

「出発だ！！関羽達に追いつくため、速度を早めて行く！！」

一斉に土煙を上げて出発した。

（やはり無理でしたな。張曼成殿、関將軍の事、頼みましたよ）

諸葛亮は真つ直ぐ前を見ながら、悲しそうに空に目を向けた。

その頃、関羽達はすでに韓遂軍の近くまで来ていた。

「関羽將軍。ここまで来て何なんですが、本当に良いのですか？」

張曼成は出発した時と同じ言葉を関羽に投げ掛けた。

「どうしたのだ？ もし、少しでも心残りがあるのならお主は残れ」
「いや、俺達に心残りはないが、関羽將軍。貴方には心残りがある
様に感じます」

関羽はその言葉を聞き、クスリと笑った。

「お主達に見抜かれる様では、私も指揮官失格だな。確かに、心残りが無いと言えは嘘になる。だが、今は兄者……いや、木葉様の命を救うためならば、この命、惜しくはない」

張曼成もまた、関羽の言葉を聞き笑って言った。

「それでは関羽將軍。本日は最後の晩餐と行きましょう。兵士達にも楽しませてやりたいのです」

「よし、皆にありつたけの酒と食事を用意してくれ！」

その後、兵士達にはできる限りの酒と食事が振る舞われた。

皆、それぞれが笑い合い、まるでこれから死に行く者なのかと疑いたくなる様な光景だった。

そんな中、関羽は一人食事に手を付けず、大きな酒の入った入れ物を持ちながら兵士一人一人と酒を飲み交わしていった。

（皆、良い顔をしている。私も最後にこの者達と酒が交わせて良かった）

それから関羽は、兵士達から少し離れた場所で空を見上げていた。雲一つない夜空には満天の星が輝き、月の輝きをより一層際立たせていた。

「関羽將軍。こんな所にいらっしゃったのですか」

関羽が振り替えると、張曼成が酒の入った入れ物と器を持って立っていた。

「綺麗な夜空ですな」

そう言って、張曼成は持っていた器に酒を注ぎ、関羽に差し出した。

「すまぬ」

関羽はその器を受け取ると、注がれている酒を一気に飲み干した。

「ふう〜。うまい」

張曼成は空になった関羽の器に酒を注ぎながら言った。

「先ほどは賛同してしまいましたが、やはり関羽將軍は生きべきです」

張曼成の言葉に、関羽はふっと笑った。

「昔、漢の始皇帝（劉方）が楚の項羽に攻め立てられた際、兵力で圧倒的に負けていた劉方は城を捨て、逃げるしかなかった。その時、劉方の軍師であった張良は、劉方とよく似ていた將軍を身代わりにして時間を稼ぐことにした。結果、身代わりになった將軍は、時間を稼いだのち、自ら煮えたぎる油の中に身を投じ、劉方への忠誠を貫き通した。そして、その將軍のおかげで劉方は命からがら逃げ延び、後に項羽を倒すのだ。私のこの命も全て、兄者のために使う。そして、いつかきつと天下太平の世を作ってくれと信じている」

関羽が言い終わると、空に輝いていた星の一つが流れ星となって空をかけていった。

「関羽將軍のお気持ち、良く解りました」

張曼成はそう言うと、背中に隠していた刀を抜き、関羽に切り掛かった。

「な、何をする!？」

関羽は間一髪で刀を避けた。

「さすがは関羽將軍。この不意打ちが躲されては私に勝ち目はない」

関羽は近くにある武器になる物を探した。しかし、関羽の視界はまるで異次元にいるかの様に、ぐにゃぐにゃと歪んでいった。

「これは？」

「念のために、先ほど飲んで頂いた酒に薬を混ぜさせて頂きました。ただの眠り薬なので安心下さい」

そこで関羽の意識は途切れ、倒れた。張曼成は、関羽の身体を受け止めると、そっと岩影に寝かせた。

「お前ら、十分楽しんだか？」

張曼成がそう言うと、皆声を上げた。

「そろそろ行くんですか？」

「そうだな。関羽將軍が起きない内に行こう」

そうして、岩影に寝かせた関羽を残し、全員が出発した。

「悲しみの作戦（参）」

一方、城を出発した木葉達が関羽に追いついたのは次の日の正午過ぎだった。

関羽達が食事をとったと思われる場所につき、急いで先に行こうした時、一人の兵士が岩影で眠っている関羽を発見した。

俺が声をかけると、その声に反応してゆっくりと目を開けた。しかし、関羽の意識ははつきりしていない様でぼくとしていた。

「おい、関羽。大丈夫か！？ 何があつた！？」

「あ、兄者？ 張曼成が……」

俺は関羽から大まかな説明を受けた。

「……何だつて！？ でも、あいつは……」

すると突然、諸葛亮が馬から降りて俺の前で地面に両膝をついて頭を下げた。

「申し訳ありません！ 今回の張曼成のことにしたつきましては、僕の独断で指示したことになります！！」

いきなりのことに、理解するのに数秒かかった。

つまり、今回の張曼成の行動は全て諸葛亮が指示した事で、裏切りとかじゃないって事だよな。

「でも、何故そんなことを？」

「今回、関將軍の決意は堅く、いくら言っても無駄だと判断しました。しかし、今関將軍に死なれては我が軍は片腕を失ったも同然。」

ですが、身代わりの人物を選ぶ事も出来なかった僕に張曼成殿はこう言われたのです。木葉様には自分よりも関將軍の方が必要だと。そのために自分が関將軍の身代わりになると」

「……何で……何でそうなるんだ！ 城何か捨てて皆で……」

「兄貴！ それ以上は、言ったらだめだ。それ以上言ったら……」

俺の言葉を張飛が途中で制した。そう、この先を言ってしまうえば、張曼成の気持ちが無駄になってしまうからだ。

よく見ると、張飛の身体は何かに耐える様に小さく震えていた。

俺だけではない。皆、同じ気持ちなのだ。

「ごめん。それから、ありがとう。そうだよな、張曼成と兵士達の気持ちに答えるためにも、俺達は皆が幸せに暮らせる時代を作っていかなくちゃな」

すると、前方から先遣隊として先行させていた兵士から連絡が届いた。

「申し上げます！ 敵將韓遂と張曼成將軍達との戦いはすでに終わっており、戦場の状況から生き残った兵は恐らくいないかと……しかし、韓遂軍の陣の中に張曼成將軍と思われる人影を発見しました」

「本当か！？ なら……」

「いけません！！」

諸葛亮が強く声を発した。

「先ほど木葉様が言った様に、張曼成將軍の気持ちを捨てることになりません！！」

俺は、ぐっと拳を握り締めた。

その頃、韓遂の陣では張曼成の処刑が行われようとしていた。

「これから死ぬって気分はどうだ？」

張曼成の首に刀を突き立てながら、韓遂が勝ち誇った顔で言った。

「それにしても、お前は不運な奴だな。仲間を助けに来ない主人に
仕えちまってよ」

「貴様には解るまい。あの方の魅力が」

「ほう。その魅力に魅かれたばかりに死ぬ事になるとはなあ」

韓遂が手を動かし、周りにいる兵士達に合図を送った。

すると、兵士達は両手両足を縛られ動けない張曼成の身体を持ち上げ、木の柱に縛り付けた。

「ほら、後少しだぞ？ 何か言い残すことはないか？ 恐ろしくて
声が出せないなら、出させてやるぞ。こうやってな！！」

そう言った瞬間、韓遂は柱に縛り付けられている張曼成の右腕を
切り落とした。

「ぐっ！？」

張曼成は声を上げない様に必死に堪えた。しかし、その抵抗が韓
遂には面白くなかった様で、もう片方の腕も切り落とした。

「どうだ？ 早く声を上げ、許しを乞えば命だけは助けてやるぞ？」
張曼成の額には汗がにじんでいた。出血と痛みで意識を失い掛かっていた張曼成は、韓遂の言葉で気がついた。

「だ、誰が貴様の様な族に命ごいななどするか！！」

張曼成は韓遂に向かって唾を吐き捨てた。

「貴様！！ この無礼者が！！」

張曼成の行動に激怒した韓遂は、張曼成の首を刀で切り捨てた。

「はあ、はあ……この屑の首を奴等に送り届ける！！」

その後、韓遂から張曼成の首が送れてきた。
俺は木箱に入った張曼成の首を確認し、すぐに蓋を閉めた。

「誰か、張曼成のことを丁寧埋葬してやってくれ」

涙は流れなかった。それよりも怒りの方がずっと勝っていた。

「韓遂ッ！！」

関羽がぐっと拳を握り、韓遂の名前を口にした。俺は関羽の側に

近付きそつと言った。

「関羽、今はゆっくり休んだ方が良い」

関羽は何も言わずに立ち去っていった。

「兄貴……」

「大丈夫だよ。関羽ならきつと」

俺と張飛が関羽の去って行った通路に目を向けていると、後ろから諸喝亮の声が響いた。

「木葉様。今の内にこちらでも動かなければ、張曼成殿の死は本当に無駄になってしまいます」

諸葛亮の言葉を聞き、俺は今の気持ちを胸の中に一旦引っ込めた。

「わかった。でも、どうすればいいんだ？」

「援軍を求めてみましょう」

「援軍を求めるのは良いけど、来てくれるのか？」

今は俺達だけじゃなく、他の將軍達も黄巾の乱の傷跡が残っているはずだ。

「大丈夫です。他の人達は、我等が負ければ次は自分に討伐の命が来るのではと不安をかんじているはずです。ですから、私達が力を合わせれば韓遂など簡単に倒せると書状を送るのです。彼等は自分を守るために協力せざるをえないでしょう」

なるほど、確かに諸葛亮の言う事は一理ある。

「わかった。各將軍達に援軍の要請を送ってくれ！」
「木葉様!!」

一人の兵士が息を切らして、勢いよく俺の前に膝を付いた。

「大変です!! 韓遂の軍勢が涼州に引き上げて行きます!!」

その報告を聞いた一同は耳を疑った。

「それは本当ですか？」

「はい、間違いありません！」

何故、何故今軍勢を退く？ 我々の戦力を削りたいのであれば、今の優勢な状況で……

諸葛亮は指で顎を撫でながら、幾重にも敵の策を考えていた。すると、今度は違う兵士が飛び込んで来た。

「失礼致します！ 只今、小帝が位を朝廷に返上し、新たに陳留王様が即位致しました!!」

「何だつて!!？」

（やられた!? 韓遂は僕達の戦力を削る事が最終目的じゃなかったのか!? 今から董卓將軍の下に行き……いや、無理だ）

「申し訳ありません、木葉様」

突然、諸葛亮が俺に向かって頭を下げて来た。

「どうしたんだ？」

「今回の帝の退位、そして、陳留王様の即位。これは少し考えればわかることでした」

「諸葛亮、それはどういうことだ？」

「董卓將軍です。以前、董卓將軍が朝廷内に入り込むことを目的としている事はお話したと思います。今回の陳龍王の即位で、董卓將軍は事実上、朝廷どころか国を動かすほどの権力を手にしたことになります」

「ちょっと待ってくれ。陳留王の即位が、何故董卓の権力に繋がるのさ？」

俺の質問に諸葛亮は休む事なく答えた。

「陳龍王はまだ8つになったばかりです。その様な幼い帝が国の内政を行えるでしょうか？」

確かに、そんな小さい子が国の政治やらを決められるとは……

「!？」

「そうです。幼い帝に国の内政などは出来ない。なら、帝に変わりを動かす人物が側にいるはずですよ」

「それが董卓だって言うのか？」

諸葛亮はこくりと頷いた。

「こうなってしまうては、我々が董卓將軍に手を出せば、逆賊となつてしまいます」

「くそ！」

俺は拳を床に叩き付けた。

「木葉様。機を待ちましょう。今はその時のため力を貯えるのです」

悔しい

しかし、今は諸葛亮の言う事が最善な選択だろう。

俺は諸葛亮の方を向き頷いた。

実際に、諸葛亮の予想は当たっていた。即位した陳留王の側には、常に董卓の姿があったのだ。俺達は皆、やりきれない思いを胸に秘めたまま、いつか来るであろう戦いに備えて、軍備や内政に力を注いだ。

そして、それから数年の歳月が過ぎていった。

「反董卓連合軍 へ 集結 せよ」

現在都では、董卓の悪政のため多くの民衆が苦しんでいた。税は吊り上げられ、払えない者は着る服以外全て取り立てられた。

そのため都では、道端で餓死している民や、高い税から逃れるため住み慣れた土地をすて移住する民が後をたたなかつた。しかし、民に移住されては税が取れなくなってしまったため、都の周りには兵士が配置され、民に逃げられない様にしていった。この事態を見ていた各地の將軍達は董卓の悪政に不満を抱き始めていた。

そんな中、董卓の悪政に不満を抱いていた將軍の一人、袁紹が各地の將軍達に激励の文を送った。その激励の文は、木葉の下にも届いていた。

「皆、俺達は今まで董卓の悪政を見ているしか出来なかつたが、今やっと立ち上がる時が来た」

そう言つて、俺は袁紹から送れてきた文を高く掲げた。

「久々に暴れられるぜ!!!」

待つてましたとばかりに喜ぶ張飛をはじめ、関羽や各將軍達からも長い間待たされた喜びの声が上がった。

「反対する人はいないね。よし、皆、すぐに出発の準備をしてくれ!!!」

その後、袁紹の下に向かった俺達は、目の前に広がる大軍勢に目を丸くしていた。

「なんだ、この数は!？」

「兄者が驚くのも無理ありません。私もこんな大軍勢を見たのは初めてです」

俺も関羽もあまりの軍勢の多さに暫く見とれてしまっていた。

……おっと、こう驚いてばかりもいられないだった。

俺は振り向くと、後ろにいた諸葛亮に声を掛けた。

「諸葛亮。俺はこれから袁紹に会いに行くけど一緒に来てくれないか？」

「わかりました」

「じゃあ、すぐに戻って来るから、ちょっと待っていてくれ」

そう言って俺は、諸葛亮と共にこの大軍勢を集めた袁紹に会いに行った。

そして、袁紹の下にやって来た俺の目に見知った人物の顔がちらちらと飛び込んで来た。

「あつ！？ 公孫さんじゃないか！？」

「ん？ おお！？ これは木葉ではないか！？ 久しぶりだな」

相変わらず綺麗な人だな……

改めて見ても公孫さんの美しさに目を奪われていた俺の脳裏に、何故か全身を小さく震わせている関羽の姿が浮かんできた。

ははは………

「ところで、何故ここに各地の將軍達が集まっているんだ？」

「なんだ、聞いていないのか？ これから、各軍の中心人物が集まり、軍儀が行われるんだ」

なるほど。しかし、周りを見れば見るほど、凄い人達が集まっている。

乱世の奸雄、曹操。

江東の虎、孫堅。

白馬長史、公孫さん。

涼州の馬騰。

并州の丁原。

他にもまだいる。

さすがに、これだけの将が集まれば董卓にだって、負けはしないだろう。

「大体揃ったな。では、これより軍儀を始める！」

袁紹は周りを一度見渡した後、高々と宣言した。

「では、まず儂がこの軍勢の総指揮を取る袁本初だ」

袁紹字を本初えんしょう ほんしょ

大將軍の何進と協力して激しく宦官と対立し、董卓の乱の際には首都の洛陽より奔って河内にて兵を挙げた。後に河北四州を支配するまでに勢力を拡大したが、官渡の戦いにおいて自らの優柔不断さが原因で曹操に敗れた後、病死した。

全員の総指揮だって！？ いきなりそんなこと言われて納得出来るか！？

俺が不服そうな表情をしていると、袁紹はふつと鼻で笑った。

「そこの下郎、何か不服でもあるか？何処の馬の骨ともわからぬ奴がやるより、名家であるこの儂がやるに相應しい」

こいつ。すっげ〜嫌な奴だな。

「ふん！ その様なことはどうでもいい。だが、この曹操の軍を指揮するには、貴様では役不足だ」

「無礼な！ 名家の私の何が役不足なのだ！？」

ちよ、ちよつと。これは軍儀の場だろ！？

あの二人を止めないと、董卓と戦う前に解散にならかねないぞ！？

「貴様の全てだ。家柄など関係ない」

その瞬間、曹操の首に向かって大斧が振り下ろされた。

「殿への愚弄、許さん!!」

「猛徳!!」

曹操に向かって振り下ろされた大斧は、夏侯惇の大剣によって受け止められた。

「貴様、猛徳に刃を向けるとは、命がいらぬらしいな」

夏侯惇が大斧を押し返す。

「お前は……そうか!? 曹操の側近に夏侯惇と言う武芸達者な者がいると聞いたことがあるが、お前が夏侯惇か」

「知っているなら話は早い、貴様の命は頂く」

夏侯惇も、えくと……も、もう一人の奴も本気でやり合う気だ。だからって、俺が止めるのも無理だし。

俺がその状況にあたふたしている内に、二人の戦いは始まってしまった。

「反董卓連合軍 〱 集結 弐」

勢いよく大斧と大剣が交じりあう。

お互い一步も譲らない好勝負だが、このままではいずれどちらかが命を落とすことになる。

そして、再び大斧と大剣が交じった後、夏侯惇の方が一瞬早く次の攻撃に入った。相手もそのことに気付いたのか顔色が変わった。

「終わりだな」

そして、夏侯惇の大剣が大斧とぶつかる瞬間、勝利を確信するようになり夏侯惇は笑った。

しかし、大剣が大斧とぶつかる前に一本の槍によって受け止められた。

「ぐつ！ 貴様、何奴だ！？」

夏侯惇と顔良の間には、まだ、二十にもならぬであろう女が長い長髪をなびかせ、一本の槍だけで二人の戦いを止めていた。

「私は、涼州馬騰の長女、姓を馬、名を超、字を猛起と申します。出過ぎた真似とは思いましたが、戦前の仲間割れは悪戯に戦力を削り、士気を落とすだけです。どうか、お二方共、剣をお納め下さい」「马超？ そう言えば、涼州の馬騰に、腕の立つ娘がいると聞いていたが、貴様の事だな？」

自らの大剣を止められた夏侯惇は、挑発するように言った。

「そんなに名が通っているのか。その通りですが？」

夏侯惇の挑発に馬超も挑発的な態度をしめした。

二十に満たない若造に言われ、夏侯惇も怒りをあらわにした。

「貴様の腕など、所詮は田舎者の噂が膨張して、伝えられているのであろう?」

「何!? 何なら、今すぐにお見せしますが、命の保証はしませんよ?」

おい、おい。そこで挑発に乗ってどうするんだよ。やっと収まると思ったのに……。馬超って、以外に短気だったりするの?」

その光景を離れて見ていた木葉は、一緒に来ていた諸葛亮に話し掛けた。

「なあ、諸葛亮。あいつらを止める、良い方法はないか?」

諸葛亮はじつと三人の姿を見た後、深いため息を吐いた。

「あの三人を止めるには、武芸の達者な関羽將軍や張飛將軍がいなければ難しいです」

「私をお呼びになりましたか?」

その声に俺と諸葛亮はほぼ同時に振り返った。

「関羽!? 何でお前がここにいるんだ!?!」

「何でとは、決まっているではないですか。騒ぎが起こったと聞き、兄者が心配で駆け付けて来たのです」

「ナイスだ、関羽!」

でも、関羽は俺の事になると、結構、個人で動いちゃうところが

あるからな。それは、後で注意でもしておくか。

「ちょうど、良かった。早速で悪いけど、あの三人を止めてくれ。これから戦だつて言うのに、仲間割れはまずい」

「わかりました。では、兄者はこちらでお待ち下さい」

「待てい！ 貴殿達は何をしているのだ！？ 戦前に将がそんなことでは、兵の士気に関わるであろう！」

関羽の声に真つ先に反応したのは、夏侯惇であった。

「貴様は関羽！？ あの時の屈辱、忘れてはいないぞ」

そして、夏侯惇とは違い馬超は関羽の姿を見てキラキラと目を輝かせた。

「あ、あなたが、あの関羽將軍でいらっしやるのですか？」

「そ、そうだが……」

関羽がそう答えると、馬超はプルプルと身体を震わせた後、すごい勢いで関羽に抱きついた。

「本物だあゝ！ 本物の関羽將軍が私の目の前にいるゝ！！」

「ななな、何をするか！？ 私は、貴殿達の内紛を止め……」

「貴殿なんて呼ばないで下さい。私のことは、猛起と呼んで下さい」

「あ、その……」

馬超の勢いにすっかり押されてしまった関羽はどうしていいのかわからず、偃月刀を構えたまま固まってしまった。

その光景を見ていた夏侯惇と顔良は、すっかりやる気が失せてしまい武器を下ろした。

「チツ！ 運がよかったな。次に猛徳に刃を向けた時は、首が無いと思え」

舌打ちをして、夏侯惇は主の下に戻っていった。それに釣られる様に顔良も青ざめた顔をして戻っていった。

「関羽、悪かったな。お陰で助かったよ」

そう言って、木葉が関羽に労いの言葉を掛けると、馬超が木葉の顔を覗き込む様に見ていた。

「この方が、関羽將軍の主ですか？」

「そうだな。主であると同時に、義兄妹の契りを交わした兄でもある」

「そうなんですか……。何だか弱そうな方ですね。何故、関羽將軍はこの方と義兄妹の契りを交わしたのですか？」

「それは、兄者の心に惹かれたからだ」

「ふん」

どうも納得のいかない様子の馬超は、俺と関羽の顔を交互に見た。その馬超を見て俺は自分が名乗っていない事に気が付いた。

「そう言えば、まだ、名前を聞いていなかったね。俺は、木葉。清

水 木葉」

「木葉？ 珍しい名ですね。私は、涼州馬騰が娘。姓を馬、名を趙字を猛起と申します」

「よろしく、馬超」

そう言つて、木葉は笑顔で握手を求めた。

木葉の顔を見た馬超は、少し頬を赤く染めて俯きながら握手に応じた。

そして、握手を終えて少し距離を取り関羽の後ろに隠れる様に回り込むと、とんでもない事を口にした。

「関羽將軍。もしかして、木葉殿は床上手なのですか？」

「な、何を言っているのだ!？」

木葉よりも先に関羽が、馬超の言葉を否定した。

「だって、木葉殿の顔を見たら、胸が騒ぎ出して……。父上からは、殿方の顔を見て胸が騒ぎ出したら、その方は床上手だって……」

な、何を教えてるんだ。自分の娘だぞ!? くうく、だめだ……。俺には理解出来ない。

俺が頭を抱えていると、突然、一人の兵士が顔色を変えて大声で叫んだ。

「敵、董卓軍が攻撃を仕掛けてきました!」

「何!？」

その場にいた将達の表情に、緊張が走った。

「ふん、面白い。夏侯惇、すぐに出陣だ!」

その曹操の言葉に釣られる様に、他の将達も自らの陣に戻っていた。

「諸葛亮、関羽。俺達も、戻って戦いに備えよう」

「はい！」

「わかりました、兄者！」

「それじゃあ、私も父上の所に戻るよ」

馬超の表情は先ほどまでと違い、将の顔に変わっていた。

「ああ、また、会おうな」

軽い言葉だけ交わし、それぞれの陣に戻っていった。

「董卓軍 へ 集結へ」

それから、数刻前。

「董卓將軍よ。敵が攻めて来たと報告を聞きましたが、大丈夫なのですか？」

「帝のご心配に及びません。既に、我が軍の精鋭を集め、策を練っております」

董卓は膝をつき、幼い帝に言った。

「そうか。董卓將軍がそう言うのなら、全て任せます」

「はっ！ この董卓。身命に誓って帝を御守り致します。では、敵が迫っているため失礼させて頂きます」

そう言って、董卓は立ち上がって、部屋を出ていった。

「はっか。お前は、俺の手のひらで転がっていればいいんだよ。誰が命賭けて守るかってんだよ。」

「おい、呂布！ 呂布はいるか!？」

一向に名前の人物から返答がなかった。

「えい。張遼!！」

「はっ！ お呼びでございますか？」

董卓の前に鎧をつけた若い青年が膝まづいた。

「呂布を儂の下に連れて来い！ 今、すぐにだ！」

「かしこまりました」

「あゝ、全く、呂布の奴は……」

張遼はため息を吐きながら、ある場所に向かっていった。こつ言った事は今回が初めてではなく、その度に張遼が呂布を迎えに行っているのだ。

張遼が長い通路を進むと、やがて広い庭に出た。その隅には一人の女の子がいた。

「おい、呂布。また、ここに来ていたのか」

呂布と呼ばれた女の子は、くるりと振り返り小さく頷いた。

「董卓様がお呼びだぞ」

「行きたくない」

呂布は軽く首を横に振って拒否をした。その行動もいつも通りのため、張遼は少しも戸惑うことなく呂布に言った。

「はい、はい。お前が、嫌いなのはわかったから、さっさと行くぞ。」

でないよ、俺が董卓様に叱られるんだからな」
「いゝや！」

呂布は両足に力を込めて子供の様に抵抗をした。

「またかよ。たまには大人しくついて来いよな」

全く、腕は俺より達つてのに、何でこんな性格なんだよ!?
しょうがない、いつものでいくしかないか……

「呂布。大人しくついて来れば、その後、お前の好きな物を腹一杯
食わせてやるぞ」

張遼の言葉を聞いた呂布は、突然、両足の力を緩めた。そのせいで、張遼は勢いをつけて前方に転がっていった。

「でえ〜〜!?!?」

そして、呂布は転がっていった張遼を追いかけて顔を覗き込んだ。

「それは本当か、チヨウ!?!?」

「だから、いつも言ってるだろ!?!? その呼び方は止めろって!」

張遼が呂布を小ざこつと顔を上げると、すでに呂布は通路を歩いていた。

「何をしている!? 早く行くぞ、チヨウ!?!?」

「はあ、はい、はい、わかったよ」

張遼はため息を吐きながら、呂布の後を追った。

「董卓様。呂布を連れて参りました！」

「く苦労」

張遼は連れて来た呂布と共に董卓の前に膝まづいた。

董卓はその二人を椅子に腰掛けて見下ろした。

「早速だが、ぬし達二人にはこの儂を殺そうなどと考える蛆虫供の始末を任せる」

「おゝ、戦か！？ 久々に暴れられるぞ！！」

喜ぶ呂布と対照的に張遼は表情を歪めた。

あの連合軍の中には、曹操、孫堅と名高い武将達も多数いる。それを私と呂布で破ると言うのか？

確かに、呂布の腕は兵士千人には匹敵しようが、それだけではこちらの負けは必須。

張遼の頭の中で思考が駆け巡り、ある二人の人物が浮かんで来た。

「董卓様」

「なんだ？」

「恐れ多くも、今回の敵の中には、曹操、孫堅と言った名将もごぞいます。そこで、より確実に勝利を董卓様のものにするため、二人程、我らの軍にお加え頂きたい人物がございます」

「ほう、誰だ？ 言ってみろ」

「はっ！ 一人は、豪傑、華雄將軍。そして、賈ク」

董卓は張遼の言葉を聞いて、その程度かと鼻で笑った。

「許す。その二人も連れて行け」

「ありがとうございます。それでは、早速、出陣の準備を致します」

張遼はすつと立ち上がり、その場を後にした。そして、張遼の後を追う様に、呂布も立ち上がった。

「おゝい、華雄！」

張遼は董卓の部屋を出たその足で訓練場に来ていた。そして、その中で兵士達に厳しく激を飛ばしている鎧をきた男に声を掛けた。

「ん？ おお、張遼じゃないか！？ それに呂布も！ 相変わらずちっちゃいな」

華雄が呂布の頭をこつい手でくしゃくしゃと撫でた。

「カーのなでなでは、痛いから嫌」

「は、は、は！ やっぱり、呂布はこつだよな！」

呂布をからかい終わった華雄は、張遼に鋭い視線を向けた。

「珍しいな、お前が俺の所に来るのは……例の連合軍との戦か？」

張遼は華雄の視線を正面から受け止めて頷いた。

「ああ。今、董卓様から討伐の任を受けた。あの連合軍には、曹操、孫堅などの名将が多数いる。総大将が袁紹と言うのがせめてもの救い。しかし、個々の部隊の力が強いため、万が一協力し合う事が起これば、我々の敗戦は濃くなる。その前に一つでも多くの部隊を個々で叩いて行かねばなるまい。そこで、華雄將軍の力をお借りしたい」

華雄は張遼の言葉に賛同する様に頷いた。

「わかった。直ぐに準備を整えよう」

華雄の準備を待つ間に、張遼は賈クの下を訪れた。賈クは現在、父親の看護で一日を過ごしていた。

「賈ク！」

張遼が声を掛けると、賈栩は嬉しそうに近付いてきた。

「おお、張遼じゃないか!? また、酒でも飲みに来たのか？」

「ははは、酒は今度来た時にたらふく頂くよ」

張遼は賈クの言葉に笑って返した後、直ぐに本題に入った。

「今日は、ちと、お願いがあつて来たんだ」

「急に改まって、どうしたのだ？」

「今、董卓様の命を奪うため、連合軍がこの都に近付いて来ている」

そこまでの説明で賈クの色は変わり、すでに張遼が何を言いに来たの理解した様だった。

「賈クにとっては辛いかも知れない。だが、それを承知でのお願いだ。頼む、我らと共に戦ってくれ!!」

賈クは張遼の姿を見てため息を吐いた後、自分の中で何かを決意した様だった。

「はあ、張遼。どうやら俺は、お前達と長く付き合い過ぎてたらしい。お前達が死地に行くのを黙っていられそうもない」

「それでは!？」

「ああ、お前達と一緒に行ってやるよ」

その言葉に張遼は、子供の様に喜んでいた。

張遼がそうなるのも無理ない。張遼の中では、賈クが来てくれるかどうかで勝敗が大きく傾くだろうと思っていたからだ。

こうして、メンバーを集めた張遼は、戦の準備を整え戦場に向かった。

「戦く董卓軍 鬼神 呂布 奇く」

「さて、早速だが、我らはどのように動いたら良いと思う、賈ク？」

張遼は城を出て連合軍の下に向かう途中、馬上で賈クに話し掛けた。

「連合軍には、曹操、孫堅などの名将の他、多数の軍が集まっています。中でも、木葉と言う将の下には、曹操、孫堅の将に負けず劣らずの者達が多数おります」

「ほう、曹操、孫堅、さらに賈クの言う、木葉と言う将がいる中、我らに勝ち目はあるのか？」

賈クは一度、目を閉じて思考を巡らせた。そして、ゆっくりと目を開けた。

「張遼、勝ち目があるかではない。勝ちを作るのだ」

賈クの言葉の意味に気付いた張遼は直ぐに聞いた。

「賈クには、その勝ち目を作る策があるのだな！？」

賈クは冷静に話し始めた。

「先ずは敵を巳水関におびき寄せます。我々は巳水関の守りを固め、敵の様子を伺いながら攻める機会を待ちます」

「ちよつと、待った。それは亀みたいに守りを固め、敵の弱ったところを叩こうって事だよな？」

「そうだ。張遼、覚えているか？ 巳水関は周りを山に囲まれた要

塞だ。正面の道も狭く、攻撃してくる兵の数も限られてくる。多少の兵力の差なら、呂布と張遼、華雄の武で我らが勝てるでしょう。そうして、敵の戦力を少しずつ削いで長期戦になれば、いずれは敵の兵糧が底をつき、やむなく引いて行くでしょう」

「なるほど。して、どのように奴等を巳水関まで誘い込む？ 下手をすれば、我らの策が露呈し、敵は兵糧を確保しようとするぞ」

賈クはすつと呂布を指差した。

「それは、呂布にやってもらいます。兵三万を連れて、連合軍の先鋒に強襲を仕掛け暴れて下さい。そして、私と華雄、張遼で残りの兵を連れ、先鋒とその後ろから来る後軍の間に飛び込み合流を阻止する。呂布の武力から先鋒の軍は大きな被害を受ける。そして、我等の戦況が優勢になった時、一気に巳水関まで撤退します」

「ちよつと待て！？ 何故、優勢な我等が撤退するのだ？」

「今回の戦の目的は勝利にあらず。巳水関に敵を誘い込む事だからだ。優勢な我等が急に撤退するとなれば、何か大きな問題が起こったと敵の将は思はずです。そして、今まで劣勢だった戦況をひっくり返すため、体制を立て直し追撃をしてきますでしょう」

賈クの策を聞き、張遼は改めて思った。

この戦は賈クを欠いての勝利は無いと。

「但し、この策に時間を掛けてはいけません。時間が掛かれば掛かる程、兵力で劣る我等が不利になります」

「わかった。呂布、華雄もそれでいいな！」

呂布も華雄も頷いた。その目は既に臨戦態勢に入っていた。

「それじゃあ、呂布！ 先陣を頼んだぞ！」

「任せて」

落ち着いた口調と、凍る様な冷たい視線を向けた後、愛用の方天画戟を持ち、呂布は馬を走らせた。

「申上げます！！ 先鋒の馬騰様、公孫？様、孫堅様の軍が苦戦をしており、戦況は劣勢にございます！」

兵士の報告を受けた俺達のいる中軍は、急ぎ先鋒を救援すべく動き始めた。

「孫堅までも！？ 思っていた以上に、敵は強いみたいだな。関羽、張飛、諸葛亮！ 急いで、救援に行くぞ！」

「はい！！！」

俺達が動き出そうとした瞬間、その動きを阻止するように敵の伏兵が立ちはだかった。

「ちっ！ 兄貴、敵の伏兵だ！！！」

「くっ！ これじゃあ、救援に行く事が出来ない。関羽、張飛！ 何とかこの囲みを突破出来ないか！？」

「兄貴、敵の数が多い！！！」

張飛も関羽も、次から次へと襲い来る敵兵を切り捨てていた。

「くそ！ 兄貴、ここは俺に任せて姉者と先に行ってくれ！！！」

「何を行っている！　いくらお前でもこの数の敵兵を相手にするのは無謀だ！　私も残って戦う！！」

「姉者まで残ったら、誰が兄貴を守るんだ！！」

「しかし……」

関羽は張飛の言葉に対して納得がいかなかった。いくら腕が立つ張飛でも、人間である以上、限界はある。だからこそ、張飛を残して行く事は出来なかった。

「諸葛亮はどう思う？」

俺が諸葛亮に聞いたその瞬間だった。兵達の間から見知った姿が俺の前に現われた。

「賈ク？」

「木葉様」

お互い相手の姿を確認して、動きを止めた。

「……………、ッ！？」

賈クは何かを言おうとして止めると、振り向いて戦いの中に戻っていった。

「賈ク……」

俺の胸の内には、何故、賈クが自分達を裏切ったのか、その真意を知りたかった。

そして俺と同様、諸葛亮の表情も曇っていた。

だが、賈クがこの戦に関わっているとわかった時、諸葛亮の頭脳は

高速で回っていた。

「木葉様！ 急ぎ、先鋒の救援にいかなければ我が軍……いや、我々、全軍の敗戦に繋がります」

「敗戦？ 何を言ってるんだ。兵力はこちらの方が上なんだぞ？」

「確かに兵力は我らが上です。しかし、それ故、我らは兵糧を大量に消費します。そして、ここから少し行った場所には巳水関と言う要塞があります。もし、そこに入られたら………」

「……そうか！？ 巳水関に入られて守りを固められれば長期戦になる。そうなれば、俺達の軍は兵糧の確保が難しくなり、一旦引き上げるしかなくなる」

「そう、事実上の敗戦です」

敵になると、賈クのを恐ろしい程感じる。しかし、このままじやいけない。

どうする？

木葉が次の策を考えていると、混戦状態の中、関羽と張飛が敵兵をなぎ倒し、木葉の前に姿を表した。

「兄貴、無事か!?!」

「兄者、諸葛亮殿もご無事でしたか」

「関羽！ 張飛！」

お互いに相手の無事を確認して、安堵の表情を浮かべた。

皆、無事で良かった。

でも、どうする？

早く先鋒の救援に向かわないと……

「木葉様、今は悩んでいる時ではありません。関羽將軍、張飛將軍と共に救援に行つて下さい」

「諸葛亮は？」

「ここに残り、敵兵を食い止めます」

選択の余地はない。ここで救援に行かなければ俺達の敗戦は濃厚だからだ。

「せめて、関羽が張飛のどっちかと一緒に」

「それはなりません。兵からの情報によれば、先鋒を束ねている將軍の強さは鬼神のごとき強さとの事。他の將軍達に齒が立たない今、我が軍で最も武芸の秀でた、関羽將軍、張飛將軍に相手をして頂かなくてはなりません」

確かに、諸葛亮の言う事は正しい……正しいけど……

諸葛亮はその表情から俺の胸の内を察して言った。

「大丈夫です。ここにいる兵士達は、皆、関羽將軍、張飛將軍に鍛えられた精鋭です。そう簡単にはやられませんよ」

俺はこれ以上何を言っても諸葛亮が自らの言葉を変えないだろうと思った。そして、今自分に出来る事は早く救援に行き、戦を終わらせる事で諸葛亮や他の將兵を救う事。

「わかった。俺達が戻るまで頼んだぞ」

「はい。木葉様もお気を付けて」

「関羽！ 張飛！ 敵中を突っ切るぞ！！」

関羽と張飛はそれぞれの武器を握り直し、正面の敵兵が入り乱れている方に視線を向けた。

「行くぞ、張飛！！」

「よっしゃ！ 兄貴、しつかり着いて来いよ！！」

掛け声と共に馬の腹を蹴って一直線に走り出した。先を行く関羽と張飛は遮る敵兵を蹴散らし、道を作り出して行った。

「命が惜しい者は引け！！ この関羽。向かって来る敵に容赦はせぬ！！」

「どけ、どけ！！ お前らが幾ら束になろうが無駄だ！！ この蛇矛の餌食にしてやる！！」

関羽と張飛の強さに恐れを成した敵兵は、自ら道を開け始めた。さすが、関羽と張飛だ。敵兵が散り始めた。これなら、突破出来る！

「関羽！ 張飛！ このまま一気に行くぞ！！」

「承知！！」

「おおおおおりゃあ！！」

その頃、先鋒の戦場では全身が真っ赤な炎を象徴する様な馬、赤兔に跨がり、敵兵を鬼神のごとく切り続ける少女の姿があった。言葉はほとんど発せず冷たい視線で敵兵を捕え、一振りの下、真つ二つに切り裂いていた。

「弱い……。こんなんじゃ、全員死んじやうよ？」

小さな身体に返り血を浴び、それでも切り続ける呂布の姿はまさ

に鬼神と言つにふさわしかった。

その中で呂布の目に止まったのは、馬上から指示を出す立派な鎧を身に纏った武将であった。

「強そうな奴、見つけた」

呂布は赤兔の腹を足で蹴り、風のようにその武将に向かっていった。

「りゃああああ!!」

「!?!」

武将は呂布の攻撃を間一髪のところまで受け止めた。

「お前が大将か？」

「私を孫堅と知らずに向かって来たのか？」

「へえ、お前があの子孫堅か、面白い！」

呂布は自分の背丈程ある方天画戟を片手で軽々と振るった。

「ぐっ!?!」

風の悲鳴に似た音と共に放たれる呂布の一撃を何とか受け止めた孫堅だったが、先程の不意の一撃と違い身体の芯に響く様な一撃だった。

そして、間を置かずに呂布の二撃目が孫堅を襲った。

孫堅には一撃目の時の痺れが残っており反応が一瞬遅れた。

「その首、貰った!!」

「ちよっと、待ちなよ」

呂布の方天画戟は孫堅の首を切る前に止められていた。

「大将を斬られちゃ、兵の士気に関わるからね」

「お前は？」

呂布が自らの攻撃を止めた相手に視線を向けた。そこにいたのは、色鮮やかな鎧を纏い、戦場の中に咲く華を思わせる女だった。

「私は涼州の馬超！ いざ、勝負！！」

お互い、一度距離を置き、相手を確認する。そして、武器を構えると同時に馬を走らせた。

「はあああああ！！」

交差した瞬間に交わるお互いの刃から火花が飛んだ。

そして、お互い巧みな馬上で方向を反転させ、中央で馬の足を止めての撃ち合いになった。

「はあああああ！！」

呂布が重い一撃を繰り出した後、馬超は素早く3度突く。

呂布の一撃の破壊力に対し、馬超は手数で応戦していた。

しかし、呂布の一撃の重さは馬超の予想を大きく超えるものだった。

「馬超、強い。でも、私の方がもっと強い」

遂に度重なる呂布の攻撃を受け止めていた馬超の両腕は痺れ、槍と共に馬上から落とされ方天画戟を突き立てられた。

「さよなら、馬超」

「」

馬超は咄嗟に腰に差していた剣を抜き、方天画戟の一撃を逸した。

「はあ、はあ………」

しかし、一撃を避けたまではよかったが馬超に勝つ見込みは無いに等しかった。

最後の意地で刀を構える馬超に対し、呂布の無情な一撃が襲った。

「さよなら」

甲高い金属音が馬超の耳元で鳴り響いた。馬超の目の前には、呂布の方天画戟とそれを受け止める、青龍をかたどった偃月刀があった。

馬超が徐々に視線を上げて行くと、そこには、黒髪を風になびかせ馬に跨がる武將の姿があった。

「間一髪だったな。馬超」

突然の出来事に、動けないでいた馬超はその武將の名前を口にした。

「か、関羽將軍？」

「苦戦している様だな。あとは私が引き継ごう」

関羽が呂布に鋭い視線を送った。

「関羽……………勝負!!」

呂布も関羽の視線に応じる様に、方天画戟を関羽に向けて構え直した。

「か、関羽將軍。呂布の一撃に注意下さい」

馬超の言葉が引き金となり、呂布と関羽の一騎打ちが始まった。

「戦く董卓軍 鬼神 呂布 忒く」

「張飛、いたか!？」

「駄目だ、兄貴! 見つからない!！」

「くっ!」

敵中を突破したまでは良かったが、先鋒軍と合流する時に関羽の姿がなかった。必死で探しているが、この戦場で一人見つけるのは困難である事は明白だ。

「関羽の奴、どこに行ったんだ」

そんな中、張飛が何かを発見したらしく俺に声を掛けた。

「兄貴!！」

「関羽が見つかったのか!？」

「姉者はまだ見つからないけど、向こうで敵の大将が一騎打ちをしてるらしい!」

敵の大将? 諸葛亮が言っていた奴に違いない。そいつを倒せばこの戦いも終わるはず。

「張飛! 敵将を倒しに行くぞ!！」

「兄貴。だが、姉者がまだ見つかっていない」

「この大人数の中から関羽を探すより、敵将を倒して戦いを終わらせる方が関羽を探しやすい!！」

「確かに、この中から姉者を探すより早いかな。よっしゃ! ずっと決まれば、直ぐに行くぜ兄貴!！」

「はあああああ！！」

交じり合う二つの刃。

関羽が呂布の攻撃を受けたのは初めの一撃だけで、その後は受け流す様にしていた。

激しい撃ち合いに、周りの兵も固唾を飲んで二人の戦いを見ていた。

「関羽……………強い！！」

呂布は口元を少し上げ、戦いを楽しんでいる様だった。
呂布の攻撃は、更にスピードを上げ関羽の首を狙った。

「くっ！？」

途切れる事なく響く金属音。

何時決着が付くかわからない勝負。

だが、それは逆に一瞬でも気を抜けば即座に命を失うと言う事。そんな状況の中、関羽の瞳に頼もしい人物が映った。

「兄貴！ あそこだ！」

張飛が、目の前で一騎打ちをしている武將を指差した。

「あいつか……、ん？」

視線を向けた木葉の目に良く見知った人物が映った。

「張飛。敵將と一騎打ちをしている奴って、もしかしたら……」

木葉の表情を見て、張飛も再度、二人の武將に視線を向けた。

「あ！？ あの一騎打ちをしてるのって、姉者だ！？」

やっぱり、見間違いじゃないよな。

幾度となくぶつかりあう二つ刃は、休む事なく相手の首を狙っていた。

「姉者　　！！」

「張飛！？」

関羽の姿を見ても立ってもいられなくなった張飛が、二人の下に向かって馬を走らせた。

「姉者　　！！」

自らの名前を呼ぶ声に、関羽は耳を傾けた。

「張飛!？」

「姉者! 助太刀するぞ!!」

張飛は勢いを全く緩めず、呂布に向かって加速した一撃を振るった。

「誰?」

呂布は張飛の一撃を受け止めると視線を送った。

「俺の名は、張飛!! 姉者が変わって相手になるぜ!!」

「待て、益徳! そいつの強さは」

関羽の言葉を聞かないまま、張飛は呂布に向かって行った。

響く金属音。呂布と同様に、張飛も力で押す剛の戦いをするタイプだ。両者共に力の限りを一撃に込め、交わる刃先からは突風でも生み出されている様な風が渦巻いた。

「こんなに一杯撃ち合ったのは、初めて……」

「そうかい! そりゃあ、今までの奴が弱過ぎたんだな! だが、この張飛様は、今までの奴と比べ物にならない程、強いぜ!!」

既に数十合を撃ち合っている二人の顔は、どこか楽しんでいる様だった。

だが、いずれか勝負がつき、どちらかが命を落とす事を考えた関羽は、青龍刀を握り、戦いに参戦した。

「呂布! 悪いが貴様の命。この場で頂く!!」

「来い」

張飛が一撃を放ったと同時に、関羽も青龍刀を振るい、二方向からの刃が呂布を襲った。

だが、呂布の武芸も並大抵のものではなかった。関羽、張飛と言ふ二人の豪傑を相手に、全く互角の戦いをしていた。

「なんだ、こいつは！？ 私と益徳の攻撃を全て防いでいるだど！？」

さすがの関羽も自らの攻撃と張飛の攻撃を同時に捌いている呂布に驚きを隠せなかった。

「面白い。でも、二人でも、私には勝てない」
「なら、三人ならどうだ！！」

その瞬間、先ほど呂布と戦っていた馬超が武器を手に取り参戦した。

三対一と言う、周りから見れば明らかに勝敗が予測できる状況の中、関羽、張飛、馬超の攻撃はことごとく呂布に塞がれていた。

「こいつは、化け物か！？ 私と関羽將軍、それに張飛將軍を一遍に相手にするだど！！？」

周りで戦っていた兵士達も、いつの間にか戦う手を止め、呂布と関羽達の戦いを見守っていた。

「賈ク、まだ？」

しかし、さすがの呂布も関羽、張飛、馬超と言った、三人の豪傑を相手にするのは命懸けだった。

その時、呂布の後方から銅鑼が鳴り響いた。

「合図、来た。皆、引く」

その銅鑼の音と共に呂布軍は、一斉に退却し始めた。

「戦く 謎の参戦者く」

「敵が退却していく？ まさか、後陣で何か起こったのか？」

「いずれにせよ、今が好機。今まで、やられた借りを返す時！」

先鋒軍の馬騰、公孫さんは、敵が引き上げていく様子を好機と見て、全軍に追撃の命を出した。

しかし、関羽達に追いついた俺はこの状況を見て、諸葛亮が言っていた事を思い出した。

だが、止めようにも、既に動き始めてしまった軍を止めるのは容易ではなかった。

「木葉様！」

「諸葛亮！？ 無事だったか！？」

敵が引いた事で動けるようになった諸葛亮が、兵を率いてやってきた。

「私の事よりも今は馬騰將軍、公孫さん將軍の追撃を止めなければ！」

「だけど、今から止めても敵の軍は巳水関に入るのを阻止できないぞ」

「いいえ、まだ、間に合います。巳水関の周りは山に囲まれ、補給路も限られてしまします。そこを敵に抑えられれば、我らはもう手を出せなくなります。しかし、この場所でしたら補給路も確保できる」

諸葛亮の言う事は理解できる。でも、既に馬騰も公孫さんも追撃の命を出している。俺の軍じゃないのに止められるわけが無い。

「まだ、諦めるのは早いですよ」

そう言った諸葛亮の一言が、俺の中に光を作り出した。

「この様な事が起こった時の為、巳水関の細い道に入る前に伏兵を潜ませてあります。彼らには、敵軍を見逃し、味方の軍の進行を止めるように言っております」

「本当か！？ それなら、そいつらに任せるしかないな」

「張僚、止まるんだ！」

全軍退却している中、賈クが張僚に、突然、止まるように言った。

「　　っと！？　なんだ？　どうしたんだ、賈ク？」

「静か過ぎます。私が諸葛亮の立場なら、この辺りに伏兵……！！？　すぐに周囲を探るんだ！　もしかしたら、伏兵が潜んでいるかもしれない。いや、潜んでいるはずだ！」

賈クはそう言い、兵士達に辺りを探らせ始めた。賈クのそんな様子に張僚は心配し過ぎではないかと思っただが、黙って賈クを信じ、見守っていた。

暫くすると、捜索に行った兵士が戻ってきた。

「申し上げます！　この先、巳水関に行く細い山道にて、敵の伏兵を発見！　その数、およそ500！」

「やはり伏兵を隠していたか。しかし、500では我らを足止めするには少な過ぎる。あの諸葛亮がその様な策をたてるはずは………」

すると、今度は後方から兵士が声を張り上げ走ってきた。

「報告！！ 敵の追軍が後方に迫っております！！」

「来たか……………！？ なるほどな」

何を思ったのか、賈クは一人、納得した様に頷いていた。

「どうしたんだ、賈ク？」

「諸葛亮の狙いがわかったんだ。伏兵は我らを攻撃するためのものではなく、味方が巳水関までの細道に入るのを阻止するためのものだ。細道に入れば補給路は限られるからな」

「なるほどな。なら、こちらから伏兵に攻撃をするか？」

賈クは顎に指を置き、策を考えていた。

「いや、こちらから攻撃をして排除するのは簡単だ。今回は奴等を利用しよう」

賈クは各將軍達に指示を飛ばした。

「まだか！？ まだ、奴等に追いつかないのか！？」

追撃をした馬騰、公孫さんは敵を追い、全力で馬を走らせていた。

「馬騰殿。敵は既に巳水関に入ったのでは？」

「例え、巳水関に入ったとしても、勢いは我等にある。幾ら強固な物であろうが、問題はない」

「ふむ、確かに馬騰殿の言う通りだ」

馬騰と公孫さんの軍が、巳水関に続く細道に入ろうとした時だった。左右に生い茂る草木の中から、伏兵が現われた。

「なっ！？ 伏兵だと！？」

「！？ いや、お待ち下さい、馬騰殿」

伏兵の姿を見た公孫さんは、剣を取ろうとする馬騰を制した。

「待って下さい、馬騰殿！ あの兵は味方の兵です」

そう言って、公孫さんは兵に近付いて行った。

「その方ら、木葉の軍の者であろう。このような所で何をしておる？」

「我等、巳水関への道案内として、將軍様達にご協力するよう、命を受けて、ま、参りました」

公孫さんはどこか兵士の態度に違和感を感じたが、隠れていたのが見つかり、困惑しているのだと思った。

「しかし、巳水関への道は、この細道を真直ぐに行けばよいはずだが？」

「我々がこの先に裏道を発見しましたので、敵の油断をつき、攻撃

をするには最適だと思い、將軍様を案内させて頂こうと」

「ふむ、よかるう。では、その場所に案内致せ！」

「はっ！ こちらでございます」

公孫さんと馬騰は兵士の後に続き、横道に進んで行った。暫くすると、左右を木に囲まれた見通しの良い一本道に出た。

「ここだな？」

公孫さんが案内役の兵士に話し掛けようとした時、道の奥から声を上げ武器を片手に馬を走らせる三つの人影が見えた。

「そなたらは何者だ！？」

「公孫さんはまだ距離のある場所から、三つの人影に向かい声を上げた。」

「人に物を尋ねる時は、自ら名乗るべきだろう！！」

「我が名は、公孫さん！！」

「私は涼州の馬騰だ！！」

「公孫さんに馬騰？」

三つの影が二人の名を耳にすると、その内の一つが持っていた武器を頭上で振り回し、公孫さんと馬騰に向けて構えた。

「大将首か！？ やっほう！ 今日、俺の番だからな！？」

「わかつてる。勝手にしろ！」

そんな会話が終わると同時に、三つの影の内の一つが、突然、武器を持ち、公孫さんと馬騰に向かって行った……………。

その頃、既に巳水関に到着している賈クと張僚の下に、妙な情報が入ってきた。

「何！？ それでは、我らの伏兵3000が、何者かによって全滅させられていたと！？ その者の正体はわかったのか！？」

「いえ。しかし、僅かに息のあった兵士が、相手の数は三人と死の間際に言っております」

賈クの頭の中は混乱状態であった。

相手の軍を潰すために仕掛けた伏兵が、僅か三人によって全滅させられ、さらに近づいてきていた公孫さんに馬騰の軍も壊滅していたと言っ。

そんなことの出来る武将が世の中にいるのか？

賈クの知っている限り、敵方にそれを出来る武将が思い当たらない。呂布であれば可能かもしれないが、それは呂布が三人いた時の話だ。

「そやつらの特徴は何か無いのか！？」

痺れを切らした張僚が叫ぶように兵士に言った。

「それが、情報は現在ありません」

「くっ！ どこのだいつだ、俺達にケンカ売っているのは！？」

その時、兵士が何かを思い出したように言った。

「そ、そういえば……………」

「何か思い当たる節でもあったのか!？」

「情報と言うには、あまりに大雑把でしたので忘れておりましたが、死の間際、兵士はこうも言っておりました。長い髭^{ヒゲ}、っと……………」

「確かに、髭ならば生やしている奴は何万といる」

あまりの情報のなさに張僚も賈クも手を打つことが出来ず、被害だけを出したこの件については保留にすることにした。

それよりも、今は目の前の連合軍との戦いに集中しなければ、それを考えることも出来ないかもしれない。しかし、既に巳水関に入つたことにより、連合軍の補給路を立つ策を考えれば、勝利は目前と言つ状況でもあった。

「戦く散りゆく者く」

賈ク達に情報が入った時刻と同じ時、木葉の下にも同じ様に情報が入ってきていた。

「何だつて!? それじゃあ……………」

守れなかった事への無念から俺は肩を落とした。

そんな俺とは対照的に、諸葛亮は表情を強張らせた。

「木葉様。今回の件、捨て置けません。聞けば相手は三人。その様な者達に戦場をかき乱されては、使う策も限られてしまいます」

諸葛亮の言葉に俺は気を引き締め直した。

「そうだった。俺達は今、戦をしているんだ。そして、俺は皆の命を預かっている。何かそいつらについての情報はないのか？」

「それが、三人の内、一人は長い髭を生やしていると」

「情報はそれだけか……………」

この時、想像出来ない出来事が既に起きようとしている事を誰も知らなかった。

「はっはっは!!! 大量、大量!!!」

身長が2mはあろう大男は、先ほど打ち取った、馬騰、公孫？の首を持ち、ご機嫌な様子で馬に跨がっていた。

「たまたま、大将首だったただけだろう」

その隣りを同じ様に馬に跨がり、立派な髭を生やした大男に負けず劣らずの体格をした男が、なだめるように言った。

「何だよ？ あっ！？ もしかして、悔しいのか？」

「何言つてんだ。そもそも、お前と競つてなどいない！」

「二人とも止める！！」

他の二人に比べれば体格は劣るが、その雰囲気からはどこか気品が感じられ、二人を取りまとめる将の様だった。

「次の獲物だ」

そう言つて指をさした先には、要塞、巳水関があった。

「巳水関か……いいねえ、あそこには、大将首がたくさんいるんだよな！！」

「ちようどいい、腕試しだな。先ほどの軍は、手応えがなさすぎたからな」

「さて、じゃあ早速行くぞ。続け！！」

三人は一斉に巳水関に向けて馬を走らせた。

「ええ〜い！ まだ敵を倒せないのか!?」

連合軍の大將として後軍から見ていた袁紹は、なかなか決着のつかない事に腹を立てていた。

そこへ、大斧を片手に顔良がやってきた。

「袁紹様！ 情けない先鋒の変わりに私が言って攻め落として参りましょう！」

自信たっぷりと言った顔良の言葉に、袁紹は表情を戻して指示を出した。

「おお、顔良。頼もしい。よし！ おぬしに任せる。行って参れ！」

「ありがとうございます。この顔良、必ずや敵将の首を袁紹様の前にお持ち致しますよう！」

顔良は深く頭を下げた後、踵を返し、意気揚々とその場から立ち去ろうとした時、袁紹が背中越しに顔良に言った。

「顔良。ついでにあの木葉とか言う奴も連れて行け。弓避けくらいにはなるだろうからな。はっはっはっ!!」

「はっ。かしこまりました」

「皆、準備はいいか？」

俺は戦の準備を整え、周りの者に言った。

「兄者。私は今回の出陣には不満です」

準備を整えた関羽が俺の側まで来て、他の兵に聞こえないように言った。

「関羽將軍、それについては僕も不満はあります。しかし、総大将の命令です。逆らえば僕達が逆賊として討伐されてしまいます。ここは出陣するほかしかありません」

「そんな事はわかってる。わかっているが……………」

どうも関羽はこの戦に関しては、集中力を欠いているようだった。

「関羽、もし嫌だったら来なくてもいいんだぞ？ 張飛も諸葛亮もいるからな」

「何を言っているのです！ 兄者の命は私が死んでも守ります！」「ありがとう。でも死ぬのは無しだ」

俺は笑って関羽に言葉を返した。

しかし、俺自身も今回の戦は正直嫌なものであった。自分達が先行して巳水関に向かうという事は、弾除けになれと言われているようなものだった。後ろからは別の軍が来ているため引き返すことも出来ない。

だが、俺もこの戦いで自分について来てくれる者達を死なせたくは無かった。

その頃、巳水関に入り、籠城の準備をしていた賈クの下に緊急の報が入って来た。

「敵の軍は一万か……」

賈クの下に入って来たのは、敵の軍が攻めて来たといった報だった。

「華雄將軍に伝えよ！ 華雄將軍は兵一万を率いて応戦。今回は兵の士気を高めるため、城外にて応戦せよ！」

それを聞いた兵士は、すぐにその場を立ち去った。

「華雄將軍、その格好は出陣ですか？」

華雄は重厚な鎧に身を包み、愛用の武器を手に持っていた。

「おう！ 張遼か！ 敵兵一万が攻めて来たらしい。初戦に勝って、兵達の士気を上げよと軍師からの命があった」

（賈クから？）

「そうか。死ぬなよ」

「はっはっは！ 心配はいらん。今回は呂布も一緒だ。帰ったら、俺の武功を肴に酒を飲もう！」

華雄の言葉と武芸に秀でた呂布が一緒と聞いた張遼は、少し安堵の表情を浮かべながら返した。

「楽しみにしていますよ」

巳水関に入る吊り橋が降り、華雄、呂布を初めとする、兵一万が城外に出て敵との戦闘に備えていた。

「カー、これから来る敵は強いのか？」

「強いぞ。だから気を抜くなよ」

そう言っつて、華雄は呂布の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「カーのいたい……………」

「はっはっはっ、そう言っつな！ 戦場の中、いつ死ぬかもわからん身だ。だが、まだ死ぬ気はないがな。さて、行くか」

華雄は自らの武器を上げて兵達に合図をした。

「皆の者、出発だ！ 我らの武勇を示してやろう！」

「……カーは私が守ってあげる」

その瞬間だった。先頭の華雄目掛けて一本の矢が放たれた。

「カー！！！」

「これは!？」

呂布は矢を叩き落とし、放たれた矢の先に視線を送った。

「ひょー!？ あのお譲ちゃん、俺の弓を弾いちまったぜ!？ ありゃあ、今までの奴より楽しめそうだな!」

馬に跨った大男は弓を納め、愛用の武器を手にとった。それに合わせ、他の二人も同じ様に武器を取り、馬の腹を踵で蹴って一万の軍勢の中に三騎で突撃をしていった。

「なんだ、あの者達は!？」

華雄も呂布の視線を追い、三人の男達を見つけた。そして、三人の男達は驚くことに、たった三人で一万の兵に戦いを挑んできた。

「……カー、来た」

「全軍、戦闘準備!! 三人だからと言って油断するな!! 行くぞ!!」

一万対三人の誰が見ても明らかな戦いが火蓋を切った。

「きたきた!!! 行くぜ!!! おおおおりややや!!!」

大男は愛用の武器、蛇茅を振るった。その音は、全ての風を巻き上げ、兵士の鎧など関係無しとでも言うように、鎧ごと叩き潰していた。

「さすが、大軍相手だと戦いも面白いな!!!」

そのすぐ側では、立派な顎鬚あごひげを生やした大男が、自慢の武器、偃月刀を振るっていた。その男の攻撃も、兵士の鎧など関係無しに、鎧ごと真つ二つに切り裂いていった。

「あまりはしゃぎすぎるなよ!!! また、兄者に怒られるぞ!!!」

「大丈夫、大丈夫!!! 敵将の首を取れば問題ないって!!!」

そんな会話をしている内にも、二人の周りには次々と兵士の死体が積みあがっていった。

「おい、兄貴!!! 敵の大将はいたか!？」

「そんなものしらねえよ!!! 自分で探せ!!!」

「へいへい……あらよつと!!!」

ぐしゃ!!! つと、耳障りな音が響く。地面はまるで人の生き血をすすっている様に赤く、赤く、色を染めていった。

「お前ら、そこまでだ!!! 我らを董卓様の軍と知っての事か!？」

兵士達の後ろから立派な鎧を来た将が馬を進めてきた。

「おっ！？ やっぱり、あんたがこの軍の大將か！！ それにそのちつちやいのは、なかなかやるみたいだな？」

「ぬうう……、貴様、俺と一騎打ちをしろ！！」

「あんたと？ 構わないよ」

大男は一騎打ちの申し出を受けると、向かい側に馬を移動させた。

「我が名は、華雄！！ いざ尋常に勝負！！」

響き渡る金属音。幾重となく、交わる二人の武器。

しかし、大男の方が力で勝っていたのか、華雄はだんだんと防戦をしいられていった。

「どうした、どうした！？ もう終わりか！？ こんな実力で一軍の将を名乗るなんて、一万年はええんだよ！！」

華雄の武器が弾き飛ばされ、大男の蛇茅が華雄の首目掛けて唸り上げた。

だが、大男の蛇茅は華雄の首に届く前に止められた。

「呂布？」

「……お前の相手、私がする」

「へえ、この男の変わりにお譲ちゃんが俺の相手をするだって？ おもしれえ、泣いてもしらねえからな！！」

大男と呂布の激しい打ち合いが始まった。

「結構やるじゃねえか。あの男より楽しめそうだ!!」

何十合も打ち合う中で、次第に武力で勝るものなしと言われた呂布の攻撃が大男を押し始めた。

「おっ？ おっ？ おっ？」

すると、大男は呂布との打ち合いを止め、一度、距離を取った。

「本当にやるじゃねえか。ここまで俺が押されたのは初めてだ」

その時、後ろで戦っていた二人も大男に合流してきた。

「なんだ、まだ決着をつけていないのか？」

「うるせえ！ あのお譲ちゃん、見かけによらず結構やるんだよ！」

「ほう、それは面白そうだ。どれ、俺にも一勝負やらせろ」

「あっ！？ 待てよ！ 今は俺との勝負の最中だぜ！？」

仲間の言葉などお構い無しに、髭の大男は呂布に突進してきた。

「ほう、これは本当にいい腕をしている」

何合か打ち合った後、髭の大男は一旦下がった。

「さて、どうする、兄貴？ 大将首は目の前に二つだぜ？」

髭の大男はリーダー格の男に話しかけた。

「そうだな。お前達が手こずる姿を久しぶりに見れたのは楽しかつ

だが、大将首を持ち帰らないのはまずいな。この際、贅沢を言わず一つだけ持ち帰るか」

そう言ったリーダー格の男の視線は華雄に向けられた。

「なあ、あいつはどうだった？ 俺一人でもやれそうか？」

「ああ、俺が痛めつけといたから、兄貴一人で十分だ」

「そうか。なら、お前達はあのちっこい奴を足止めしておけ」
「わかった！！」

そして、三人の男達は一斉に馬を走らせた。大男二人の振るった武器を呂布は受け止め、その横をリーダー各の男が通り抜けていった。

「あつ！？ カー！！」

呂布は男達の狙いに気づき、すぐに通り抜けた男を追おうとしたが、その前に二人の大男が立ちふさがった。

「おっと、ここから先は行かせねえぜ！！」

「……………じゃま……………どけえええ！！！！」

その頃、呂布の横を通り抜けた男は華雄の姿を見つけ剣を抜いていた。

「その首、もらった！！」

「ま、まだ、この首をやるわけにはいかん」

ぎりぎりのところで、華雄は自らの腰にある剣を抜き、男の攻撃を防いだ。

「まだ、そんな力があつたか。だがいつまで持つかな？」

先ほどの大男との一騎打ちで、華雄の手は既に剣を握ることもままならないほど痺れていた。次の攻撃は間違いなく防ぎきれない事はわかっていたが、プライドが引くことを許さないでいた。

「カーーー！！」

「呂布！？」

その時、華雄に向けて剣を構える男の後ろから呂布が駆けつけてきた。

しかし、呂布の後ろからは大男二人が呂布を追って来ていた。

「カー、頑張れ！！ 今、行く！！」

懸命にかけてくる呂布の姿が華雄の瞳に強く映った。それと同時に、後ろから呂布を狙うように弓を引く大男の姿も飛び込んできた。

「呂布！！ 後ろだ！！」

華雄は叫ぶと同時に馬を走らせた。

「勝負の最中にどこを見ている！？ その首もらった！！」

華雄の首目掛けて振り下ろされた男の剣を、華雄は自らの右腕を

犠牲にしてそのまま男の横を通り抜けた。

「呂布!!!」

「……………カー？」

呂布は華雄の事で頭が一杯になり、自分を狙う矢の存在に全く気づいていなかったため、華雄が必死に向かってくる理由もわからなかった。

華雄は自分の馬を捨て、呂布の後ろに飛び乗った。そして、呂布の身体を覆うように覆いかぶさった。

その瞬間、華雄の身体を通じ呂布に鈍い振動が伝わった。

「ぐうう……………」

「……………カー？」

そして、華雄の身体は馬から転げ落ちていった。

「カー!?!」

呂布は慌てて馬を降り、華雄の側に駆け寄った。

「カー! カー!!!」

「……………ざ、残念だ……………お前達と一緒にもっともっと、戦場を駆け巡りたかった……………」

そう言って、華雄は震える手で呂布の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「……………俺の子もお前と一緒にくらの年だった……………呂布、お前は生きるよ……………死ぬんじゃ……………ない……………」

「カー……………」

「!?」

華雄は抱きつこうとした呂布を突き飛ばした。そして、次に呂布が華雄の姿を見た時、何かを掴もうと伸ばされた華雄の手と痙攣をする身体があった。

「よっと！ これで大将首、一つ頂き」

男は華雄の首を手にとると呂布を無視するように、引き上げて行こうとした。

「……………待て……………カーを、どこに連れて行く？」

「あー？ どこについて、決まってんだろ？ 晒すか、俺達の名を上げるための道具になってもらうのよ」

その言葉を聞いた呂布は、方天画戟を持って男に襲い掛かった。しかし、方天画戟の刃は男に届かず、二人の大男によって止められてしまった。

「どけええ!!」

「ふんっ!!」

感情に任せた攻撃では、いくら呂布と言え二人の達人相手に敵うわけもなく尻餅をつかされた。

「何をやっている。二人とも、行くぞ」

「わかったよ」

「ま、待て!! お前ら、名前、教える」

呂布の言葉に男達は馬を止め、振り返った。

「俺か？ 俺は、劉備、字を玄德」

「俺は兄貴の義兄弟おじつとで、張飛、字を益徳だ」

リーダー各の男に続いて、大男が名を名乗った。そして最後に、髭を生やした大男が名を口にした。

「俺の名は、関羽、字を雲長」

三人は名を名乗るとそのまま歩き始めた。

「私は呂布！ 呂布奉先だ！！ 絶対にお前らを許さない。許さないからな！！」

そう言った呂布の言葉は、三人の背中越しに響いていた。

「知略戦」

「何！？ 華雄が打たれただと！？」

賈クの下にその報が届けられた。その場にいた張遼はその報を聞き華雄の死を受け入れられずにいた。

「呂布、何故……何故、お前がいながら華雄を……」

「止めるんだ、張遼！ 呂布には何の責任もない」

そんなことは張遼自身にもわかっていた。だが、わきあがる感情をどこにぶつけて良いのかわからずにいた。

「チヨウ、すまない。私、守れなかった……」

消えそうな声で言った呂布の頭を張遼がぼんぼんと叩いた。

「わるかった、呂布」

そう言って、張遼はその場を立ち去った。

「呂布、あいつも辛いんだ」

「……わかってる。私、カーの仇をとる」

「そうだ。それが私達の出来る華雄への手向けだ」

賈クの言葉に呂布は黙って頷いた。

「伝令！！ 敵將華雄將軍が何者かに討ち取られました！！」
「何！？」

華雄戦死の報は、俺の元にもすぐに届いた。

「木葉様。僕は華雄將軍の戦を見た事があります。関羽將軍、張飛超軍には劣りますが、そこらの將と比べれば一つも二つも飛びぬけた豪傑です。その華雄將軍が打たれるとは、相当な豪傑に違いありません」

諸葛亮の言うことはもつともだ。

「……でも、華雄將軍を討ち取ったって事は、そいつらは俺達の仲間なのか？」

「いや、そうとも限りません」

「どうしてだ？」

「僕が見た限り、連合軍の中で関羽將軍、張飛將軍に並ぶ豪傑は、僕らの軍にはいませんでした」

「だったら、誰だって言うんだ？」

そこで話しは元に戻ってしまった。

「確かな事は言えませんが、馬騰將軍、公孫？將軍を襲った者達の可能性もあります」

諸葛亮がそう言った時、扉の近くで人が倒れる音が響き渡った。

「な、何だ！？」

急いで駆け寄るとその武将の顔に俺は見覚えがあった。

「す、すみません……………木葉殿は……………どちらに……………」
「俺ならここにいます」

俺がそう言うのと武将はじっと俺の顔を見た後、慌てて後ずさり片膝を地面につけ頭を下げた。

「ぶ、無礼を致しました！ この度、木葉様の軍に加えて頂きたくお願いに参りました！」

「仕官をしたいってこと？ それはわかったけど、君はひどい怪我をしている。早く治療しないと……………」

俺がそう言うって武将の手を引こうとした時、後ろから関羽が驚いたようにその武将に近づいていった。

「马超……………？ 马超殿ではありませんか！？ そのお姿いったいどうしたのです!？」

「か……………関羽將軍……………」

马超が関羽の顔を見ると、とたんに大粒の涙を流し始めた。

「……………くっ……………わ、私が……………私がついていながら……………父上を……………父上を……………」

「貴殿の父君の事は伺っています。ですが、あまり悲しむと身体に良くありませんよ」

関羽の言葉を聞いた马超は俯いた顔を勢いよく上げて、精一杯腹に力を入れていった。

「私は父の敵を討つため、この身を粉にして働きます！　どうか木葉様の一兵として、軍にお加え下さい！！」

そう言つと、馬超は気を失つてしまった。

「馬超！？」

「すぐに医者を呼んでくれ！！」

「ふあ〜〜……………」

俺は大きくあくびをしながら、月明かりが照らす廊下を歩いていった。

「……………ん？　あれは……………」

ふと目に飛び込んで来たのは、一人の武將の姿だった。

「馬超か……………？」

「え！？　こ、木葉……………様……………」

突然声を掛けられた馬超は、その相手が俺だとわかると慌てて振り返り頭を下げた。

「あ、うう……………こ、この度はご迷惑をお掛けしました！」

「あゝ、良いよ。別にお礼なんて。それに俺はいつも皆に頭を下げ

れるのは慣れないんだ。それより身体の方は大丈夫？」

「はい。この程度の傷、問題ありません」

「そっか、よかった」

二人はしばらく夜空を照らす月を見上げていた。

「……あ、あの……し、士官の件なのですが……」

(そう言えば、そうだった)

「うん。馬超みたい強い人は大歓迎だよ。これからよろしく」

あっさりと士官を許された馬超は、じっと俺の表情を見た。

「……い、いいのか……？」

「だから、良いつて言ってるじゃない」

「私の目的は私念だ。父の敵を討つ為なら貴方達を裏切るかもしれない」

「うん。構わないよ。馬超がそうしたいなら、そうすればいい。誰にだって目的や夢がある。それがあから強く生きていける。だから、馬超は馬超でいいよ」

「……ふ、ふふふ」

馬超は驚いた表情を見せた後、小さく笑った。

「……面白い方だ。気に入りました。この馬猛起、只今より身命を持って貴方をお守り致します！」

「ありがとう。じゃあ、改めてよろしく、馬超」

次の日。木葉は巳水関攻略のため、各將軍達を集め、軍儀を行った。

「さてと、皆を呼んだのは、巳水関への攻撃についてなんだけど…

………諸葛亮」

「はい」

諸葛亮は一礼をして話を始めた。

「巳水関攻略について、華雄將軍がいなくなった事により、我々が優勢になっている事は確かです。しかし、関羽將軍、張飛將軍、馬超將軍の三人と互角に戦った豪傑呂布と知略に長けた賈貢は健在。この二人を相手にするには、我が軍の被害も相応な覚悟をしなければいけません。そこで、先ずはこの二人を引き離します」

「引き離すつて、巳水関を守る要の武將をどうやって………」

諸葛亮は机に広げられた地図を指でなぞった。

「現在、敵の兵力は巳水関に集中しております。このまま正面から攻めても巳水関を落とす事は難しい。しかし、こちらならどうでしょう？」

そう言つて諸葛亮が指をさしたのは、巳水関と同様に堅固な関、虎牢関だった。

「巳水関に兵力が集まっている中、こちらの守りは手薄になっているでしょう。そこで我が軍が虎牢関に兵を向けたとあれば、敵は兵

力を割かなければいけなくなります」

「ちよつと待ってくれ！ どうして敵が兵を割くって言い切れるんだ？」

俺は諸葛亮の話の間に割り込み聞いた。

「簡単な事です。虎牢関と巳水関は敵にとって守りの要。もしこれの一方でも落とされれば、周りを囲まれ、物資の補給を断たれ、死を待つ以外に無くなるからです」

「なるほど。話の途中で悪かった。続けて」

そう言うと、諸葛亮は一礼をし話を再開した。

「先ずは張飛將軍」

「オウツ！」

「張飛將軍は、兵二千を率いて虎牢関を攻撃して下さい。しかし、戦いの戦況がよくなければ無理に攻撃は避けてください」

「わかった」

「次に関羽將軍」

「ハツ！」

「関羽將軍には、やはり兵二千を率いて頂き、巳水関の側に伏して敵が虎牢関に救援に行こうと関の外に出ましたら、これを急襲して下さい」

「承知した」

「そして馬超將軍には、木葉様の本隊に加わって頂き、その武勇を奮ってもらいます」

「わかりました」

諸葛亮は話を終わると一歩下がった。

そして諸葛亮と入れ違う形で、俺は一歩前に出た。

「策は決まった。各自準備が整い次第、出陣してくれ！」
「ハッ！」

「賈ク！！」

勢いを緩めず、張遼は賈クの部屋に飛び込んだ。

「張遼？ 一体どうしたのだ？」

「はあ、はあ……………連合軍の奴等が虎牢関に兵を向けた」

「虎牢関にだと？」

「巳水関に兵を集めているから、虎牢関の守りは薄くなっている。
急いで救援に！」

報告を終えた張遼は出陣の準備をするため部屋を後にしようとしたが、賈クは張遼を引き止めた。

「待て、張遼！」

「なんだ？ 早く救援に行かないと、そう長くは保たないぞ！」

「落ち着け！ 敵の狙いはこの巳水関だ。我々が兵力を割いた時を
狙っているのだ」

「だが、いくら巳水関を守ったって、虎牢関が落ちれば同じだ」

「張遼の言う通りだ。だからこそ、闇雲に動くのではなく、策を持つて動くのだ。
張遼。すぐに呂布を呼んでくれ！」
「わかった！」

張遼はすぐに呂布を賈クの部屋に連れてきた。

「張遼、呂布。時間は一刻を要する。早速、始める。敵は巳水関の守りが堅いと見るや、守りが手薄になっていく虎牢関を狙ってきた。巳水関、虎牢関のどちらが落ちて我々の勝利はなくなる」

賈クは机の上に地図を拡げ、それを囲む様に張遼と呂布は近付いた。

「まずは張遼が兵一万を率い、先行して虎牢関の救援に向かってくれ。勝つても深追いはせず、虎牢関を守る事を第一とするんだ。そして呂布……」

賈クの話の途中で、一人の兵士が慌てて部屋に入ってきて息も整えないまま報告をした。

「ほ、報告致します！ 只今、巳水関前方の茂みに敵伏兵を発見！ 数、およそ二千！！」

「何、伏兵だと！？」

「ハッ！ 物見の者が何かが動いたのを見たとの事で調べましたところ、敵の伏兵にございました！」

想像以上の敵の行動の速さに、賈クは再度頭の中を整理し、状況を冷静に分析した。

「……………そうか。敵の狙いは巳水関だけにあらず、また、虎牢関

だけにもあらず、二つの関を一度に落とす事」

「どう言う事だ、賈ク？」

「張遼。今、敵の策が完全に読めた。虎牢関への攻撃は我らの兵力を割くため。しかし本当の目的は、我らを関から出し殲滅する事だ。伏兵もそのための配置だろう」

賈クの言葉を聞いた張遼は今までよりも鋭い目付きで言った。

「なら、どうする？」

「敵の策が読めれば、あとは裏をかくのみ。先ずは呂布」

「……………」

「呂布には一万五千の兵を率いて、虎牢関の救援に向かってもらう。呂布の武勇があれば、そう簡単に落ちる事はないだろうが、十分に注意をするのだぞ」

「……………わかった……………」

「次に張遼には一万の兵を率いてもらい、巳水関の側にいる伏兵にあたってもらう。そして伏兵の殲滅後、すぐに敵本隊に向かい、攻撃をしてくれ。私も同時に一軍を率いて攻撃をする。予想外の攻撃のため、敵の戦意は落ちているはずだ。ここで敵を一掃した後、私達も虎牢関に向かい残りの兵を一掃すれば、我らの勝利だ」

「よし！ 呂布、出陣の準備だ！」

そう言って、張遼は意気揚々と出陣の仕度のため、部屋を出ていった。

「戦く虎牢関 呂布軍VS張飛軍」

「あれが虎牢関か。確かに頑丈そうな関だ」

張飛は虎牢関を前で敵の軍勢を確認していた。

「確か軍師は、無理に攻めるなって言ってたな。あれを無理に攻めるなら、この軍勢じゃ足りねえ」

すると、虎牢関の扉が開き、中から軍勢が出てきた。

その軍勢の先頭には、張飛、関羽、馬超と互角に渡りあった呂布の姿があった。

「あいつは……」

張飛は呂布の姿を見ると、以前の戦いを思い出した。

「呂布！！俺と一騎打ちしろ！！」

「……お前……誰？」

「俺は木葉兄貴の義弟、張飛だ！！」

「……張……飛……？」

その名前を聞いた瞬間、呂布の雰囲気が変わった。

「張飛……張飛……！！」

呂布は感情をあらわにし、張飛に向かって一直線に向かってきた。

「おおおおおおおおお！！！」

呂布の方天画戟と張飛の蛇矛が激しくぶつかり合った。

「張飛　！！！」

「何をそんなに大声出してやがる！！！」

数十合交え、勝負の行方は一向に見えてこなかった。それほどに二人の実力は拮抗をしていた。

「何故、カーを殺した！！！」

「カー？　誰だ？　そんな奴、俺は知らねえよ！！！」

両軍の兵士達もその戦いを固唾を吞んで見守っていた。すると、張飛軍の中から一騎、呂布と張飛に向かってきた。

「張飛將軍！　そこまでにして下さい！」

「馬超！？　何故ここに！？」

「軍師様が張飛將軍にもしもの事があつては困ると、密かに將軍の軍にまぎれていけと」

「軍師が？」

馬超の乱入で呂布への注意がそれた。

「張飛　！　カーの仇　！！！」

「張飛將軍！？」

馬超は呂布の方天画戟が張飛に届く前に止めた。

「馬超!?!」

「くっ……ちよ、張飛將軍……これ以上の戦いは無益です……」

馬超は呂布の攻撃を必死に止め、張飛に陳言した。

「軍師様もむやみに攻めずと……」

張飛は馬超の言葉を聞き、冷静さを取り戻した。

しかし、張飛とは対照的に呂布の感情は収まらなかった。

「はあああああああ!?!」

「くっ!?!」

「馬超!?! はあああ!?!」

体制を整えられていない馬超を襲った方天画戟を、張飛の蛇矛が止めた。

「馬超! 退くぞ!?!」

そう言つて、張飛は呂布の方天画戟を弾き返すと、素早く方向転換し、自軍に向かって馬を走らせた。

「あっ!?! 待て!?!」

呂布の赤兔の早さは、普通の馬の数倍早く、張飛と馬超に追い付こうとしていた。

だが、張飛軍から呂布に向けて矢が放たれた。

「くっ!？」

呂布は矢を弾き返したが、その間に張飛、馬超は自軍まで辿り着いた。

「うああああああ!！」

呂布は感情を吐き出すように声を上げた。

そして、一騎で張飛軍に飛びこんで行った。

その呂布の行動を見て、呂布軍も大将を守るために張飛軍に突撃を開始した。

「張飛 ー!！」

「何だつてんだ!？ だが、向かってくるなら、容赦はしねえ!！」

張飛軍、呂布軍入り乱れの大混戦となった。

だが、多勢に無勢、張飛軍は押しに押された。

「張飛將軍! 兵は総崩れです! ここは一度退き、体制を整えましょう!！」

「くっ!？ わかった。皆の者、退け、退け!！」

張飛の掛け声をきっかけに、張飛軍は我先にと逃げ出した。

「戦、巳水関・虎牢関、さ」

呂布軍との戦から退き、距離をとった張飛軍の状況は悲惨だった。

「畜生！ 兄貴から預かった兵の半分が……」

二千いた張飛軍の兵は、半数まで減っていた。

「張飛將軍。まだ、戦は終わってません。我等が軍師様より受けた命は、敵兵の足止め。命を落としていった兵達に、勝利と言つ花を贈りましょう」

「……馬超……」

落ち込んでいた張飛だったが、馬超の言葉を聞き、顔をあげた。

「ばっかやろう！ そんな事、お前に言われなくたってわかってるんだよ！」

その張飛の態度を見て、馬超は小さく笑みを零した。

「それでは張飛將軍。次の策を立てましょう」
「もちろんだ」

しかし、張飛から出る策はなかった。

「ば、馬超！」

「はい？」

「ちなみに、お前の策を言ってみろ」

「私ですか？ いえ、いえ、私の様な新参者の策など」

「いいから言ってみろ！」

張飛の言葉に負け、馬超はゆっくりと喋り出した。

「では失礼致します。先ほどの戦にて我等は軍の半数を失いました。このまま挑んでも負けは見えております」

「じゃあ、どうするんだよ？」

「奇策にて敵を翻弄し、時を稼ぐのです」

「その奇策ってのは？」

「はい」

すると、馬超は懐から小さな巾着袋を取り出した。

「これは？」

「軍師様から預かってきました物になります。窮地の際、開く様に言われましたが、今がその時」

そう言って馬超が開いた袋の中には、小さく折られた紙が入っていた。

「これか」

張飛が袋から紙を取り出した。

「なに、なに？」

関羽は諸葛亮の指示により、巳水関の近くに二千の兵と姿を隠していた。

そして、張飛軍の虎牢関への攻撃が始まったのか、慌ただしく巳水関の扉が開かれた。

「来た……」

関羽は馬上にて機を伺っていた。

そして、ゆっくりと手を上げ、突撃の合図を送ろうとした。

「ぎゃああー!？」

突撃響く声に、関羽は慌てて振り返った。

「どうした!? 何があったのだ!？」

「後方部隊が敵の攻撃を受けております!！」

「なに!？」

関羽も敵に背後から襲われると思っていなかったため、動揺が走った。

「関羽將軍! 味方は総崩れにございます!！」

「くっ……一度体制を立て直す……退け!！」

「……はあ、はあ……ひ、被害は!？」

「はっ! 只今の戦により、兵は三分の二まで減りました!！」

「……くっ……」

関羽は拳を握り締めた。

だが、体制を立て直すにも、相手との兵力に差があるため、どうにもならなかった。

「皆に伝えよ。これより我等は敵の追撃に備える。直ちに防壁を作るのだ！」

関羽の言葉を受けた兵は、直ぐに軍内へ消えた。

「これ以上、被害を大きくするわけにいかない」

「さすが賣クだ。我が軍の勝利だ」

張遼は関羽軍との戦に勝利し、勢いを持ったまま、追撃を命じた。

「今こそ好機！ 敵将の首をとるんだ！！」

「放てえ！！」

だが、そんな張遼軍に対し、矢の雨が降り注いだ。

「な、何だ！？」

張飛軍敗戦の報告を受けた俺と諸葛亮は、直ぐに軍を動かした。

「やはり、虎牢関には呂布が行った様ですね」

「ああ、諸葛亮の言った通りだ」

諸葛亮は今回の賈クの策を読み切っていた。
自分の策を賈クが読み、裏をかかれる事も。

「木葉様。急ぎましょう！ 関羽將軍がやられてしまつては、元も子もありません！！」

そうして、俺と諸葛亮の本隊は関羽率いる軍が伏している場所に向かった。

すると、既に関羽軍は退却した後で、追撃に向かう敵軍を発見した。

「諸葛亮！？」

「はい。全軍構えを」

そうして移動する足を止め、弓兵は弦を引いた。

「今です！ 放てえ！！」

その瞬間、勝利に酔い追撃をする敵軍に矢の雨が降り注いだ。

「ぎゃああ！！」

「敵だ！？ 敵の伏兵だ！！」

「何だと！？」

敵将も俺達の登場は予想外だった様だ。

「木葉様。このまま、攻撃を続けましょう」

「よし！ 馬超！ 馬超！！」

しかし、一向に返事は帰って来なかった。

「あれ？ 馬超！ 馬超！！」

「木葉様。馬超將軍でしたらあそこに」

そう言って諸葛亮の指を追って行くと、虎牢関にいるはずの張飛軍の姿があった。

「えっ！？ 何で張飛がここに……それに馬超まで……」

「話は後ほど致します。今は好機です。全軍に突撃命令を！！」

「わ、わかった」

「な、何だ……一体どうなってる！？」

張遼は木葉軍の本隊と張飛軍の出現に混乱していた。

「くっ……血路を開いくんだ！！」

さすが、武力にも優れた張遼である。

向かってくる敵兵を次々に切り倒していた。

「見つけたぞ！ お前がこの軍の大將だな！！」

「何者だ！？」

「涼州の馬孟起！ 大將首もらい受ける！！」

飛び込み際に馬超は槍を振ったが、張遼は見事にその一撃を受け止めた。

「お前がああ涼州馬騰の娘か。なかなかのじゃじゃ馬だな」

張遼は馬超の槍を力任せに弾き返した。

「っ……さすが大將首。そうじゃなくちゃ面白くない！！」

そして幾度となく交わる武器。

「はああああ……っ！？」

次に馬超が攻撃を繰り出そうとした時、乗っていた馬が地面に開いた穴に足を取られて転倒した。

「うああああ！？」

そして馬超が顔を上げると、張遼の偃月刀の刃が目の前にあった。

「不運なれど、この勝負はお前の負けだ」

そう言つと張遼は刃を引いた。

「お前は面白い。この様な決着は認めん。いずれまた、戦場で会おう」

張遼は素早く方向転回し、馬を走らせた。

「あ……っ！！」

馬超は拳を堅く握り、地面を殴った。

「……っきしょう……ちくしょう……！」

「戦々巳水関・虎牢関 弐」

「追撃です！ 出来る限り敵の戦力を減すのです！」

俺達は敗走する兵に追撃をした。
逃げる兵を撃つのは容易く、敵兵は屍を築いていった。
そんな中、俺は地面に倒れる馬超の姿を見つけた。

「馬超！？ 大丈夫か！？」

「……木葉様……」

馬超の側には、馬超愛用の槍と倒れている愛馬がいた。

「馬超」

俺は馬超に向かい手を差し出した。

「こんな所にいたら危ないだろ？ ほら、こっちに乗りなよ」

「……っ……」

一度、手を出した馬超だったが、拳を作り、武器を拾った。

「手助けは無用です。私はまだ戦える」

「あっ、馬超！？」

馬超は槍を持つと、戦場に駆けて行った。

「馬超なら大丈夫か。誰か!? 馬超の馬の手当てを頼む!」

命からがら逃げられた張遼は、兵達と共に巳水関に向かっていた。

「一体、何故奴等の軍が巳水関にいたのだ!」

すると、正面から軍隊の影が見えた。

「敵か!」

「張遼、無事だったか!」

「賈ク!」

張遼の前に巳水関を守っているはずの賈クが現われた。

「どうしたんだ?」

「すまん。私の策が諸葛亮に読まれていた。虎牢関の敵兵は距離を取り、陣に数多くの旗を立て、呂布には兵がいる様に見せている隙に、巳水関に移動をできていたのだ」

「しかし、それならば兵が遠目から見ても、人のいない事くらいは気配で気付くはず」

「そこが盲点だった。呂布の軍は初戦にて勝利を収め、相手との兵力差から気持ちが悪んでいたのだ。そこを諸葛亮に付け込まれた」

張遼の表情が曇った。

「諸葛亮……恐ろしい奴だ。それで賈ク。これから、我等はどうする？」

「一度、巳水関に戻り、体制を立て直そう」
「わかった」

「門を開けよ!!!」

巳水関に到着した張遼は、守備兵に告げた。
しかし、巳水関内からの反応はなかった。

「門を開けよと言ったのが聞こえないのか!？」

その瞬間、巳水関の城壁の上から矢が放たれた。

「なっ、何をするのか!？ 私だ! 張遼だ!」
「馬鹿か!？ 立ってる旗をよく見ろってんだ!？」

その時、城壁から張飛が姿を現した。

「何!？」

巳水関の城壁には、木葉軍の旗が立っていた。

「お前らが夢中で逃げてる間に、俺が軍師の言った通り巳水関に来

てみたら、守備も何もなかったから、簡単にとれたぜ」

「まさか！？ 私と張遼がいない時を狙って……」

賈クは悔しさを滲ませた。

自らの策が敵に読まれ、利用していたつもりが、逆に利用されていたからだ。

「……しよ、諸葛亮……」

「賈ク、ここには危険だ！ 一度、長安まで退こう！」

「仕方がない」

そして、張遼、賈クは軍勢を引き連れ、長安に向かっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1229d/>

夢の中で～不思議な三国志～

2010年10月8日23時05分発行